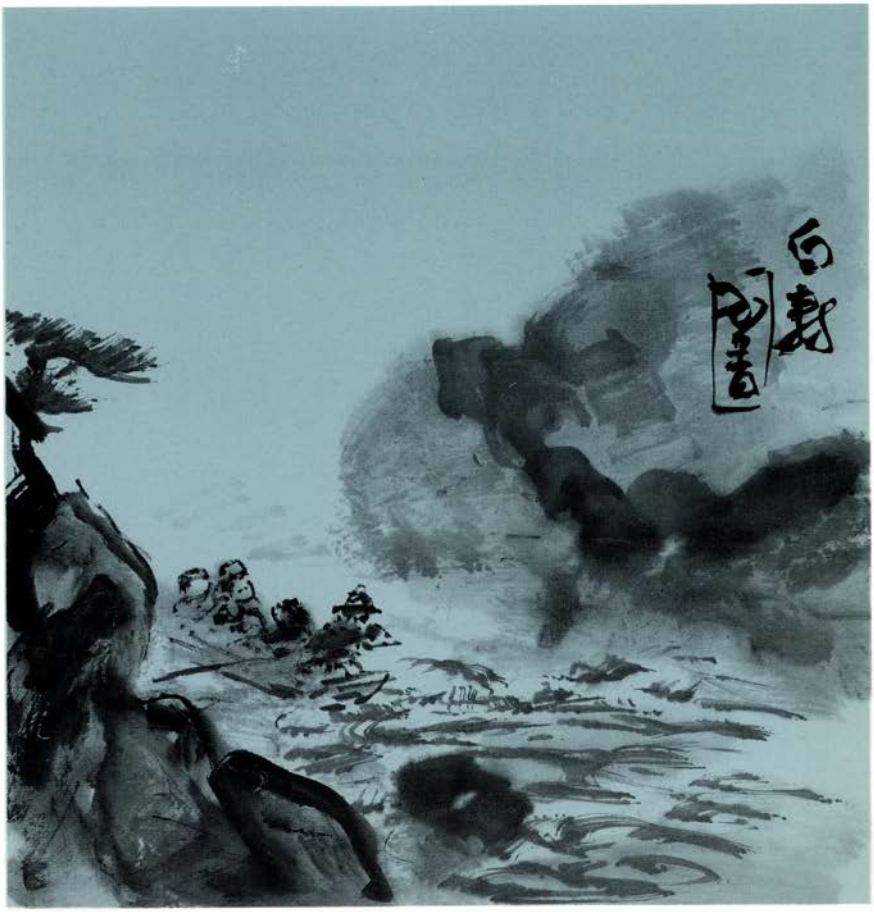
川柳塔

平成十四年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九〇五号



日川協加盟

平成十四年度六賞発表

No. 905

十月号

第8回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と　き　10月6日（日）午前10時－11時
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3Ｆ生駒
（近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441）
議　事　平成13年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成14年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と　き　同　日　　午前11時開場・午後1時開会
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　4Ｆ金剛 中・西
表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし　「誤読もまた楽し」　　桒原道夫
兼　題　「のりもの」　（大阪）　山本希久子 選
「光　る」　（富山）　島　ひかる 選
「天　下」　（鳥取）　西原艶子 選
「おいしい」　（和歌山）　桜井千秀 選
「雑　魚」　（広島）　小島蘭幸 選
「無　限」（事前投句・締切りました）　河内天笑 選
◎各題2句・欠席投句拝辞
出句締切 正午・午後4時半終了予定
会　費　２０００円（記念品呈）当日いただきます

＜懇親宴＞

と　き　同　日　　午後5時―7時半
ところ　ホテル・アウィーナ大阪　3Ｆ葛城
会　費　７０００円（会席料理）
宿　泊　ホテル・アウィーナ大阪　８０００円（朝食付）

○事前投句および懇親宴・宿泊の申し込みは締切りましたが、同人総会（同人のみ）・記念句会の当日参加も歓迎しますので、ふるってご出席下さいますようお願い致します。

主催　川柳塔社

俄か漫才師

河内天笑

平成六年（94年）お盆過ぎの頃、番傘川柳本社の正司珠梨さんから、突然に電話がかかりました。

「来月十五日の敬老の日に、天笑さんの歌で月子さんのフラダンスをお願いできない？、ボランティアで」

その頃、毎年秋に宮口笛生さん宅の芋煮句会にお邪魔しており、珠梨さんとはそこで友達になっていました。

聞けば彼女は奈良の壺阪寺の特別養護老人ホームに勤めていて、今年の敬老日の企画を任されているとのことです。ちょうどその日は空いていましたので、快くOKしました。

当日は土砂降りの中、車でホームまで二時間弱。アロハやムームーなど衣装や小道具を用意していざ出発。

運転しながら、会場をイメージして曲の打ち合わせをしているうちにふと、

「お客さんはご老人で、しかも体の不自由な人が多いはず。そこで皆さんにフラダンスが楽しんでもらえるやろか」

と気になりだし、助手席の月子に言いました。すると

「漫才師やったらええのにね、私達」

「それや！漫才やろう」

突然のひらめきに私の血がわくわくしてきました。

さて問題はネタです。丁度その直前の九月四日に関西空港がオープンしていたので、これが一番ホットな話題だと思いつきました。老人の団体が新空港でうろたえている場面を、面白おかしく描いてみよう、と決定。それから会場に着くまでの約一時間、私がボケで月子がツッコミというシナリオを、まるで川柳の席題をつくるようにどんどん練り上げました。言い回しの練習をくり返しながらいよいよ到着。

出迎えてくれた珠梨さんに「出し物」の内容を説明しましたところ大喜び。そこで大きな紙と墨汁を用意して頂き「河内家天笑・河内家月子」と大書し、俄か漫才師の設営がととのいました。

ミスハワイ・暁しんよろしく、大きめのウクレレを抱えてまかり出た私達を、会場は拍手喝采で迎えてくれました。

どろなわのシナリオでしたが、お年寄りを主人公に仕立てて、失敗をくり返すのが大当りして爆笑また爆笑。その反響にこちらもだんだん乗ってきて、約二十分の漫才は思いのほか楽しく演じることが出来ました。

本命のフラダンスは午後からという事で皆さんと一緒に昼食の時、

「あんたらヨシモトから来てくれたんか」

の問いに、

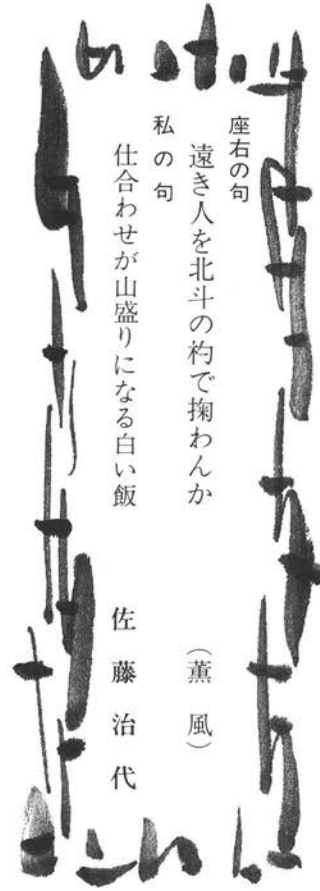
「ちがうちがう」

といくら説明しても聞いてもらえぬ一幕もありました。

楽しい時間を過ごし、皆さんと記念写真を撮りホームを辞す時、あるおじいさんに、漫才とフラダンスとどっち良かったか尋ねると、

「そら、漫才に決まってるがな」

その一言ですーっと癒されました。



座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか　（薫風）

私の句

仕合わせが山盛りになる白い飯　佐藤治代

川柳塔　十月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　俄か漫才師……河内天笑…（1）
句碑ふたつ……小島蘭幸…（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…（4）
自選集……奥田みつ子選…（54）
水煙抄……東野大八…（79）
麻生路郎物語（10）……（82）
平成十四年度　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞
　　苗香の花賞・一路賞・各地柳壇賞
愛染帖……波多野五楽庵選…（92）
■エッセー　家庭教師物語……酒井一壺…（95）
誹風柳多留二四篇研究　46……（96）
苗香の花……政岡日枝子選…（98）

句碑ふたつ

小島蘭幸

虹を抱く人のモラルは美しい　正宏

沖浜正宏さんの句碑は、岡山県久米南町の下弓削川柳公園に建立されている。玉島で開催された環境川柳大会で倉敷市長賞に輝いた作品である。平成13年4月15日に行われた除幕式は、実に感動的であった。花束を抱いて満面の笑みの正宏ご夫妻を見ているだけで、胸が熱くなったのを、今でもはっきりと覚えている。正宏さんは、二度の大手術を乗り越えて来られた不屈の闘志の持ち主でもある。そして、何事にも前向きなのだ。句碑建立も西日本川柳大会に出席された折、同封された句碑建立の案内を見て即決められたのだ。

僕の句碑わが分身と撫でている　正宏

セレモニーが終ったあと一人になった正宏さんは、句碑を我が子のように愛しい目で見つめ、いつまでもいつまでもやさしく撫でておられた。マイクロバスを借り切って総勢20名の参加は、まるで吟行句会の趣きがあった。帰りのバスの中で、誰からともなく今日の嘱目吟を作ろう、という声が上がったことでも頷けると思う。

「家」……市丸晴翠選……(100)
一路集「積む」……神原まさと選……(100)
「西」……徳田ひろこ選……(101)
初歩教室「黒」……吐田公一……(102)
秀句鑑賞［同人吟……舟木与根一……(104)
　　水煙抄……嵯峨根保子……(106)
追悼　麻生アート君の思い出……阿萬萬的……(107)
九月本社句会……(108)
第17回国民文化祭・とっとり2002案内……(114)
各地柳壇（佳句地十選／篠原いつふみ）……(115)
柳界展望……(129)
十月各地句会案内……(130)
■編集後記……楓楽・希久子……(132)

座右の句

糟糠の妻が隣で欠伸する　（虹汀）

私の句

あるときは逆回転の夫婦独楽　樋口輝夫

小鳥来よ羽やすからむ虹の碑ぞ　不朽

選は私がさせて頂いた。

天と地の元気もらって今日がある　半覚

正畑半覚さんの句碑は、広島県大崎町大串の奥本英壮氏邸に建立されている。大竹で開催された国民文化祭で、大竹市議会議長賞を受賞された作品である。半覚さんは小学校の元校長先生で、20歳のとき赴任した小学校が大崎だったのだ。奥本氏は当時小学校6年生。半覚さんの初めての教え子の一人である。奥本氏は自宅を新築される折、庭に是非先生の句碑をと懇願されたのだという。平成13年7月28日に、奥本邸で開催された正畑半覚句碑建立の集いは参加者18名、奥本氏の家族と同級生を含めると出席者30名の盛会であった。句碑は奥本邸から露天風呂へ続く石段の上に建立されていた。松と見事に調和した句碑に思わず拍手をした私である。記念句会は実に楽しいものであった。霧天風呂に入浴後、奥本氏自慢の鯛めしを囲んでの小宴は正に師弟愛という美しい絆のなせる技であると思った。

熊蟬もにいにい蟬も句碑で鳴く　蘭幸

鯛めしを囲んだ句会忘れない　静風

半覚さんと私が選をさせて頂いた。

正宏さんと半覚さんは竹原川柳会の会員で川柳塔の誌友としてご活躍されている。今すぐにでも川柳塔同人として推薦したいのだが。

川柳塔

河内天笑選

ほろびゆくものみな美しい花火
値段にはうるさく数字にはよわい
番号をもらって国に認知され
平凡な顔を非凡にメイクする
人並みと平凡やさしいようでむつかしい
いやがられ煙たがられて頼られる

広島県　藤解静風

この世とはつぎつぎ用のあるところ
大辞典まだ生きている字を拾う
強風に浮く体重でよく歩く
年金の枠で交通費が嵩む
だしのもとに馴れてしまった舌音痴
増長を叱る大自然の脅威

八尾市　髙杉千歩

お化けよりお菓子が怖い血糖値
ニセモノの胸で天下を盗る美人
女房を母さんと呼ぶ日本国

黒石市　相馬一花

こだわりを捨てると嫁はすぐ決まる
角を出す妻は牛より恐ろしい
泥臭いパパは我が家の宝物

寝屋川市　岸野あやめ

わたくしの通帳にある忍一字
政治家の眼は国民に向いて居ず
絆でもあろう柵でもあろう
持ち物に地図と磁石と万歩計
母と妻まったく違う玉子焼
ごめんねとあの時言えば言えたのに

富田林市　藤田泰子

単線の駅白鳥とすれちがう
半円形　太平洋にかかる虹
地平線みながら食べるサンマずし
神の山罪多き身に滝しぶき
引き出しにいつか着る気のMサイズ
老いたとは思ってないが老いている

痩せ薬眠り薬が良く売れる
ケイタイをまたねと閉じる恋心
世直しの政治が老いを軽く捨て
トンネルを抜けるとそこはラブホテル
機械には人の未来は任されぬ
ピンハネにタカリ　イジメと世は移り

羽曳野市　三好専平

人間のエゴが捨て去る季節感
年ごとに夢盛る皿がちびて来る
旗色を読むと臆病風が吹く
旗幟鮮明男は後ろふり向かぬ
そこそこの野心を抱いて老いられず
神仏に頼ると転び癖がつく

弘前市　高橋岳水

背番号十一桁で繋がれる
自販機は二千円札皆拝辞
チームよりファンが強いタイガース
一人旅時には尻尾ちらつかす
旅行先認めてもらう土産買う
ご神前小銭ないのに気がついた

三田市　北野哲男

いつ来ても故郷の川話し好き
ほんものの自信堂々ゆるがない
日本一を返上したいひったくり

大阪市　本間満津子

三十八度地球過労の熱を出し
ままならぬ気温は上がる株下る
藍浴衣風はやさしい京団扇

大阪市　前たもつ

赤ん坊十指広げて乳を飲む
生む方も生まれる方も必死なり
年中無休五臓六腑に油差し
わが鼾聞える時は絶好調
エレベーター太い尻尾を人に向け
故里の空見える階買いました

枚方市　海老池洋

止まり木で気づいた僕の誕生日
頼み甲斐ないが心配してくれる
合掌をするかに果てた油蝉
ひとつ消えひとつ生まれて沼の泡
走らねば倒れる僕も一輪車
私も終わりに近いオルゴール

東京都　播本充子

五分三分ノースリーブと若返る
じいちゃんとばあちゃんになる夏休み
ばあちゃんが恐竜博士だったとは
綿菓子が萎んでお祭りが終る
交代を乾いた声で告げられる
嫁三人甘え上手とちゃっかりと

災害の島に児童の六時間
帰郷した笑顔で埋まる三宅島
原爆忌祈り新たな蝉時雨
展示した千人針に気圧される
寺社巡り何と多くのセミの穴
戸籍からまた子が抜ける祝い歌

東京都　後藤早智

一日に一度脳味噌掃除する
犬かきでどうにか泳ぐ夢の中
お通夜の帰り道草してしまう
整備万全消防車霊柩車
研修会ちょっと勉強しては飲む
ああ不況社長の鼻が低くなる

弘前市　高瀬霜石

お煮しめは粗食にあらず老いの膳
音痴でも気分よければ恋の歌
ステテコで昭和一桁冷奴
安物も美人が持つとブランドに
余生には大風呂敷の用がない
豪邸を見惚れる仕種怪しまれ

唐津市　宗水笑

えひめにも何時まで続く牛肉禍
肩の荷をつくづく年を思い知る
信じてた運命線に裏切られ

松山市　丹下美津子

リストラも泣くな受け皿待つ田畑
亡き父にどこか似ている人選ぶ
流石立秋朝夕涼し足の裏

香芝市　大内朝子

空襲の哀れをボクは知っている
暑いから身辺整理滞る
世渡りのうまい男と腕を組む
簡単に言うけど介護大変よ
老醜へ開き直っている鏡
ひと夏の恋もおしまい鰯雲

京都市　高島啓子

読み終えて時間損した週刊誌
とれとれが大事鰯と週刊誌
旅慣れて鞄ひとつのJALパック
ひとさまのカバンは重いものである
古本屋消えて丼屋になった
箸袋箸置きに折る芸妓はん（上七軒ビヤホール）

海南市　三宅保州

履歴書と身の上話とは違う
欺される方も悪いと叱られる
争って血は争えぬものと知り
お客様のお札に御辞儀しています
KONISHIKIは痩せたら小錦ではない
活断層に催眠術を効かせたい

大阪府　籾山隆盛

親不孝八月三十日生まれ
お中元去年とおなじ数がきた
油照り町にカラスの影もなく
遭難のケルン積まれた山を行く
君恋しハートに羽根が生えてきた

大阪府　米澤俶子

蝉しぐれひととき止んで時報きく
やもり殿雨戸繰ります事故注意
ビーチバレーUVカット気にもせず
漢方の名に騙されたやせ薬
肌が合うなんて巧みにほだされる

大阪府　澤田和重

他人から見れば一人を羨まれ
ふと読んだ本から知恵を借りてくる
磨かれた靴が出不精誘い出す
毒舌で鳴らしているが恐妻家
平成の不況動じぬ戦中派

和泉市　中川楓

吾が重み包丁にかけ南瓜切る
夕焼けの岬も恋も朱に染まる
嫁ぐこと祖先に告げる墓参り
問診に偽り少し酒の量
ゴーヤ好きそれから話盛り上がり

和泉市　岡井やすお

この島に獅子を仕留める智者居らず
改革で銀行減って民不便
騎馬戦へ声援が飛ぶシルバー席
一年を菊に捧げて菊花展
芒団子デパートで買い月見かな

茨木市　藤井正雄

終戦の日を語る祖父止める祖母
冒険はしない子がいる妻がいる
高齢少子まさにわが家はその見本
JR休め休めと旅を売る
善処するなどと見直ししない策

大阪市　西出楓楽

主婦業もお願いします五日制
奉ればいいわけでないうるさ型
おふくろの味甘い日も辛い日も
いい日だな神が近くにいるらしい
散りぎわの花の美学はほんものだ

大阪市　古今堂蕉子

横向いて明日から休んでくれという
駅看板不況の風に中身なし
早口で話どんどん飛ぶ人だ
若くなる裏わざあればよいのにね
秋祭り五穀豊穣土地の色

天に流星地に阿波おどり盆の夜
夏バテに四万十川の鮎到来
野球してるどころかダイエー日本ハム
よそ事でない妻の乱 姑の乱
見も知らぬ人の善意がうれしくて

大阪市 板東倫子

毎日が記録更新この暑さ
ドラえもん展 天保山のミュージアム
不況飛ばしを河内音頭の団地族
精霊を送る忙しい水供養
夕立が欲しい雷さんは恐い

大阪市 町田達子

リストラに首輪無い犬羨まれ
捨身なら人生楽に生きられる
過去の罪ドラマになった懺悔の記
何故こうも迷うの御神籤一枚で
裏街に隠れています情報屋

大阪市 小糸昭子

盆準備うきうき客を待っている
クーラーのお陰でリズム狂わない
裏返ししてみたくなる良い話
鉛筆はすごい着想抱いている
怒るのは猿だけでなし過包装

大阪市 神夏磯典子

無抵抗主義がしっかり持つ理想
私利私欲まかり通って道かすむ
あわぬ値に農家が捨てるねぎ白菜
人の事聞いていらぬ苦ふやすまい
有事法頭かすめるあの空襲

大阪市 中田あい子

耳底に里の祭りがまだ残る
まだ女淋しがりやで身勝手で
法螺吹きの笛の音色が高すぎる
ほろ酔いの酒がこぼした内緒ごと
この花に心を許し水をやる

大阪市 津村志華子

阿波踊り不景気とばす連の数
初恋はまだ胸深く生き残る
華やかさ保つ女に金が要る
サイレンの音他人事のように聞く
ボーナス日心弾んだのは昔

大阪市 鈴木トヨ子

盆帰省さあ座布団の支度から
盆行事すむ頃欲しい夏休暇
ゴキブリよ家まで建ててあげてるに
どっちも好き比較できない京都奈良
病名を告げずしっかり手を握る

大阪市 清水絹子

大阪市　大川桃花

帰るなり降り出す雨にVサイン
染み込んだ音頭に手足踊り出す
礼を言う父もめっきり老いて来た
嘘みたいな値段ついてるかぶと虫
太鼓叩く少年の頬凛として

大阪市　川端一歩

初盆の友が二人もいるつらさ
生きている限り八月語り継ぐ
万葉の作者不詳と出合う夏
絵日記のヒマワリを見て邪を払う
この国の勤勉を見る朝ラッシュ

大阪市　鶴田遠野

夫婦旅風景ばかり撮る夫
妻は旅日替りで友呼んで呑む
炎天下瀕死のセミに集る蟻
特割の旅宿のチップが惜しくなり
子守りからパチンコ玉がこぼれ落ち

大阪市　奥村五月

有名校卒業してもまだ無職
米寿でも父は頑固に仕事する
迎え火に母も久しい薄化粧
減塩に塩で固めた鮎がでる
冷や奴浴衣美人と生ビール

大阪市　小泉ひさ乃

無洗米老母はやっぱり研いでいる
真っすぐに生きて味方が減ってゆく
困ったら帰る家あり母がいる
言い足りぬ想い冷凍保存する
電子辞書頭の程度試される

大阪市　川原章久

五十五年昔北京と様変り
城壁が消えて古城に遺る門
郊外のトイレ戸が無い紙もない
長城の八達嶺は霧の中
病む友に北京土産の厄払い

大阪市　津守柳伸

素晴らしい夢見こっそり温める
どん底の暮らしファイトの助け合い
わっと来てさっと飛び出るツアー客
一病を持ってメロンと切れぬ縁
鯛釜めし炊けて静かになった客

大阪市　津守なぎさ

橋杭岩息飲む自然夕陽炎ゆ
橋架かり串本節が唄えない
白良浜入道雲とたわむれる
青藻取る老人パワー逞しい
食欲で体調計る自己管理

大切な人の話は口にせず
健康法この世に未練ありったけ
未練あるけれどステーキ食べ残す
いたわられ過ぎると心萎えてくる
ルス電の声ばかりなり午後三時

大阪市　中澤伽羅

気まま旅　人の出合いが嬉しくて
バスツアーたのしい絆生れてる
古希が来て急にやさしくなる娘
恵まれた人のパワーは眩しくて
年金で余生たのしく生きてます

大阪市　榎本日の出

二度とない今日と言う日を生きている
へそ出しをじっと見ている背広たち
塩加減ふたりの主婦はゆずらない
目も耳も口も弱って意地が出る
年金が丸い背中を包んでる

大阪市　杉澤汀

わだつみの叫びぞ今日の土用波
脱いだ殻ふり向きもせず蝶の舞う
妻旅行元栓きれとメモ置いて
どちらかが何時かこうなる独りめし
ダイエットするには空の高すぎる

大阪狭山市　矢野梓

暑さ吹き飛ばし球児の夏終る
遠花火心も空も赤く染め
潮の香を纏って入る露天風呂
頑に拒んだクーラー好きになり
口上が長くビールの泡消える

交野市　森本弘風

年金で水より安い発泡酒
今更に窓辺涼しくするスダレ
暑い午後コーヒーよりも生ビール
うしろから撮った頭に亡父を見る
酒飲みで厄介やけど好きな人

河内長野市　加島由一

もみじ前線祭の笛が澄んでくる
茄子の花泣いて叱った母のこと
天高くなすびも鯖も妻は好き
キャスターが美人ばかりでつまらない
朝顔も一期一会の中にあり

河内長野市　山岡冨美子

賑わいを残して暮れる祭り笛
マスゲーム一糸乱れぬのが怖い
一杯で効かなくなった痛み止め
火の鳥を抱いて出番をまつ女
懐かしい笑顔そろえる祭り寿司

河内長野市　水谷　正子

条件が揃いすぎてて縁遠い
菊が咲くあの猛暑堪え凛と咲く
新世紀妙薬多く疲れます
秋祭金髪の娘の祭足袋
清原がバッターボックス　ガムを噛む（オールスターで）

河内長野市　村上　直樹

酔うほどに青春切符お前　俺
遠吠えの犬もひとりか月見酒
午前さま向いの犬にお辞儀する
孫と酒酌み交わす夢果すまで
吟行は鉛筆一本酒一升

岸和田市　岩佐　ダン吉

月並な言葉なんだが温い味
サングラス外せば恐い顔がある
壮絶な死とは言うまい自爆テロ
同じ星ひっそりとある青テント
七転びのままで私は果てている

岸和田市　高須賀　金太

観念の貌でイサキが釣り上がり
養殖になれば大トロ食えるかも
しまアジよ君も養殖だったのか
純和風イワシの煮いたのが好きだ
だぼハゼと言われてもいい食らいつく

岸和田市　原　さよ子

突き当る度に本音をさらけ出し
適当に利用しあって嫁姑
適当に書斎にしてる台所
夜通しの頑張り効かぬ歳になる
好奇心まだまだ老いず辞書を繰る

岸和田市　宮野　みつ江

盆仕度より小田和正のコンサート
六度目のお盆大事に経を詠む
恐いもの見たさの出合い系サイト
命までかける恋など絵空ごと
還暦のときめき欲しいダンス靴

高石市　浅野　房子

熱帯夜つづき命の灯がゆらぐ
すぐ顔に出る正直な人らしい
一歩引き二歩も引くから舐められる
大きな声で言えないことを言いにくる
男手がほしい布団の上げ下ろし

富田林市　片岡　智恵子

舞台裏妻子に見せぬ意地がある
赤い夕陽にマニキュアが負けている
結婚のときから七つあった癖
父の忌が巡ると耳に祭り笛
立派だな噂の渦に流されず

未練とはかくも一途に人を恋う
成行の相合傘も嬉しいね
金魚の帯母の青春だったろか
アルバムの中は昨日の事のよう
反省の猿は元気でいるだろか

堺市　山本半銭

耳鳴りは終章の曲かも知れぬ
先生の座ったところ上座です
わたくしの走る姿は見とうない
カラオケは短くワークシェアリング
カラオケは楽しみながら楽します

堺市　志田千代

何十年ぶりかで妻と手を繋ぐ
孫できて嫁の愚痴言うことも減り
親しらず抜いたことまで知らなんだ
面映ゆく娘と見てるメロドラマ
高所閉所速い暗いもみな恐い

堺市　和田つづや

猛暑にもめげずはびこる雑草だ
救急車で一週間の避暑に行く
退院をシャワーとビール待ち構え
水琴窟妙なる調べ五感打つ
連れ立った叔父叔母　母の盆参り

堺市　源田八千代

パーキンソン君そういじめるな友じゃない
鈴虫を放し飼いする老夫婦
テント村住めば都さ銀河澄む
ブリッジに夕虹ほのと夢二の忌
廃線路まだ幻の汽笛鳴る

堺市　渡辺さだを

健康の秘訣に会話付け加え
外出にカルチャーさえも浮かれてる
父の忌に命の重さ考える
青ジソがバッタの命繋いでる
夕立にひまわり息を吹きかえす

堺市　齋藤さくら

遠浅に泳ぎ習った恩がある
皮下脂肪今年も欠伸した水着
暑かろう無沙汰の父母に蓮手桶
百日紅暑さ横目に白く咲き
欠多数ヒーロー待っている土俵

堺市　西村りつえ

甲子園スタンドの母祈るのみ
訥弁で妙に説得力がある
飼い犬に弱み握られてるわたし
人生にリセットボタン欲しくなる
法事だけ顔を合わせる従兄弟たち

堺市　村上玄也

四条畷市　吉岡　修

疑似餌には乗ってはこないしたたかさ
お別れに指紋いっぱい残しとこ
流れ矢をうまく抜けずに化膿さす
職はなれいまやなんでも妻の御意
敵味方大国さまが決めてくる

吹田市　山本　希久子

落し穴あり医学書も法律も
ぬかみその蓋から祖母の香がこぼれ
詫び状一通朝一番のポストまで
熟年の恋の段差にけつまずく
とりあえずビールひと息つきました

吹田市　早川　棲世

書く規制戦中戦後そして今
隣国をおこらせるため記者とばす
株下げても吉本跳梁するテレビ
男老い野を駈けた日の顔残す
人死んだあたり万札乱舞する

吹田市　穴吹　尚士

漫才の調子で値切る大阪弁
ひょっとしてボケかも知れぬもの忘れ
顔立ちが俺に似ている娘の嘆き
犬だけが起きて待ってた午前二時
米寿まで生きる積りの預金帳

吹田市　太田　昭

方言が里帰りする盂蘭盆会
駄菓子屋が一軒消えた里の過疎
日々好日喧嘩のできる老い二人
俺の愚痴聞いてくれるか冷奴
青紫蘇を三枚摘んで朝の飯

吹田市　岩屋　美明

助っ人に孫連れてゆくバイキング
二次会ではぐれた頭戻る朝
栄転と左遷行き交う新幹線
退屈な犬を阿呆にする鴉
幽霊も足を掻いてるお化け小屋

吹田市　大谷　篤子

雪の日もおんなじワイン飲んでいる
影法師迷いながらもついて来る
未練断つ傘の雫を切りながら
高い木の鳥は争いごと見てる
健康で洗濯物を高く干す

豊中市　安藤　寿美子

沖縄に見果てぬ夢をおいて来た
クーラーも椅子も私もポンコツに
仏にも夜叉にもなれたのは昔
急行にうっかり乗ったものおもい
孫に出すハガキは本音ちょっぴりと

豊中市　江見見清

ご自身のスキャンダルまで本にする
口答え減って子供は親離れ
白髪染め兼ねておしゃれな色にする
おばあちゃんデイサービスよおしゃれしよ
そのへんの認めで良いと捺さす印

富田林市　中井アキ

古漬けのおいしい宿で聞く民話
またひとつ私を騙す花ことば
ときおりに懐かしくなる大家族
玉葱をみじん切りして恋終える
ブルースが響くあの日の港町

富田林市　大橋鐘造

朧月遊び心に炎をつける
一彩を足して私の虹にする
再会へ昔の顔でやってくる
大の字になれる私の町がある
風の呼ぶ方へ転んで運つかむ

寝屋川市　森西

何の咎かな蟷螂が身構える
星影のワルツ熱唱して消える
何すんだよとハムスター洗われる
大くしゃみ小さいくしゃみ冷房車
盆踊りに見染められたと祖母笑う

寝屋川市　江口度

お毒味の酒はまじめな顔をして
お尻だけ西洋かぶれになるトイレ
港からお寺へデートコース組む
紫陽花のジョークがわかるカメレオン
馬券買う楽しみ増える三連馬

寝屋川市　冨山ルイ子

ひどい言葉心に棘が深く刺す
友に愚痴こぼして心なぐさめる
趣味の会　遠出娘にとめられる
百歳の母は元気でまだ呆けず
宅老所の真似事　老友をたんと呼ぶ

寝屋川市　坂上高栄

恙無く明日の米を研ぐ平和
進歩して水も空気も汚れ行く
仏壇を開く日課の初仕事
波寄せる二羽の海鵜のたじろがず
破りたい憎い手紙が破れない

寝屋川市　太田とし子

追伸の文字が慌てているハガキ
ぎりぎりになるとひょっこり知恵が出る
意見してシッペ返しの意見きく
耳の栓はずして聞かぬ面構え
お釈迦さんあなたの国は揉めてます

寝屋川市　酒井勇太朗

金婚の妻が眩しくいとおしい
古希ですよ小さな車にせよと妻
姑自慢家の嫁御は栄養士
人生の終焉夢に見る恐さ
今遊ぶ金と暇有り意欲なし

寝屋川市　平松かすみ

若いなあ病名だけは五十肩
左手が痒い所へ届かない
腕一本つくづく有り難きものよ
目も耳も達者な義母に負けている
短冊へ孫の美人を願います

寝屋川市　籠島恵子

風立ちぬ白露を踏んだ足元で
ふるさとも飛んでいるかい赤トンボ
虹をさがす狐の嫁入りに出合い
美しいおじぎ私もあのように
赤とんぼ今日本中飛んでいる

羽曳野市　吉川寿美

人間の驕りを捨てたゴミ置き場
味噌汁も御飯も旨いまだ死ねぬ
油断かな味方に梯子はずされる
胸の奥開かずの部屋が一つある
夕茜この世は生と死の表裏

羽曳野市　徳山みつこ

夕立に息吹き返す夏の景
医療法顔が厳しくなってくる
わからないようにヨイショをしておこう
風からも情報もらう聞き上手
物忘れするのも神の思召し

羽曳野市　安芸田泰子

胸の灯を消さずに去った憎い人
いたわりを素直に受けぬはぐれ鳥
距離おいて見れば長所が光り出す
流行を着こなす母を遠く見る
ひまわりを見上げて婆の腰がのび

東大阪市　谷口義

一日の終りビールで清めとく
口紅も一緒に食べた昼ごはん
鞄に入れたとこまでは覚えてる
池の鯉あなたも少し肥りすぎ
ふとした縁で生涯の友に会う

東大阪市　安永春

がっかりの世相どうなるこの日本
信じ合う絆大事に半世紀
曖昧な返事も阿吽夫婦哉
あるがままふたりの午後の茶の香り
三人の婿の比較を問われても

東大阪市　北村賢子

いたずらに心をそそることなかれ
叱咤する態度の裏にある情け
譲られた席へとまどい隠せない
心の奥を見すかしている眼が怖い
かごめかごめ後ろは好きな男の子

枚方市　安達忠央

愛憎の風吹き荒れて恋さなか
生きているうちはさわいでくらしたい
終電の前にきっちり飲み終える
嫉妬心生まれて恋もほんものに
よんどころない事情にて子が生まれ

枚方市　宮川珠笑

空白が怖い月間予定表
年寄りも気ままに暮らす核家族
天窓に空の恵みを配られる
譲られた席に会釈を出来ぬママ
義歯めがね補聴器杖に支えられ

藤井寺市　高田美代子

スケジュール一方的に立てられる
しおらしく見せてドッコイ隙が無い
一粒の砂に気分を損なわれ
激しさをおくびに出さず火のおんな
血統書卑しい真似はしてならぬ

藤井寺市　楠昭子

眠そうな顔で戦に行く電車
誰に似たママは整形美人なり
マイホームも僕も疲れてきたようだ
落ちこんで変なうわさをたてられる
ライバルにも暑中見舞いを出そうかな

藤井寺市　太田扶美代

元気かと聞かれて少し考える
とりつかれました苦瓜のにが味
みょうがの根何を探しているのです
突っ張っていないと落込んでしまう
阪神のあの頼りなさが可愛ゆいの

藤井寺市　鴨谷瑠美子

身のためにアドリブ二つ三つ持つ
太陽とにらめっこするハイウエー
象使い象の弱点知っている
デッサンのあとに別れのある果実
場違いで心が浮かぬコンサート

松原市　小池しげお

駅の傘少し小さいなと思う
警察は悪い人だけ来るところ
身を守るくすり一合半と決め
被害者になった話が終わらない
猫の名を変えるネズミが居ないから

五勺ずつ飲んでも減ってゆくお酒　　箕面市　岩津　ようじ
帝京大志願算術上手な子
無精髭イチロー以来叱られず
死にに来た娑婆でまだ働いてはる
わが脳の写真血管左巻き

自己嫌悪ばかり成長せぬ私　　箕面市　出口　セツ子
消えるから憧憬を抱く夢と虹
弱いから弱さは見せぬように生き
家族とは愛とは風に問う独り
ネバーギブアップ明日へ奮い立つ

人事のみ後生大事に外務省　　守口市　井上　桂作
不信任保守の長野の茶番劇
君が代をどこで覚えたサポーター
ニッポンと叫ぶ姿の頼もしさ
サポーター道頓堀でミソギする

怒ったらきまって河内弁になる　　八尾市　生嶋　ますみ
傷口をつつくやさしい顔をして
老眼鏡温い言葉にすぐ曇り
正直な鏡をうらむ風呂あがり
まだ傘寿どんどん増やそ笑い皺

川風に吹かれゆかたもいいもんだ　　八尾市　神原　まさと
百均の世話になってる身の回り
帯状疱疹　神の鞭跡かと思う
思いきり振ったバットに悔いはない
墓参り暑さ労るように雨

命ある限りはかない夢を追う　　八尾市　井尻　民
その昔夫がくれた偽ダイヤ
隣から座ぶとん借りて喪があける
杉良の幕間にそっとパフはたく
六時には帰る夫をもてあます

ぼんやりとすごす時間が長過ぎる　　八尾市　村上　ミツ子
元気ないよその花にも水をやる
こころの内を隠す化粧が厚くなる
へそで茶を沸かしているの見付けられ
ワン切りにうっかり乗ってしまいそう

帰りたいなあ秋の祭りの笛太鼓　　八尾市　宮崎　シマ子
逢いたいなあ悪ガキ時代の友達に
食べたいなあ漁れたてのあの鱧の味
嗅ぎたいなあ稔り豊かな稲の香を
行きたいなあ鈍行の好きなフルムーン

八尾市　篠原　いつふみ

遠花火昔の人の住む辺り
大阪城じりじり攻める青テント
これでもか生地切り詰めた海水着
好きに生きそれから若く見られてる
世話好きの過ぎる男で疎まれる

八尾市　長谷川　春蘭

美しく老いよと夏の便り来る
ためらいつ秋草々の花鋏
思い出さぬままの会釈や夏帽子
一目散駈ける外なし揚花火
筆塚に蜻蛉見えて筆供養

相生市　中塚　礎石

愚痴の裏見え隠れする通夜の席
ワンマンも涙にもろいとこがある
過半数中途半端の手も入れる
遺言書互いに書いた夜の夫婦
中道になった余生のわび住まい

芦屋市　黒田　能子

頼まれて力不足を悔いている
すぐ顔に本当が出る父である
青春の音で吹いてるハーモニカ
降り際になると探している切符
母さんはめったなことで寝込まない

尼崎市　田辺　鹿太

よそ行きの顔が出てくる美容院
詳しくは知らない妻の青春期
無駄口を叩くと寒い風に会う
中年が値踏みをされる求人誌
逢う度に射すくめられる仁王の目

尼崎市　春城　武庫坊

星のない空見て明日を思案する
頂上を越えて弱気な風に遭う
盆間近　祈る姿の蝉転ぶ
噂話包んで運ぶ苦労人
向日葵も首をかしげて終戦忌

尼崎市　春城　年代

胡瓜ぱりぱり少年のごと荒々し
黒揚羽ふわっとわたしの庭揺らす
蝉しぐれ激しく老いの侘住まい
あせもくしゃくしゃ老女もはたく天花粉
外遊の子に会いにゆく京土産

尼崎市　長浜　澄子

酷暑日本離れてサマークリスマス（ブリスベン）
キャビンよりブラボー　シドニーの夜景
レバノン行きの青年と逢い緊張す（機内）
娘の厄を背負ったらしい不整脈
時間持て余しロンドン橋唄う

尼崎市　山田耕治

老眼に小さな値札いじわるい
終戦日少年の日の草いきれ
晩節がふらついている一人酒
戎橋ここだけ傘を差せという
人はよく食べると思う機内食

尼崎市　内田美也子

甘くみた風邪に苦しむ夏異変
未だ現役勇気を貰うバイト先
盆供養ご先祖様が揺れ合って
あやとりが母を童女にしてくれる
繕うた話はすぐに穴があき

伊丹市　小熊江美

バランスを採って仲良い嫁姑
生きるとは世間の風に挑むのみ
この猛暑やる気根気も失せてくる
物捨てる事に慣れてる今の嫁
食細くなって充電など出来ぬ

川西市　西内朋月

物忘れますますひどくなる猛暑
株相場未練たらしく聞いている
仏壇の花をしょっちゅう枯らしてる
棺桶にダイヤの指輪惜しみなく
アルコール飲んでごまかす歯の痛み

川西市　米原雪子

大粒の雨跡残し走り雨
思い切り打ち水したい水不足
目一ぱい休みを生かすエネルギー
注射器のように血を吸う蚊のお腹
繰り返すさよなら勝ちの名場面

三田市　久保田千代

夢心地氷河にかかる虹を見る（北欧にて　4句）
ムーミンのルーツ訪ねてフィンランド
眠れない夜を迎える白夜かな
ふたりきり異国の鐘の下に立つ
子供にも合わす物差し持ち続け

宝塚市　嵯峨根保子

戦いの挽歌かなでる鰯雲
内視鏡はらの黒さも捨ててくる
プライドを低い枕で眠らせる
おおよそで人を測っていた不覚
響き合うタクトは捨てた凡夫婦

西宮市　山本義子

いつもグウ出す彼にチョキ出してやる
納得はせぬが輪のなか抜けもせず
父は背で喜怒哀楽を語ってた
せせら笑うお腹の虫とうなぎ屋へ
源氏物語　男はんいとおいそがし

西宮市　西口いわゑ

夫の留守自由が気抜けしています
雲よ雲たのしい旅をしておいで
神様のタクトで夫婦しています
装うてみてもわたしの顔である
美しく生きたいものよ花の前

西宮市　門谷たず子

言えなんだ言葉に重い鳩尾よ
納得のいかぬ言葉が胃にたまる
馴れという言葉にすこし癒される
偽善者のわたしを嗤う昼の月
その先は神の采配待つばかり

西宮市　緒方美津子

雲流れても傷癒えぬニューヨーク
食べ歩きそろそろ終り心太
長崎にせめてテレビの黙禱す
伴走をしたりされたりああ夫婦
戦力外通告ママチャリ泣いている

西宮市　牧渕富喜子

許すことばかりになってしょぼくれる
まとまらぬ中を早々蝉が鳴く
肩すかし握った拳の捨てどころ
水嵩が増して出た杭みな沈む
真紀子節すごいパンチがあったのに

姫路市　古川奮水

ユニクロかイーストボーイか子が決める
手のひらを握って開く阿波おどり
喜寿過ぎてひる寝日課に空けておく
五時からの反省会はビヤホール
高原で話が弾む北斗星

奈良県　渡辺富子

夏の街鎖骨美人が闊歩する
去る人の噂呑み込む波がしら
クリスタル女の嘘が透けてくる
淋しくて笑い袋を持ち歩く
合鍵のその後の行くえ謎のまま

奈良市　米田恭昌

無礼講嵌められていたお人好し
幽霊の噂が地価をまた下げる
カラオケ喫茶　昼の宴の女史女傑
飛ぶ鳥を落した友に見るかげり
短足の僕を気遣うローヒール

橿原市　居谷真理子

男ども重い鞄を提げたがる
伊達男から来た万年筆の文
真夏日の豆腐明治の祖父恋し
きんきんに冷えたグラスを出す小店
この寿司を食べさせたいと思う恋

大和郡山市　坊農柳弘

刈り残す情けに揺らぐススキの穂
月見酒狸囃しを遠く聴く
絵手紙の柿も熟した母の里
月見団子母の温もり里の味
父の喝やんわり効いて秋夜長

和歌山市　桜井千秀

住基ネット貧乏金持ち仕分けせず
十一桁に存在感のあるわたし
個性的と言われて孤立してしまう
パーセント強い味方にして主張
耳鼻科通い声高同士打ち解ける

和歌山市　牛尾緑良

父という仏に未だ馴染めない
脇役の父の遺影が笑ってる
拡大鏡見たくないものまで見える
大の字になっても暑い熱帯夜
連中と呼んで頼れる悪い友

和歌山市　福本英子

吸殻をポイ捨てで行く美観地区
通夜帰り友と決めてる珈琲屋
娘に浴衣母ジーパンの夏祭り
クーラーの下で気を吐く扇風機
手の届くところに美味い他家の枇杷

和歌山市　細川稚代

ほんとうの仲間だ痛いことも言う
乗りついで筧の水に会いにゆく
風鈴が本物の風待っている
午前二時やっとねむりにつくタイム
カルピスの味あの日あの人往ったまま

和歌山市　松原寿子

手を浸す源泉きみの胸にある
熱い胸なら倒れて見たい萩の花
心読み取る瞳にまたもしてやられ
こだわりも想いも捨てて突っ走る
耐え忍ぶ心に秋の雲が浮く

和歌山市　木本朱夏

読みさしの詩集と降りる海の駅
針のない時計と遊ぶ二度童子
目覚しをあの世この世の境界に
地図にない川を渡って父母還る
おしまいのページに伏せてある火種

和歌山市　榎原公子

六十は微妙　女かおばさんか
才たけて女は二重人格者
多年草風が吹こうと吹くまいと
どっぷりと浸かってふやけ出す鯣
頂点が狭くて風に下ろされる

和歌山市　青枝鉄治

文化祭だけは張り切る落ちこぼれ
宝石を見せたくて行くクラス会
頂点で転ぶと鬼が寄ってくる
マナーなど言うておれない特売日
定年の河童気ままに波へ乗る

和歌山市　古久保和子

汗だくへ裏も表もない素顔
逃げ場ない暑さ信号機を睨む
和泉ナス歯にしみとおるほど冷やし
アシナガバチの腰の括れが許せない
悪戯の好きなモナリザの流し目

和歌山市　福井桂香

訪ね来て情けにふれる津軽弁（川柳塔みちのく大会　3句）
盃を重ねて津軽三味に酔う
桂月の碑に会う青池のほとり
さかなさかなほうれん草は一思案
目頭を気付かれぬようオシボリで

和歌山市　田中みね

戦闘開始暑い一日はじまりぬ
欲も得も無くて真夏のノーメーク
嘘ばれてもあっけらかんで憎めない
柳友とだんごになって行く夜市
それとなく礼の催促くる電話

和歌山市　吉村さち子

暑いねと言わなきゃ次の言葉出ず
泥沼を抜けると毬も弾みだす
孫の顔揃うお盆の庭花火
そうめんまで偽装表示をする世相
脳細胞減って昨日が出て来ない

和歌山市　楠見章子

十代を燃える駅前ミュージシャン
蝉だけは夢の中まで鳴きにくる
抱き締めるとするっと抜ける反抗期
優しさは休みやすみが丁度いい
口べたの男立派なアドバイス

和歌山市　山根めぐみ

ほんまもの分る退き際別れ際
追腹を覚悟しながら介護妻
くま蝉のとても小さな砂時計
お大事にピンクの桃はすぐ腐る
思い上がり今叩かねば叩かねば

和歌山市　上地登美代

にが瓜が夜市の話喋りだす
雑草も息絶えだえの夏の天
大小はあれ政治家の私利私欲
乱暴なあなたにさせてしまう酒
ブランドの鍋で即席ものを煮る

鳥取県　谷口次男

健康でそこそこ金があればよし
停電が一番怖いコンピューター
雑音を吐くとラジオは叩かれる
人間は百害あって一利なし
空財布ヒートランドで熱射病

鳥取県　上田俊路

八月の風は祈りを知っている
空しくても反核叫ぶ原爆忌
冷房の中の八月敗戦忌
クーラーの室で談じる温暖化
住基ネットやがて徴兵背番号

鳥取県　西原艶子

廃ガスを浴びて野の花咲き誇り
太陽の彩をもらったプチトマト
絵に描いてみたい白桃みて帰る
箸置きが二つになって広い部屋
好きだからいっしょに歩くいばら道

鳥取県　新家完司

ボス猿を見て思い出す二　三人
悪口を言う時猿の口になる
悪人が吐いた息など吸わぬよう
欲ばかり増えてぐっすり眠れない
死者のことだけ想うべしお葬式

鳥取県　小谷はるみ

原色の車が走る田舎道
面倒な式は挙げずに共白髪
人生のチャンスは素手で掴みたい
細い眉　今日の決意を込めて画く
足枷と手枷のなかにある平和

鳥取県　土橋睦子

お茶漬けと畳が似合う日本人
白むくげ朝の力をくれて咲く
掃除機に吸い込ませてる負け戦
血を吸った藪蚊が重い尻をつく
負けて勝つ母のことばを今想う

鳥取県　土橋はるお

心機一転　皿を一枚叩き割る
両親の命もひとつずつですよ
うきうきする女につっかい棒をする
尻っ尾振ってついて行くけど殺される
ユニークに男が映る水たまり

鳥取県　岩崎みさ江

分け入れば森には温かい風が吹き
車窓から見る炎昼のアルバイト
根を下ろしたら活断層の上だった
シャワー全開行水のつつましく
撞木鮫きっと神代の昔から

鳥取県　黒田くに子

同郷の客へ訛りもあたたかい
交替のナース　ピチピチギャルの足
太っ腹見せてふところ空っ風
あんた誰　何言ってるの娘だよ
数え唄　母のこだまがよみがえる

鳥取県　田村きみ子

手に取って見れば憎めぬ毒の花
悪口は恐くて他言しかねます
飽食時代なのに梅干欠かせない
ニラの花もう秋ですね話そうよ
予定にないお誘いがあり服を選る

鳥取県　鳥羽直市

実る秋村が一度に動き出す
豊かさが飢えた昔を忘れさせ
ネクタイを外して声も丸くなる
恙なく生きたい今日に灯をともす
留守電に他人ことばで声送る

鳥取県　鳥羽玲子

夏好きも自信なくしている猛暑
おしゃべりの下手な同士で向かい合い
ゆうゆうと生きてるように見えるだけ
足折れて愛一段と深くなり
食べ方も教えるテレビ　師とたより

鳥取県　石谷美恵子

孫台風去んで疲れと淋しさと
秀才とママが錯覚して困る
手間ひまをかけない妻の冷や奴
面白くやがて淋しいボケ話
快方へ向き動きだす欲の皮

鳥取県　鈴木公弘

ちちははの介護に追われながら老い
ため息の底に沈んでいく給与
エアコンのない寝室に僕ひとり
見なおして利権のほうへ向く政治
息切れの続く財布を抱いて寝る

鳥取県　羽津川公乃

欲しいだけ貰う太陽エネルギー
秋風に乗って年金減る噂
日替りの仮面で今日はええにょうぼ
古稀過ぎて夢がなかなか膨らまぬ
一時間コース電話の友二人

倉吉市　最上和枝

ちぎれ雲拭えば光る空の碧
ピカソの絵何だかんだと高値つく
記念日は語り明かして夜が白む
痩身が欲しくて毒をのまされる
インターネット世界に網が張ってある

倉吉市　松本よしえ

椅子三つなるべく端に席を取る
仏壇のお花を替えて娘も帰る
障子紙煤けて破る子もいない
一枚の紙が重たい逮捕状
白蟻駆除のおすすめに来た男前

鳥取市　植田一京

日記帳ややこしいこと書かずおく
ハードルの高さに体追いつけず
この町が好きで朝晩散歩する
まん丸い月に本音を見すかされ
夢ばかりてんこもりにし生きてゆく

鳥取市　有沢せつ子

赤ちゃんの注射待つ児も痛くなり
雷は小太鼓がいい児の昼寝
憎しみを込めて叩いた蚊が逃げる
一滴の油　鋏の機嫌取る
無理するな言ってくれるが手伝わぬ

鳥取市　山本益子

指切りをすっかり信じ明日を待つ
リハビリに歌う童謡ハトポッポ
素手で食うにぎり飯こそ無礼講
人間は禁止の柵を越えたがる
人格のレベル上昇苦戦する

鳥取市　福田登美

戦中を思い出させる芋の蔓
ひたむきに人の言葉を学びとる
輪の中に晩学ひそと肩並べ
退くことの出来ぬ余生に鞭当てる
他人の振り真似て小石に蹴躓く

鳥取市　岸本宏章

ビアガーデン均等法が生きている
オクターブ落した声で言い聞かす
葬儀屋の時計狂ったことがない
売るほうは無駄とは言わぬ化粧品
いのししも実りの秋を待っている

鳥取市　岸本孝子

願いごとばかりで重い笹の枝
うれしいと大きな声になってくる
限定というから買ってみたくなる
母さんが頭の痛い夏休み
夕立が胸のつかえを持って行く

鳥取市　録沢風花

日本の四季を惑わす温暖化
ご近所の犬も夕立待っている
来て嬉し来ると忙しい夏休み
減塩の梅干し食べて夏に乗る
遠花火　十九の恋はまぼろしに

鳥取市　近藤佳子

神の手に命を預け手術台
指切りで安心できた純なころ
餡パンは好き蜂蜜は苦手です
神さまに心売った子帰らない
賽銭の額に応えてくれぬ神

鳥取市　徳田ひろこ

岩肌に素手を托しているほとけ
風紋の襞に隠しているロマン
てにをはのロマン探検隊になる
ぶきっちょな人の面倒みて飽かず
ケイタイという怪物に舐められる

鳥取市　夏目一粋

いじめたくなるほど金のあるおんな
これからは小さい夢に変えてみる
深呼吸すると懺悔がしたくなる
東京へ大道芸を見に行こう
欲捨てる術を馬齢に教えられ

鳥取市　倉益一瑶

逆風にときどきよろけそうになる
夕暮れの虹は一色足りません
面倒を担いだ枕眠らせぬ
自画像の原色ところどころ褪せ
きな臭い箸だ割ってはいけません

鳥取市　宮脇道子

敵国のことば習ったことがない
空中戦稲田に伏せて見たことも
麦藁帽　銃後の乙女意気昂し
木炭車時々押したことがある
肩組んで学徒が歌う早春賦

鳥取市　武田帆雀

世の人がなんと言おうと僕の顔
現役を退いて新聞たたむ役
結果論なら僕だって解説者
東京で失敗　村の小役人
アロハ着てウクレレを弾く盆の月

鳥取市　田中憧子

手術前飲み納めの日続いてる
通院が出来るからまだ大丈夫
居眠りをさせない距離に道の駅
国訛りあか抜けたのはいつからか
たて結び新妻だから愛らしい

米子市　政岡日枝子

それぞれの世界で赤く燃えている
禱りながら歩く八月の影に
遠雷にのんべんだらり起き上がる
累代の遺影が語り合う系図
早口で自分を庇う癖がある

米子市　林　瑞枝

笑いころげて天から降ってきた夜明け
私を呑んだ鯨の腹の中で寝る
雨は他人で溜め壷いっぱい降りもせぬ
ちちの箪笥の底に眠っていた魔除け
あったかい巨樹だな胆が据わっている

米子市　鷲見正子

人の字で生きております夫婦です
ポケットに太陽を入れ汽車に乗る
長ぐつで働きものに見てもらう
魚屋の昼寝をタマは知っている
雑音に慣れて眠れぬ山の宿

米子市　木村富美子

果物のラッシュでゆれる体重計
少しずつ輝き合っている仲間
輝いた花道もある写真帖
父がした朝日夕日に手を合わす
輝きを無償でもらい生きている

米子市　中井ゆき

蓮の花買ってお盆をはなやかに
もうそろそろ金時いもがとどく頃
念願の水なすやっと口にする
食いものに好奇心ありまだ死なぬ
終点は知らぬ私も回遊魚

米子市　永井三津子

時々は陽に干している胸の中
捗らぬ事は猛暑のせいにする
政治家の高い目線が民見捨て
気がつけばあららすっかりおばあちゃん
人のエゴ地球の熱に拍車かけ

米子市　門脇晶子

花に学んで明るい方に向いて行く
伝書鳩信用されてとんで行く
目に見えぬ蝉の鳴く音にせかされる
鳥たちは体内地図でとんでゆく
大山はみどりの風で呼吸する

米子市　野坂なみ

神域の鳩は誇りをもっている
鳩笛で紙芝居屋を呼びもどす
蛇でさえ脱皮しながら生きている
野の花は草の褥で眠りたい
客船で二人の旅を夢見てた

米子市　澤田千春

変化球受けて大人になってきた
少なくてよい本音の友がありがたい
約束をしたかのように自動ドア
乗り換えの駅でときめく曲に逢う
盆の庭仏の声でにぎやかだ

カラコロと渚に遊ぶ缶の唄
麦藁帽かぶれと妻が鎌にそえ
雨傘で太陽さける無人駅
銀の匙少し剥げたり老い夫婦
ボタ山の煙恋しい炭鉱(やま)男

島根県　森　茂美

乗せられてホラ吹いている愚者
ネックレス夢を繋いで鳥になる
あなたの名思い出せない橋の上
諦めず牛歩で大地踏みしめる
ほどほどの欲を蓄えおしゃれする

島根県　多々納　テル子

いい子面しているだけの私です
好きだからできる仕事をもっている
嫁姑つかず離れずいい位置に
四度めの仏が帰る迎え火たく
ひと言が満座鎮める年の功

出雲市　吉岡　きみえ

八月の摩文仁の丘の風悲し
音がして窓にかけ寄る遠花火
ちびっ子もいっちょう前の豆しぼり
また一つ秋の約束してしまう
中国産葱一本に気を遣う

出雲市　小玉　満江

鐘の音を聴けば悲しい原爆忌
くよくよを叱ってくれる山がある
無理やりに住基ネットを被せられ
急くたびにいやいやしてる針の穴
饅頭のほかほか君をつまみたし

出雲市　伊藤　玲子

リハビリへ続く廊下の車椅子
腕白に嬉しい母の参観日
盆そうめん仏心の味すする
多国籍　野菜魚も空をとぶ
マタニティー我が家にやっと春がくる

出雲市　小白金　房子

これ以上歳はもらわぬ事にする
B面に夫の知らぬラブソング
川柳が好きでいくさはまだ続く
イベントが終ると枯れた街になる
誕生日希望に向かう死に向かう

出雲市　岸　桂子

胸の鈴やさしい風に会って鳴る
熱帯夜　汗と妥協をして眠る
群れるのは得意でないがメダカです
やがてくる白夜に翼ととのえる
あの夜のことは許している蛍

出雲市　青山　久子

出雲市　佐藤治代

陽が沈むどこかで魚焼く匂い
焼き魚ジュウーと夏の音がする
恪気した頃懐かしむ老夫婦
麻のれんさやさやと夏連れてくる
うっかりを猛暑のせいにして詫びる

出雲市　竹治ちかし

次世代に残す地球が病んでいる
お互いに正義と思うテロとテロ
熱帯夜　月も心配して覗く
一枚のカルテに乗っている命
結果良いカルテ信じることにする

倉敷市　小野克枝

ビールぐらい呑めるおんなと船を出す
帰宅時間に合わせて切れる炊飯器
風を切り裂いて少年どこへ行く
敵の肚よんで男が昼寝する
真実を見たく心に窓を置く

岡山県　小林妻子

悲しみの涙鏡も泣いてくれ
恐がっているのは妻と鏡です
五十年鏡顔色など変えぬ
定位置に老母の鏡台でんとある
鏡台に老母の秘策がつめてある

岡山県　矢内寿恵子

雨の日はあじさい寺も七変化
故里に造酒屋が待っている
残り火がまだもえている詩をつくり
正直に生きて傷つくことばかり
ネックレスゆれて老いては居られまい

竹原市　小島蘭幸

五百羅漢に紛れて昼寝でもするか
盆踊り顔が見えないほうがいい
横顔は淋し花火を見る時も
父の墓を守ってくれている藪蚊
行列に並ぶ若さが母にある

竹原市　森井菁居

目標を絞ると勝ちが見えて来る
ばれて元々秘め事と居るスリル
煩悩がいつでも邪魔をして困る
リーダーの僕が貧乏くじを引く
本堂で蝉も私も無垢になる

竹原市　三宅不朽

妻よしるまい恋という字がいまもすき
ひとつだけ白桃くださいひとりです
だまされたころの二十歳よ走馬灯
サングラスかけて漫画をもち歩き
黒い爪悲鳴あげたかも白桃

熊本県　高野宵草

うっかりの数で増えてく笑い皺
五体みな痛まぬときに歯がいたむ
割引きの賞味期限を確かめる
加害者にもなるハンドルを握りしめ
人形に飽いてペットを抱きたがる

熊本県　岩切康子

群れ咲きの野草と語る風涼し
プラス思考ミスはミスだと切替える
満月に呆けを知られる探し物
買物も旅も付合う気が嬉し
絶景に長い休憩ドライバー

唐津市　山口高明

母さんの命を削る子の奇病
見合いした姉より妹望まれる
例えばの話がやけにリアリティー
文豪と言われる方の字と見えず
猥談もすまして言える歳となり

唐津市　井上勝視

傘寿越え急に命が惜しくなる
死んでまで戒名ごときに値踏みされ
神様は二物与えぬなんて嘘
蒔かぬ種の実ばかり狙う遺産分け
まさか日本タイタニックじゃないでしょネ

唐津市　久保正剣

ロボットの過労死ヒューズ替るだけ
少年の胸に灯点す立志伝
一日の計を大事に八十路生く
七光りないので芸を盗む日日
順番のない順番を意識する

唐津市　樋口輝夫

信号のたびに仕上がる娘の化粧
泣き言をたっぷり聞いた里帰り
惚けぐあい探り合ってる長電話
孫が来てだんだん命惜しくなり
積ん読で終ったパソコン教習書

唐津市　市丸晴翠

ファミレスの隅に孤独な影といる
喝采もなく繰り返す家事育児
飲み込んだ言葉屋台の酒が消す
クレーンが伸び縮みしてビルを建て
ライバルに会う道だから背を伸ばす

愛媛県　中居善信

もらい泣きするほど涙脆くなる
リポビタン僕もやっぱり年なんだ
やわらかい風が大きな木の下で
泣かされて溺れて強くなればいい
おっとっと小さな石にけつまずく

香川県　川崎　ひかり

虫食った野菜安心して食べる
ラッキョ漬け夫がほめてくれました
年重ねシワがないとはおそろしい
行列に兎に角並ぶ事にする
どこをどう押しても嘘のつけぬ人

香川県　清川　玲子

ハナエモリ華麗な蝶も地に落ちる
サポーターが賞賛浴びたW杯
百均の店で一時雨宿り
父の目に叶った人と四十年
青春賦ヘップバーンのブロマイド

香川県　神保　坊太郎

伝来の美田荷になる米あまり
ヨサコイで送られ今は無職なり
皮一枚脱ぐたび竹の自己主張
分別でどうにもならぬ炎が燃える
虹の橋までは飛びたいシャボン玉

高知県　赤川　菊野

ベッカムのヘヤーをまねた息子の帰省
石ころの一つひとつにある個性
風鈴も音を忘れた熱帯夜
幸せは姑知らずに嫁知らず
ちぐはぐな夫婦でとても仲が良い

砂川市　大橋　政良

毒になるものを見せられ目を洗う
時計屋で気ままに動く時計たち
いい話あった受話器がおどり出す
おとぼけの演技がうまいお爺さん
悪友を指す指僕に来て止まる

青森県　西谷　大吾

みちのくの夏は土偶も踊りだす
木漏れ日が森のいのちを温める
風鈴が吊されたまま夏終る
海鳴りが懺悔懺悔と胸叩く
群衆の中に孤独な鬼が居る

弘前市　今　愁女

白露の日ははの忌日を間違えず
夏まつり秋を静かに置いて逝く
一叢のすすきに風のありや無し
薄々と黄をこまやかに女郎花
葉の小さきは小さく宿す露の玉

弘前市　福士　慕情

真心で当るしかないおもてなし
飛行機がピタリ定時に着く安堵
縄文の風と歓待するつがる
映像で観る白神のど迫力
世界遺産ブナの若葉が出迎える

巡り来る八月の鐘耳を打つ
夏休み色とりどりの靴並ぶ
褒められた樹は充分に水を吸う
墓まいりお経と和して蝉しぐれ
良い方に解釈しよう空も澄む

弘前市　宮崎　ヒサ子

幸せでいつも気楽な机上論
常識の範囲を越えた罪な語尾
温度差のある応対という介護
多様性誇張はしないフリーター
手拍子に力を貰うスニーカー

弘前市　相馬　銀波

乾杯に下戸のコップは踊らない
煌めきは心の中のなかにある
和箪笥のあけぬ引き出し増えてきた
大物になれずに終わるイエスマン
心まで日焼けをさせるこの暑さ

横浜市　田中　笑子

新盆の風に飄々師の御霊
新薬の効に人生観変わる
絵日記に書けぬ話を聞いてやり
穫れ過ぎの野菜粗末にしてしまう
恐竜展　親子の目線寄り添うて

横浜市　保田　絹子

新盆に宅急便の白いラン
涸れたはずの涙を誘う白いラン
隙見せてからは評価が甘くなり
視点変え探して見たい可能性
待ち侘びる猫炎天を急がせる

横浜市　清水　潮華

手術した妻が少女になってゆく
先行きはどうあれ今日の縄のれん
仏像に平和をもらう寺巡り
骨董の価値を高めた錆び具合
望郷の外人墓地は海が見え

横浜市　菊地　政勝

還暦を祝う妻にも残る艶
趣味広げ集中心が逃げていく
朝顔を小犬の如く持ち帰る
血圧計買って日課がひとつ増え
噺家が客の唱和も芸に入れ

横浜市　小野　句多留

臥せる身をゲームソフトで耐えている
方言で語れる嘘の無い仲間
ワープロで痛いザラ場の売り損じ
損得が無いから続くお付き合い
風雪に耐えて老舗の黒い文字

富山市　酒井　輝

富山市　舟渡杏花

痴話げんか禅問答に似て非なり
女難の相余生に来ても沙汰がない
名も財も失くした父の帽子掛け
闘いは終った橋が架けられる
膝まくらそろそろ王手かけてくる

富山市　島ひかる

終焉の叫び雪渓から聴こえ
頂上に立つと握手をしたくなる
山ひとつ越えると次の山が見え
峰峰をまた振り返り振り返り
見送りに行けない涙もろいから

可児市　板山まみ子

黙々と踏跡たどるブナの山
視界あけ急な登りの労忘れ
山靴をぬいで湯舟の深呼吸
三日月をからかってるか稲光り
梅雨さ中　山の秘湯は沢の音

静岡県　薗田獏沓

一坪菜園なれど大地に変りなし
すぐそこで雨蛙鳴く山の宿
ロスタイムそんな余生が忙しい
本名で翔べず雅号で翔んでいる
ユニホームで出れば流行気にならず

京都府　丹後屋肇

地球儀の裏からかけるプロポーズ
蒼穹を二つに仕切る飛行機雲
カルガモの道路に警察官が立つ
太陽が沈んで海も大人しい
海水浴楽しビキニの甲羅干し

京都府　稲葉冬葉

家族が揃うのを待っている花火
葉桜の下に仔犬のダンボール
老春謳歌こころときめくこともあり
折あらば言訳したい人が居る
さまようて神も仏も遠くなり

京都市　都倉求芽

八月になるとしゃしゃり出る芋の蔓
大文字夏を終りにする山に
挨拶も少しやわらぐ秋の風
同じ石でも夏の白秋の白
なんとなく手抜き秋に蒔く花の種

亀岡市　井上森生

健康の素はキムチの熱い鍋（韓国ソウル）
しがみつく活きダコを食う韓海鮮
いつまでも若さ頂戴　人参酒
ハングルが北と南で睨めっこ
大屋根に並んだ像は西遊記

大阪市　寺井東雲

ぬぎ捨てた肌着朝にはのりがつき
青テント雨は辛いと思ってやる
大物の席は何時でも空けてある
迷わずに友の土産は缶ビール

大阪市　浦田綏子

人混みに出て人混みに文句言い
貧しさに生きてお札の顔となり（樋口一葉）
野球みてあんパン食べて子規憶う（九月十九日子規忌）
背番号十一桁で生きるのか

大阪市　安達はじめ

名人と呼ばれて孤独弟子もいず
パトカーに呼び止められて知る違反
許せても忘れる事は出来ません
人並に悩んで今日も生かされる

大阪市　中村叡子

苦労して貯めたへそくり株できえ
電話口妻は手を振り嘘つかせ
ニセラベル日本の恥部が見えて来る
一葉さんこんなきれいな人なのね

大阪市　松尾柳右子

台風に傘とコートの旅かばん
寝てる間に台風通過宿ゆかた
決った日決った刻に来るお客
磨き砂鍋の変身ウツ晴れる

大阪市　玉置英子

聞き馴れぬ鳥に急いで戸を開ける
知らぬ人はお元気そうと言うてくれ
枇杷の木は好みか蝉の穴だらけ
モンゴルの熱い視線がくる土俵

池田市　栗田久子

王者には王者としての指定席
着る人を選べぬ店のニューモード
芸術か食欲なのか悩む秋
しくじったせいで気づいた別のこと

池田市　岡本吉太郎

老いの身は都合悪けりゃ惚けている
愛想よし男嫌いが看板に
株上下首相見込み通りにはゆかず
誇り高き人は人生語らずに

和泉市　西岡洛酔

お隣の噂話に茶が入り
暑いなあ　ひと声で足る八月よ
混浴へ女の姿潔い
びっくり水　母が譲ってくれた知恵

泉佐野市　山本蛙城

靖国へ意地張る列の燕尾服
あの程度なら吹けますぜハーモニカ
値も言えぬ安い時計が狂わない
イラストの悪玉菌の凄い顔

茨木市　島元ふみ

腰曲げた母に息子は無言なり
ぼんという呼名この頃聞かないね
面白い国だ猛暑も冬もある
多病息災私に適う夢探す

交野市　山川日出子

七十歳ドレス作ってフラダンス
荷物などいらぬあの世は無の世界
公園で影と対話の八十童子
ドレミファソ戦争中はハニホヘト

河内長野市　植村喜代

なつかしい昔話も多くなる
星一ぱい夢一ぱいの夜もあった
出掛けられないが電話は有難い
元気ならきっと良い事あると言う

河内長野市　井上喜酔

台風の暑中見舞で予約ゼロ
裏道で隠れた秋と巡りあい
頂上で火種を抱いて居る不安
病院の掛けもちバイク忙しい

岸和田市　長谷川呂万

世界地図へ印楽しむ旅帰り
ターミナル名残りを惜しむハイタッチ
三世代嫁が仕切って恙なし
的中へ最後は祈る万馬券

岸和田市　井伊東吉

この暑さ自然破壊の祟りかも
流れ出る汗にハンカチ追いつかず
納税が馬鹿らしくなる無駄遣い
夏草は伸びるにまかせ秋を待つ

岸和田市　藪野けい子

株を売り底値で買ってまた下がる
コウノトリ今年も続き飛んできた
ストレスがコーヒーに溶けほろにがい
妙薬に頼ってしまうダイエット

岸和田市　木村正剛

減量に近道のない万歩計
無神論なのに貧乏神といる
一日の長さ入院してわかる
強がりもたった三日の妻の留守

岸和田市　原苑子

せめてもの杖になろうとボランティア
しんみりと一人で観たい泣くドラマ
再会を約す細い手放せない
適当に二三揃えて急な客

堺市　神原文

百均時計と私のいのち根くらべ
風鈴がチリンと昔噺する
身の内の時雨は止まず外は朱夏
夕茜今夜ゆるりとふたり酒

子育てが終わると親の世話が待つ
首の老い隠すマフラー手離せず
不機嫌な鏡にチーズして出掛け
旨味ない野菜に懲りて自家菜園

吹田市　瀬戸まさよ

連休を待ってた頃が懐かしい
閻魔様過労死が良く判らない
生き様を見せて上げよう蝉時雨
万歩計目に付く場所に鎮座する

吹田市　野下之男

夏休み返上修羅場浪人生
盆休みプランはみ出す小商い
黒い傘女の意地で肌守る
やせ薬スマート願う命がけ

豊中市　岸田知香子

自転車の丸いお尻がはじけそう
もったいない一番違いで屑籠へ
リモコンが大忙しい夕餉かな
女湯の窓にサーカス庭師さん

豊中市　山門幸夫

あくせくと働く蟻も過労気味
終戦から六十余年よう生きた
うるさいが蝉の合唱これぞ夏
つくづくと思うマンション土がない

豊中市　山門タミ

八月が来ると指折る癖がつき
八月の炎暑へダブる焼夷弾
健忘症もはやジョークでごまかせぬ
少子化へ子育て出来ぬ国憂う

豊中市　吉田あずき

悪い事せんのに番号付けられた
心に刻むあの日の揺れよああ永久に
姑の忌に白桃供え灯が揺らぐ
姑五十回忌私も古うなりました

豊中市　樫谷郁子

一杯のジョッキでばらす内緒事
妻の爪短くなってホッとする
女人禁制お山もいけずせんといて
振袖かスーツか迷う空模様

高槻市　傍島克治

忘られぬ人アルバムで生き続け
高原の夜は静かに露天風呂
経験談憂い和らぐ同病者
クラス会ほどよい酒が歌い出す

高槻市　生田義一

一度味占めると元へ戻れない
囀りがくれた寝覚めの心地良さ
朝採りのししとうを焼くフライパン
うっとりとモネの睡蓮思い出す

高槻市　左右田泰雄

蝉しぐれ虚ろに友の訃報聞く
文字のない国で兎と知恵比べ
脳輪切り進む医術に安堵する
同病で話がはずむ初対面

高槻市　江原秀夫

公職の不正に慣れて驚かぬ
侮った浅い川にもある深み
老いるほど父は威厳を保ってた
ふんづけた蟻にも命ただひとつ

高槻市　井上照子

栄転が今もあるのは役所だけ
ゴミの朝背広同士がおはようさん
性転換したよな夫婦増えてきた
古希や喜寿子供らからもほっとかれ

高槻市　西谷治三郎

茜雲背負う地蔵に祈る明日
頑固さが哀れに見える古稀の父
南海の戦跡の空星流れ
参列者仏の知らぬ人ばかり

大東市　南原正和

人気者高見盛という力士
呼出しの美声観衆の声で消え
山の滝浴びたいような酷暑の日
月夜茸ミソサザイもいる大台ケ原

枚方市　森本節子

夏休みゲームセンターで汗知らず
蛙の子はやっぱり蛙だった眞紀子
蝉時雨夜は私だけの蝉時雨（メニエル病）
あじさいが一本拗ねたか変化せず

枚方市　鈴木政子

カラオケにいこうといってそれっきり
玉手箱喜寿になったら開けましょう
夏休み孫のリズムで明け暮れて
快眠のリズム腹式呼吸して

東大阪市　指宿千枝子

いざと言う時は頼りにならぬ人
失敗の数はかぞえぬ事にする
飛ぶ鳥を落した人も塀の中
ああ不況ママの溜息聞く新地

藤井寺市　中島志洋

結婚ですぐに分かった浪費癖
へそくりは傘寿の今も続いてる
ご主人と間違えられた鞄持ち
大切な物は鞄に入れてない

羽曳野市　酒井一壺

水蜜の思わず声に出る美味さ
ばらの門立てばうちから招く声
案外に傷の深さを知る別れ
その昔水の都に見る砂漠

寝屋川市　堀江光子

守口市　結城君子

ひょっとしてイソガニスパイかも知れぬ
デパートへ行く元気だけ残ってた
ワン切りの電話の不安体験す
ヘルパーさんに習う掃除の早い業

八尾市　内海幸生

倖せは六法全書に積む埃
故里の香る言葉で友の筆
アレルギー酒やめとけと聞いた耳
足跡の歪みを直す術もなし

八尾市　吉村一風

菅笠へしぶきもはしゃぐ川下り
星祭り孫にも恋の見えはじめ
幸せを分け合う西瓜真っ赤っか
暗証番号迷わずに押せほっとする

八尾市　宮西弥生

ワンテンポ他人にゆずって立志伝
この噂あの噂などもう昔
花と刺　女は女果てるまで
よれよれの手綱で生きてゆく喜劇

神戸市　池田善守

お互いに友をほめ合う勝ちゲーム
鉢植えも買われた先で慣れぬ日々
病院は待つ体力のいるところ
生きているだけでいいよと妻に言う

神戸市　木村貴代子

五時閉店仕事は遊ぶためにする
ロッキーの蒼天神の在ます所
日本は右端にある世界地図
おおらかに生命たのしむカナダ人

神戸市　山口美穂

老いの知恵母と姉から貰います
大玉の西瓜を割ってみたいもの
糠みそをかきまわした手で指図する
愛犬はしっかり朝寝躾られ

尼崎市　松下比ろ志

実を結ぶ花は花の香撒きながら
プライドを捨てると足が軽くなる
川底の石は流れにたじろがず
生れつき良くも悪くもない顔で

伊丹市　山崎君子

あなたの二倍わたしは生きて原爆忌
蝉しぐれ消してくれるなヒロシマの鐘
花のため息共に眠れぬ熱帯夜
ケセラセラ友は優雅に船の旅

西宮市　菊池トミヱ

音楽が好きで集まるご常連
やさしさにころりと参りついて来た
物売りの話術にころり買わされた
京河原浴衣の美人ビールつぐ

西宮市　井上松煙

喜寿すぎて生まれ変りを願ってる
老いの坂休み休みに登ってる
一冊を休み休みに読みあげる
坪庭に四季の移ろい見飽きない

西宮市　坪井孝一

絵はがきを素直に受けぬいやな僕
幹事さん手酌ぐいぐい部屋の隅
下駄箱に父の履物置き場なし
胡蝶蘭値段どおりにひと酔わす

西宮市　亀岡哲子

浅草の風鈴江戸の風で鳴る
見下ろして花火船渡御浪速の灯
音なくて何の花火ぞビルの窓
水やりへ雑草いっち元気づき

西宮市　秋元てる

おしゃべりは他人のおしゃべり喜ばぬ
自信ないが歩いて見たら着きました
麻単衣母の年忌がもう近い
語尾上げる言葉にも馴れもう言わぬ

西宮市　刈田泰司

光るもの外しわたしを掃除する
苦労した顔で男がもてている
未練とも見える紙幣のかぞえよう
光るものいくつ付けても満ち足りぬ

兵庫県　大谷幸次郎

なるべくはほじって欲しくない虫歯
なるべくは飲まぬが良いと言う薬
久闊のペンがすらすら走り出す
何事か示し合わせる蟻二匹

和歌山市　武本碧

人様の口に合わない田舎漬
親馬鹿を知りつくしてる利口な子
ジーパンの膝神妙に聞く法話
たそがれて花の命を抱きしめる

和歌山市　西山幸

手掴みの塩で未練をふり払う
言訳に行く一錠の安定剤
ここに来て的を外してばかりいる
約束の日は雨になる雨おんな

和歌山県　中後清史

蒔かぬ種生えぬと悟るお付き合い
倍になる話に弱い鼻の下
金婚へまだちぐはぐな船を漕ぎ
切り詰めているが花だけ絶やさない

海南市　谷口義男

外見で評価が出来ぬ人の価値
自分だけ耐えた気持で共白髪
価値観の違い反論する息子
挨拶を交わしながらの散歩道

奈良市　天正千梢

雨の日の良さを感じる歳になり
城石を運んだ汗を計らんか
鬼の目の涙のあとを見てしまい
三月は奈良にだけある火の行事

鳥取市　福島庸二

微笑んでくれる地蔵に打ち明ける
かけひきの無い友人に見習おう
いさり火の幻想シーン目を奪う
乾杯の音頭長びく発泡酒

鳥取市　春木圭一郎

明日への活力今日もビール飲む
明日にもつぶれそうだがつぶれない
明日がある若者だから文句言う
明日はないそんな気持ちで今日を生き

鳥取市　西村黙光

換気扇ストレス徐々に取り除く
燗酒に勝るものなし暑気払い
ストレスを如実に語る誤字脱字
腹が立ち一気に呷るコップ酒

鳥取市　美田旋風

ヤジロベエいつも情理に揺れ動く
歳ととも似た夢見てる夫婦舟
遅咲きの花も陽が射す方へ向く
謝まれば水に流してくれる酒

鳥取市　加藤茶人

手術日の朝をカラスが鳴く不安
気がねなく出来るオナラのいい音色
ありがたい法話そこそこ足しびれ
良薬は口に苦いが胃もやられ

鳥取市　前田一枝

極楽の絵を書いて居る輪も和む
後返り出来ぬ旅かも知れず出る
生きて居るうちに読むかと本も買う
覗くのにほど良い穴があいて居る

鳥取市　岩原喬水

友の名を疑って見る死亡欄
金見てもうちのペットは振り向かぬ
今日は生き明日はさっぱりわからない
遺伝子が細い体にしてくれぬ

鳥取市　田村邦昭

童顔に似合う小さな鬼が棲み
理由はまだあるが多くは喋らない
大海を泳いだ雑魚の独り言
なるべくは嵐をさけて歩きたい

鳥取市　冨山檳榔樹

割り切れば前途に見える青い空
音痴だが酔えばアリラン歌う父
ダンスホールでタンゴを踊る老い日和
ぬか味噌の桶から亡母の顔守る

逢って来た頬に心地よい微風
ほろ苦い寂しさかくすコップ酒
友情の毒舌じわり効いてくる
この頃は健康食に凝り過ぎる

鳥取市　杉本孝男

戒壇を巡る、とみんな仏顔
歳月が閉ざした胸をそっと開け
帯きりりきなんせ踊る夏祭り
飛び入りの浴衣も跳ねる踊りの輪

鳥取市　山宮愛恵

方言が失せてふるさと他人めく
八月は暑さ忘れる滝たずね
夏盛り大樹ふるわす蝉時雨
さりげなく肌みせている透け透けルック

倉吉市　山本玲子

退屈をしないていどに口喧嘩
頭とは違った方に足が向く
未成年に飲ますビールは売ってない
ばあちゃんがほたえ過ぎたかまた寝込み

倉吉市　米田幸子

大物の顎が動くと風さわぐ
御自慢の花の命は短すぎ
クライマックス全神経が点になる
灼熱の想いも冷えて波静か

倉吉市　野口節子

軽かった膝が泣いてるすねている
炎天も愛嬌はなつさるすべり
少子化へ赤信号の鐘がなる
異常ない診断薬抱きかかえ

倉吉市　山中康子

墓掃除これも勤めか午前五時
家宝だと頑固に守る千枚田
クーラーも体に毒と熱帯夜
アケビ熟れカラスも人も狙ってる

倉吉市　淡路ゆり子

迫る老いなかなか認知できずいる
善処の語に逃げの本心見え隠れ
賞味期限切れアラがボロボロ真紀子さん
ゴキブリホイホイ毎朝覗きほくそ笑む

倉吉市　猪川由美子

山を削ったらお金になるらしい
分別がつけば寂しくなっていく
天国に行くには重くなり過ぎた
火葬するように浄土へ行く夕陽

倉吉市　牧野芳光

じわじわと父のパンチが沁みてくる
若者も私もはまるプロジェクトX
煌めいた足元掘るとビー玉だった
時々は友と語って癒される

米子市　青戸田鶴

米子市　木村春枝

まわり道記憶の家が消えている
留守番犬暑い昼過ぎ繋がれて
頭では立派に描けた肖像画
温暖化どこまで暑さ攻めて来る

米子市　光井玲子

娘の新居少しの間お客さま
孫の道ばあちゃんたちは口出せぬ
惚けそうだ一言一言書きとめる
ストレスが溜まるな空気動かそう

米子市　神庭詩郎

看護師が患者の愚痴も聞いてやり
年金が有り楢山に行かず住む
裏町の風情薄れて行く文化
甲子園涙の土を持ち帰り

米子市　白根ふみ

がいな祭大分名物らしくなる（米子の夏まつり）
有名女優帰郷をかねて審査員
盆ちょうちんたったひとりの明りつけ
割り切れるものだけ拾う都合主義

鳥取県　乾喜与志

幼児に学ぶ無邪気な笑い顔
八月の記憶大イナツズマ二つ
一人ぼっちの頭が惚ける目が霞む
グッと一杯ゆめを見るために飲む

鳥取県　西川和子

初対面ペロリと犬のご挨拶
不自然な笑顔を母は見逃さぬ
活躍に取り越し苦労してしまう
挑戦の味見どなたに向けようか

鳥取県　垰寛子

コールあり古い写真をつれて逢う（六十年前の教え子と逢う　4句）
老紳士と少年やっと重なって
六十年の尽きぬドラマに入りこむ
飛ばぬまま終った特攻隊の白髪よ

鳥取県　林露杖

初咲きの朝顔小さくお早うさん
穂孕みの稲田炎暑の真っ只中
熱帯魚水着の少女駆け抜ける
夾竹桃たわわ八月十五日

鳥取県　山本正光

ときめきがあるので呆けていられない
不器用のままで余生もまだ元気
年金が入ると財布多弁なり
ステテコで猛暑我慢の狭い部屋

鳥取県　吉田孔美子

子育てに何度でもして来た覚悟
湯豆腐の喉ごしこれが三千円
喉元にのぼって来ない忘れ物
かあさんのボイスレコーダー喉仏

鳥取県　太田幸枝

親が子を殺傷これで平和かな
酒たばこうまい間は元気です
犯罪にいつの時代も女偏
自家用車曲った腰がシャンと伸び

鳥取県　原みさを

指十本それだけのことして死のう
いい出合い馬齢に少し色がつく
運勢欄サマージャンボを追加する
急所ズバリ友の苦言がありがたい

鳥取県　西沖彰雄

退院をしたら着てよと娘が浴衣
病癒え捨てたる欲をまた拾う
有難い言葉しっかり胸に抱く
この暑さお茶よりビール欲しい喉

鳥取県　石尾かつ乃

煮え滾る心を静め会って居る
赤とんぼもう秋ですと宙返り
秋のペンちょっといたずらしたくなる
ふるさとの風にちょいちょい誘われる

鳥取県　近藤春恵

少子化が進む世代に老いて生き
真っ直ぐに進んで悔いは残さない
親の敷くレールに子供進まない
文明社会だんだん手紙影ひそめ

鳥取県　さえきやえ

茶髪にこにこみごとに瓦敷いていく
仲人のウソはうれしく聞いておく
いいことをした日ゆるりと陽が沈む
大山なみのみどり無言の愛である

鳥取県　下田茂登子

無人駅忘れた傘が人を恋う
学歴は無いが何とか生きてきた
大会で我が身のレベル思い知る
お隣のレベルが高く声かけぬ

鳥取県　平井栄翁

本読めと天がくれたる秋夜長
母の日も水田で過す老農婦
足腰は利かぬが口は良く効かす
易の灯へ最後の頼み聞いて見る

鳥取県　小谷孝美

精一杯汗をかいてもやせはせぬ
風止んで風紋月と対話する
しっかりとメイク落して素に戻る
連ドラにはまり一話もとばせない

島根県　伊藤寿美

八月忌遠い記憶の草のめし
野仏ののどかな笑みに立ち止まる
くちなしの花の白さよ闘病記
虫の墓作って去んだ夏休み

浅草で私も蟻の仲間入り
願い事つぶやく南十字星
罪深き者にも見える虹の橋
美しい虹ださよならした後に

松江市　川本　畔

饅頭もあなたも同じ位好き
サボテンの愛かも知れぬ赤い花
死にざまは生きざまと聞くもう遅い
賑やかに産まれ静かに送られる

松江市　銭山昌枝

生きている証を流す下水道
パソコンに管理されてる既往症
雑言が耳の奥底落ちたまま
趣味の日々やっと人生だと思う

松江市　三島淞丘

欠点をさらけ出すのは土俵際
蟻の列ここにもあったエゴイズム
耳をかくマッチを誰も持ってない
炎天下真っ赤な花の悪女ぶり

松江市　津川紫晃

身辺にとかく噂を持ち歩く
高層のホテルどうにも寝つかれず
若者が狂喜の踊りお立ち台
サッカーの人出に事故を聞かぬ幸

松江市　小川注湖

頬寄せて雀の親子睦まじい
罪一つ許して頬の風清し
逆境に人の情けが身に沁みる
薄情な人とサボテン見に行った

松江市　佐野木みえ

ユーモアが通じないぎすぎすの質
異文化も片言交じりでの目と目
しずしずと引導降ろすオピニオン
うふふ洋画わたし好みの深夜二時

松江市　安食友子

久闊の友の黒髪染めてあり
飾らない友の苦言が身にこたえ
口数が過ぎて年寄り煙たがり
淋しさを紛らす酒は酔えもせず

出雲市　久谷まこと

風鈴も暑いと叫ぶ夏の風
母のない父で居酒屋ゆくもよし
贅沢な愚痴だと父に諭される
拾わんか拾えと一円目をおどす

出雲市　板垣夢酔

大炎暑心の菌も焼きつくす
なかなかに座禅の境地ほど遠く
鈴振って亡母の記憶をたしかめる
自費出版うっとり見とれ充たされる

出雲市　富田蘭水

今生の別れと知った風の駅
そっけ無くつき返された彼岸花
藍甕のあいを抄って舐めてみる
古希過ぎて誤魔化し利かぬ匙加減

出雲市　石倉　芙佐子

ほどほどの欲で余生を膨らます
てふてふと書いてタイムスリップする
長老と言われ宥める座り胼胝
本物になれず脱皮を繰り返す

出雲市　園山　多賀子

早とちりして冷えびえと今日の椅子
番号が付いても守る何もない
鳩尾に留めることのできぬ女
逆転のチャンスに鳴った電話ベル

出雲市　岡　あきら

友が逝くねむったふりをしたままで
高すぎてあなたの山に登れない
まともには受けてはならぬ風当り
わたしより大事にされている小犬

出雲市　城　多喜

記憶力不都合な事忘れてる
疑心暗鬼そんな日あった夫婦坂
昼下がり話が弾む子の電話
新聞で武蔵の里が目をさます

岡山県　福原　悦子

積んで来た苦労が光る太い指
妻の盾になる身を妻に守られて
ユーモアの通じぬ人で肩がこる
うれしさがしみ込んでいる笑い声

岡山県　山本　玉恵

煙草の輪過去がふわりと浮いてくる
握力をきたえ幸運掴み取る
大欠伸わたしの意志と別のもの
壁の絵を替えて明るくなった部屋

岡山県　大石　あすなろ

十年の知己に劣らぬ初対面
年金も増額なしで減の記事
新鮮さわが家でトマト胡瓜穫れ
大正も遠くなりけり誕生日

岡山市　井上　柳五郎

朝の駅脱兎になった定期券
人並みにあってうれしい反抗期
夏枯れの胸を潤す美術館
メモ帳に明日輝く文字を埋め

倉敷市　井上　富子

極楽の余り風吹く冷し茄子
寝そびれて佳しこおろぎの子守歌
謀反心少し燻るしまい風呂
ひたむきな愛をつらぬく白い百合

竹原市　石原　淑子

竹原市　時広一路

よく忘れますねと辞書に言われそう
ボランティアですがと役が二つ来る
夕焼けへ孫は虫籠開けてやり
遠と近　眼鏡は知っているお歳

竹原市　岩本笑子

風立ちぬかすかな虫の声の下
扇風機ネコと私の昼寝中
一輪差し乾いてウツの日が暮れる
絵手紙をもらう書きたいなと思う

竹原市　古谷節夫

賞罰は無いが余白が満ちて来る
生きるため猪だって街に出る
ままごとで亭主関白演じたい
真っ直ぐに歩け歩けと影法師

広島市　森田文

ねむの花散らさぬほどの沢の風
どの道を行っても墓地に三滝山
薄命の花燃えながら散り急ぐ
土俵上呼吸の合わぬ名力士

美祢市　安平次弘道

髪切って女に期するものがあり
一ランク上げると喜劇抜けていた
能面に有象無象が寄り掛かり
副作用が怖くて背伸びなど出来ぬ

宇部市　平田実男

つまらない巨人が強いプロ野球
膝枕妻は太目のほうがいい
札よりも診察券で張る財布
制服を脱いで自分の顔になる

熊本市　永田俊子

つまずいた石が私の恩師です
その裏を知った無口が恐ろしい
水はじく茄子のプライドふと悲し
じっと見る鏡の奥にある未来

高知県　小澤幸泉

眠たさを車窓に遊ぶ独り旅
息子らのユメ果てしなく遠い旅
悔いのみは残すまいぞと旅つづけ
ひたすらにかけ抜けてゆく現世旅

高知市　北川竹萌

不況吹きとばして響く踊り唄
炎熱によさこい祭り真っ盛り
地方色包む踊りの面白さ
台風の道を変えたかエルニーニョ

松山市　宮尾みのり

どうだどうだと言いつつ夕陽落ちるなり
冒険家にされて死ぬまで止められず
おとなしい妻が持ってた浪費癖
充分に昼寝してますマイペース

心地良い湯に浸りすぎ火傷する
七十になれどチャン付けされている
腕白の子が一番の親想い
この腕が鳴ってもチャンスまだ来ない

香川県　成重放任

諦めて許して頼りああ夫婦
未だ先と思うた事がすぐに来る
生き延びるために自分を噛み殺す
追風もう味方ではない下り坂

香川県　瀧井勝

白桃で大暑お見舞い申し上げ
錆びついたまんま効いてる父の釘
通行料払い屋島の血の池へ
牟礼の町イサム・ノグチが今も住む

香川県　池内かおり

三ランク下げても農に嫁が来ず
行水の西瓜オヤツのタイム待つ
零回答労組の旗しまらない
呆け防止無理にパソコン勧められ

弘前市　須郷井蛙

慈雨降って夢追いかけるかたつむり
輪廻とや自我の見地に立つ自虐
歳ですなテレビ桟敷で見るねぶた
CTの結果に笑顔取り戻す

弘前市　岡本花匠

格子戸の脇にちんまり上酣屋
雨の日も水かけ不動南無南無と
歳やねと夫婦ぜんざい総入歯
浄瑠璃に浪速新地の花の道

弘前市　一戸ツネ

二次会は勘定を払う顔で飲む
高速でダンプを抜いている若葉
翔んでいる和服ジーパンはきこなす
雑草は胸に住んでる分身だ

弘前市　小寺花峯

みちのくに浪速因幡が花を添え
真っ直ぐにあすなろの森真っ直ぐに
倶会一処 墓も塔婆も建てました
湖底の民話と心中する卒寿

弘前市　櫻庭順風

川ほとり小鳥の中に僕も居る
待ち人のようにそよがす川原風
睦ましく風盛り立てる薄の芯
入道雲勇み湧き出る蒼い淵

弘前市　蒔苗果林

禾偏の西瓜の種を飛ばしてる
禾偏の稲穂黄金に稔る秋
禾偏の秤御負けの癖がある
禾偏の程々にする酒の量

弘前市　中山雅城

十和田市　阿部　進

この坂を越えれば倖が待っている
体調維持四苦八苦する老夫婦
酒肴道連れにして古希が生き
考えて生きる力を子に与え

富士宮市　渥美弧秀

朝ドラのさくらに刻を切り替える
老いの部屋積んどく本が見直され
老人の絆深まる敬老会
恩師なら無理を承知ののし袋

愛知県　早川盛夫

裏側に立つと手品はよく分かる
金が無いので毎日が忙しい
健康なだけが取り柄の登山靴
行き先は信濃の風に聴いてくれ

滋賀県　中宗明

君と僕レベル同じで馬が合う
食べ歩きガイドブックの星三ツ
ウォーキング歴史ひもとく親子連れ
はじめてのニアピンマーク夢心地

斎藤大雄川柳句集
春うらら雪のんの
―初心者にやさしく楽しい川柳句集
四六判・ハードカバー
定価一、〇〇〇円(税込)送料二四〇円
お求め先　札幌川柳社　TEL・FAX 〇一一-七三一-五五二六

川柳堺400号記念
第29回堺まつり協賛　紙上川柳大会

題と選者（4題共選・各題2句）
「飲　む」　植田一京・高瀬霜石
「気 ま ま」　池　森子・板尾岳人
「　嘘　」　西出楓楽・天根夢草
「ドアまたは扉」田頭良子・河内天笑

用　紙　各題毎に便箋1枚ずつ使用（どの便箋でも可）計4枚、左右に2句ずつ記入。便箋に自分の雅号を記入しないこと。

投句料　1000円（郵便小為替・切手可）

投句締切　10月20日
（本大会は川柳堺10月例会を兼ねる）

投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会
TEL 072－278－4706

出雲総合芸術文化祭
川　柳　大　会

日　時　11月2日（土）午前11時から
会　場　出雲市民会館301号室
兼　題　（各題2句）
「吹　く」　当日発表
「機　嫌」　吾妻　昭二選
「ずんずん」　竹内すみ子選
「ク ー ル」　佐々木　裕選
「　殿　」　金築　雨学選
「加　減」　恒松　叮紅選

席　題　1題あり　出句締切午後1時
会　費　1500円（昼食費含）
賞　市長賞・教育長賞ほか
欠席投句　締切10月20日
参加料1000円または80円切手12枚
〒693-0052 出雲市松寄下町284
吉岡きみえ宛　℡ 0853-22-1068
主　催　出雲市・出雲市教育委員会
出雲総合芸術文化祭実行委員会
出雲市川柳連盟

自選集

橘高薫風

蚊柱の下で別れた君も亡し（悼　樋口舟遊さん）
立て膝も日本武尊と平手造酒
君と来てひょうたん島の小半日
甲子園十七歳を誇るべし
酒とろりとろり平成安愚楽鍋

越智一水

お見舞いに行きお別れで励まされ
どっこいしょその口ぐせを笑い合い
句碑の文字蟻がたどって読んでいる
お父さん腕組みしようよ風が出た
灯籠が岸でただよう原爆忌

河井庸佑

華麗な世界誘い込まれる万華鏡
親友思う余りの仕打ち誤解され
器ではないとやんわり辞退する
好調なときほど気持ち引き締める
隅いちをナイン結束して守る

川島諷云児

沈思黙考するほかはなし四面楚歌
突き当る壁が初心になれと言う
目立つのが嫌いでいつも隅の席
賞味期限とうに切れても妻は妻
殺し文句ことのはずみで言うことも

木村あきら

金バッジ少し怪しい色になり
激流を笹舟で越え九十年（八十八翁）
矢も弾も飛んでは来ない無位無冠
新世代地震　雷　火事　女房
秋サンマ隣へ飯を借りにゆく

工藤吟笑

大虎が天下を論ずコップ酒
大道で煙に巻いた売り口上
素人と侮り釘が横を向く
海苔を干す島に悲しい母の詩
高砂の謡に合わす裾さばき

国鉄マンだ旅のプランは委せとけ　黒川紫香

カニせせる時の笑顔がまだ生きる

コマ切れの鉛筆名句飛び出さす

お世辞など言わぬ男が急所突く

三羽烏の一羽残った猛暑哉

（正本水客を偲ぶ　5句）

蟻の列走り出すのは見当らず　小西雄々

愚痴なげる前にポケットからこぼれ

野火走るなだめばならず愛を掌に

根性が取得休まぬちびた靴

塾通い家庭教師もいると聞く

自動ドア暑さしのぎの客へ開く　小林由多香

盆おどり見様見真似で輪にとける

真似ごとのむなしさ表だけ光り

欲を捨てれば壷からは手が抜ける

学校を風邪ぐらいでは休ませぬ

流された分だけ石は丸くなる　斉藤劣

ボランティアの手話の十指に明日がある

水鉄砲そして大人になっていく

笛習う指にねぶたの血が騒ぐ

虫だって天地の恵み欲しかろう

西方丸で日本海が埋まりそう　田口虹汀

父は動かぬ高校野球済むまでは

母さんも満で八十六となり

先輩が三途の川で待とうとも

天高う高う伜も負けぬよう

ラジオ体操祭　大臣も衆の中　竹内紫錆

夏ごとに戦場短歌読んで老い

ラジオ作りも難聴も兄が先

スポイトで外すコンタクトの進歩

百年の武骨　リベット締めの橋

生き方も川柳もまたマイペース　田中正坊

年よりは年よりなりの役どころ

暑かったただ暑かった八・一五

銀行もおひまかボクにまで電話

幼稚園以来ハッピーバースデー

岬から見ても近くて遠い島　玉置重人

食べて寝てただそれだけの日を送り

あるものはないが時間はたんとある

何年も金魚住みつく長寿国

公園にともだちがいる万歩計

受付の暇もて余す耳掃除
華やかな話を聞いた美容院
祭太鼓にもう酔っている若い衆
野心ある男に酔いが回らない
回転寿司占領をした一家族

月原宵明

夏草の勢い皺の手が負ける
いい話だと灰皿のひとり言
わだかまり解けて老眼よく見える
黒髪を染めて男の自由席
礼節は廃れひまわり西を向く

恒松町紅

パン一つもらった恩が返せない
豆料理でんと主役の寺の膳
パチンコで少し休んで熱帯夜
お上品に食べる西瓜の味がない
反抗期いまトンネルを通過中

遠山可住

そのときがきたら宇宙を飛ぶだろう
蝮酒のんだ元気で草を刈る
負けてから五十七年生き延びる
美しい女の用心棒になる
海ゆかば水漬く屍と泳ぎつく

土橋螢

難民の飢えに追討ちかける夏
住基ネット見るまで不安見て不安
お人柄丸いが言うこときつすぎる
お中元届いたらしい黙礼され
雷も浮かれてるらし遠花火

西田柳宏子

時計狂うさまを見ている独りぼち
人待ち顔の犬と目が合う風の中
あきらめてならぬ鉛筆削りだす
真夜中の酒父の時代にさかのぼる
振り向いてやれば機嫌のいいコスモスよ

西村早苗

嵐寛のチャンバラ安心をくれた
とりあえず記録映画は受容する
昨日見た映画とちがう今日を生き
哲学を読む銀幕の悪役よ
名女優死んで今更歳が知れ

仁部四郎

梅雨が明けたぞ高校球児フレーフレーフレー
蝉やトンボにとっては受難の夏休み
ああそうかそうだろう俺の孫
あのことがあるから怖い血の検査
単身赴任馴染みの店は今日休み

野田素身郎

朝から晩まで禁煙禁酒強いられる
朝から晩までペンと煙草は手放さぬ
朝から晩まで寝煙草はもう止めました
朝から晩まで煙草止めたい煙草止めたい
朝から晩まで吸うて吐き出す冷房機

野村太茂津

嘘一つおんなの指のかくれんぼ
くちびるがゆがみポトリと音がする
淋しさのあまりの果ての高笑い
迷路から抜ければ墓地が見えてくる
みちのくや夏こうろぎの鳴くところ

波多野五楽庵

詩の秋迎える幸せに感謝
現代川柳　感覚派が生きる
身勝手な悪人を早期発見とは行かず
ヘルパーさんのお世話にならぬ川柳の知恵
一日一度笑いの種を探してる

藤井明朗

ふるさとの森へ翔びたい竹とんぼ
ふるさとの情けに出合う赤とんぼ
ふるさとは母の乳房の匂うとこ
血縁が薄れふる里遠くなり
思い出を重ね香を炊く父母の墓

藤村メ女

天神のまつりをふれる鉦太鼓
大阪の夏を彩るギャルみこし
おまつりにどんどこ船が勇ましい
船渡御を飾って夜の大花火
船渡御に大川筋が酔っている

芳地狸村

ビールでものもうか妻もうんと言う
幸せは酒に助っ人されて生き
人間の邪悪を笑う仏の眼
ぶっそうな国に日本もなりました
腹の立つ暑さへビール抜いている

宮口笛生

孤独追う無味乾燥の星月夜
底辺の生きる幸せ探ってる
誘惑に敗けて理性が揺れている
銀河追う列車に乗ろうロマン追え
盆会式送ってひとり広い部屋

森下愛論

そうだった　川も細くて浅かった
気掛りはあとの柱や屋根のこと
あとつぎの刺にも訳がありそうで
毎朝のたしなみとして殻を脱ぐ
もういいかい　まだよと送り火のたびに

八木千代

はや恋の助走はじめたレモンティー
洋風の窓から風にのるショパン
プライドが高く居場所の無い女
人間はお荷物だとなげく地球
君のテンション少し曲っていませんか

八十田　洞庵

両の素手神に合わせるためにある
終章の虹はまっ黒かも知れぬ
すっかりと教祖が神になりすます
正論に足枷はめたのは誰だ
ストレスが僕のハートに絡みつく

両川　洋々

僕の歳気遣う妻の塩加減
昼のお茶話題つかめぬ老い二人
ぬるま湯の中ではヒントまとまらぬ
馬鹿になり話まとめる年の功
嬉しさに浮かれて知性揺れてくる

阿萬　萬的

里帰りした娘の朝寝目に余り
山門を出ると煩悩ぶり返す
お隣も嫌煙らしい蛍の灯
ワン切りの稼ぎ律儀ヘターゲット
火の元は此所だここだと週刊誌

石川　侃流洞

十月の空を見上げる妻の愚痴
やがて雪降る日が近い大仙陵
真っすぐに打てぬ釘から恋狂い
愛された記憶うすれた母の下駄
愛されて波は静かに刑に処す

板尾　岳人

悪友と交わす連夜の温い盃
ノンハウスまだプライドは捨て切れず
偽りの殿堂たるや永田町
果てしなく冗句重ねる夫婦仲
冥福から入る同期の古稀の会

榎本　吐来

遺された哀しみ知るや秋の風
ちぎれ雲　昨日が通り過ぎてゆく
引出しに亡夫の声あり古ノート
明けの空　面影たたむ夜を畳む
今はもう羽搏いてよし高い空

奥田　みつ子

台風が近づいてきた雲の貌
果物のように胡瓜の丸かじり
ひと雨を待ってましたとくさは伸び
七輪のさんまに嵌り込んでいる
とっぷりと昏れた渚のリフレイン

河内　天笑

奥田 みつ子 選

完璧へ塗り足せば画布黒くなる
三猿を通して画布を白くする
成り行きによって私を上げる棚
千の語を並べ無口に歯が立たず
世渡りのヒントを徳利から貰う
してやれぬ悔いへ夢ある子が育ち

綾部市　藤田芳郎

万歩計今日の元気が計られる
カーナビに頼り起伏の道がない
そこまでの話がひとり歩きする
包装紙わたし飾ってくれますか
真っ青な空からだまし打ちに会う
完璧を期したつもりがぬけている

横浜市　近藤道子

瞬間を撮ったカメラの武者震い
読み終えた手紙に碧い空戻る

京都府　前上英一

眼底にふる里があり亡母もいる
スナップに余分なものが写ってる
千羽鶴翔び立つ窓は開けてある
椅子取りのゲームの果ての丸い背な

柏原市　永浜加津子

強すぎる風は手荒く疎ましい
素っ気なくするも自立のお手伝い
幸　不幸身丈に合ったものでよい
墓参り亡母と娘の出会い場所
真夏日は花もわたしも色褪せる
炎熱へ昨日の如く原爆忌

泉佐野市　稲葉洋

思考力枯渇しそうな油照り
炎帝に理性奪われ丸裸
何処へいった物の無い頃した我慢
つらい時風までつらい音で吹き
祈るしかないのか無常桐一葉

荒れ狂う私を海へ捨てに行く
師匠の芸舞台の袖で盗みとる
夏休み故郷で待つ人帰る人
石一つ水の流れを変えている
粗衣粗食通した母の深い皺

香川県　原　賢

明日と言う夢を両手に持っている
スキップを忘れた妻の赤い靴
携帯のメール無口な友になる
冷凍の恋が時々解けてくる
情報の海で迷子になっている

高知市　小川　てるみ

三原色混ぜて自分の色を出す
ロマン追う男はうしろ振り向かぬ
やわらかい声に油断をしてしまう
澄んだ目に覗かれている親のエゴ
夕立が去って風向き変り出す

鳥取県　澤　裕子

実直な男一枚きりの舌
鳴呼平和　八月の鐘鳴り止まず
小走りの秋に影法師がのびる
善戦の球児　敗者の影も泣き
抜擢の辞令を母はもち歩き

日立市　加藤　権悟

故郷の風が浴衣をふくらませ
着痩せした浴衣姿が良く笑い
腰に差す踊り上手の花団扇
暑いとも言わずカンナの花が咲く
百日紅無念の夏は遠くなり

東京都　井上　つよし

炎暑にも負けぬ五欲を張らせ
夕涼み藪蚊もミニの脚が好き
岩風呂を独り占めして旅に酔う
郵便屋のバイクを犬も待っている
黍団子尽きると敵に回るサル

岐阜市　平野　あずま

八月は血の色　日の丸染めた色
最後かも知れぬ恋です爪を切る
爪に紅このときめきは何だろう
こぼれ萩　女の果てを見るような
迷わずに行けば必ず逢える亡母

橿原市　安土　理恵

雑踏のみんな他人という孤独
飽食のつけがカルテに裁かれる
走る子にカメラも走る陽が笑う
人恋えばポストの赤が身に沁みる
駐車違反婦警にこにこ寄ってくる

奈良市　乾　春雄

八尾市　松葉君江

ハンサムのおいしい嘘に油断する
どたん場に立って神さま仏さま
村はずれ花のたえない辻地蔵
子の不安親の笑顔で包みこむ
あたたかい柄を選んでプレゼント

岡山市　藤原一平

肩書を外した時の父が好き
志抱いて少年雲に乗る
ふる里の香りが風に乗ってくる
煩悩のはざまで聞いた母の鈴
白旗はまだまだ見せぬ古希の坂

鳥取県　福西茶子

何もかも忘れた母の眼は虚ろ
赤い糸縺れたままに夕焼ける
好きだから枷にならない距離にいる
人間の中で人間学ぶ猫
夜明けまで風と戯れ風紋に

鳥取市　永原昌鼓

無記名にすると本音が見えて来る
しっかりと遺伝子だけは子へ残す
あと一本ほしいヒットがまだ出ない
母の手でさすれば痛み飛んで行く
あす咲かす愉快の種を蒔いている

鳥取県　西垣美知子

星の降る里母さんは元気かな
善を積み数珠を心の隅におく
しっかりと海は夕陽を抱いて寝る
流れ星私の涙かも知れぬ
虹の輪に包みきれない母の愛

鳥取県　山下節子

ひだるさを知らぬ子供のオモチャ箱
外見は同じレベルの社宅の灯
口裏を合わせた嘘がばれている
緊張を眼鏡拭いてはほぐしてる
嫁という枷が私を翔ばせない

札幌市　三浦強一

正論を呑み込んでいる風の向き
人生の達人らしい笑い皺
転ぶたび世の裏表見えてくる
言い訳の復唱をしてドアのベル
不発弾くすぶっている妻の語尾

今治市　塩路よしみ

ふる里は遠くて近い母がいる
子を持っていつまで続く母の舞い
入道雲ふわふわしてる訳じゃない
道草の匂いをつけて子は帰る
趣味三昧いまが花道かも知れぬ

北九州市　岡田幸生

ペイオフを嘆いて見せて金はなし
今日もまたトップの詫びるニュース見る
骨埋めるつもりの社から解雇状
飢餓の日を想えと伸びる芋のつる
初恋と並んで写るクラス会

南国市　小原圭二

排ガスと道連れになるへんろ道
戦いに息子は戻り盆終る
よく叱る先輩だった訃報くる
いい寿司を握る親父の無愛想
旅に出るバッグに二冊文庫本

高知県　桑名孝雄

人間ドック運命線は診てくれぬ
バルサンでわが家の悪を退治する
拡大鏡肝っ玉まで太くなる
妻からの亡命先を下見する
相撲大会じいが陣取る砂かぶり

高知県　近森功

減って行く残り時間へページ繰る
晩酌を生きがいにして鍬を振り
夫婦茶碗　一度は割って見たいとも
老春へ咲かぬ蕾をふくらます
ネクタイをはずして本音せきを切り

駄馬なりに余生は夢のあるくらし
化粧品サンプルだけでことが足り
割れ鍋にとじぶた夫婦平和だな
明日がある小さな夢を見る余生
平凡な和に気がつかぬ新世代

高知県　百田幸

琥珀色よほど魅力があるらしい
デジカメのように失敗消せるなら
ぶどう畑カラスに観察されている
美しく老いる理想と現実と
生き方上手今から始めるお勉強

松山市　高橋宏臣

一つだけ空いてる席を取る勇気
信用をしておりますと釘刺され
嫌だとは言わず理屈を言って立ち
肯定も否定もせずに愚痴を聞く
休刊日今日の流れに穴が空き

今治市　渡邊伊津志

背を撫でた風とゆっくり時を待つ
肩パッド外した妻の旅衣
肩書のない付き合いで知る至福
肩の荷がそこそこあって頑張れる
肩のコリ解くと名案湧いてくる

雑草よ少しは遠慮しておくれ
二人なら樹海の中も怖れない
割れ鍋の夫も捨てたもんじゃない
歯車のきしみへ芯を太くする
絶対評価ママは満足していない

愛媛県　花岡順子

歳を取り丸くなる人尖る人
濡れ衣が晴れても残る胸の傷
気をつけろ気をつけてよと老い夫婦
お金より優しさほしい老い一人
千羽鶴悲しく揺れる原爆忌

宇部市　高山清子

人間の祈りを乗せて風がゆく
負けん気の虫を一匹飼っておく
白旗を掲げて昼寝するもよし
にごり酒が飲んで欲しいと申します
人生を走ると早く終わりそう

竹原市　正畑半覚

種一つ大きな夢を抱く未来
ポストから母の匂いのする切手
四代の漬物石と語る妻
生きのびる知恵を借りたく辞書を買う
わたしの蛇口明日はあしたの水の彩

府中市　馬場利子

かけ引きを忘れてバラは散りました
珈琲と漢字で書くとおいしそう
偏差値の一種のようなボランティア
ワイドショー人の不幸で視聴率
人類に戦争好きなＤＮＡ

岡山市　大森純子

アイディアが光り儲かる不況の世
願い事多くて笹が悲鳴あげ
前向きに生きて後ろは振り向かぬ
匙投げた医術を超える家族愛
匙なんていらぬ味付け母の勘

倉敷市　撰喜子

義理かいて悩みのもとを膨らます
美容室ときめきくれる髪の色
プラス志向わくわくしてる生きている
暑かろうあつい暑いと墓洗う
墓洗う孫のことなど聞かせましょ

松江市　山根邦代

約束を忘れぬように書いている
落書も今は成長した証
漱石が英世に変わる新時代
早朝の風には秋の匂いする
想い出に亡母の匂いもついている

米子市　足立由美子

鳥取県　橋谷静江

一粒のダイヤがつなぐ夫婦仲
つまずいた度に私は強くなる
年月を重ねた数に無駄はない
躾だといえどすんなり受け付けぬ
金婚へ割れずに持てた夫婦碗

神戸市　山口光久

明日を見る心の窓を拭いている
カンバスが未完のままで夢持たす
冗談のなかで本音が牙を研ぐ
酒とろり今の幸せ離さない
道開くプラス思考で一歩ずつ

神戸市　両川無限

D五一のテンポに出世欲はない
無宗教だからいつでも手を合わす
丸洗いすると地球も青くなる
いざという時まで爪を研いでおく
ロマンより大事な今日の晩ごはん

川西市　井本清山

裏切らず二度花咲かす秋なすび
盂蘭盆に大根蒔いて秋を待つ
異常なしペダルが軽い検診後
間引き菜の味噌汁うまい朝の膳
菜園を誉められ籠に茄子胡瓜

篠山市　谷田多美子

地下鉄を出ると難波も夕立に
八十年生きた美人の笑いじわ
台所朝の息吹きの羅針盤
片思い姉と慕った友が逝く
ひまわりがしゃんと立ったよ俄雨

大阪市　尾崎黄紅

健やかに遠い渾名のままが来る
流れ星亡母さん逢いに来てくれた
散骨は戦友が待ってる海がよい
家建てて酒止めたとは侘しいな
盃の嘘は笑って許される

和泉市　横山捷也

返り咲き狙う男のナッパ服
口紅の赤からウソがポンと出る
失恋の痛み知っている電話
すり抜けた噂追わないことにする
練り過ぎて結局元の案になる

大阪狭山市　羽田野洋介

古希近しまだまだあった学ぶこと
石ころの波紋に揺れたこともある
金の世に人の情けの深さ知る
三日なら過ごしてみたい無人島
昔話寝たきりの母取り囲む

軽快に白魚跳ねるピアノソロ
人形の涙を見たり世の名残り
嵐呼ぶ梨園に若き獅子生るる
諸行無常法話邪魔する蝉時雨
こころ満ち足りてロスタイムを生きる

堺市　梶本哲平

見ない振りして善人の顔でいる
青春のこころを運ぶ筆の先
極楽と思える風の中にいる
公園の大樹に貰う深呼吸
本当の仲間手書きの温かさ

吹田市　木下敏子

夏休み老いの財布を軽くする
筋書きになかった一人暮しする
母の意地失敗談は語らない
古希の坂心に躾つけたまま
かたつむり何が不満で引きこもる

吹田市　二宮栄子

妻よりも素直に付いてきた鞄
海の日もせっせと登る山男
一葉と英世の顔が世を変える
来し方をみんな知ってるこの鞄
履物をそろえてくれた茶髪の子

豊中市　藤井則彦

素敵だと素直にいえぬ自尊心
茶道具へ亡母の香り父の愛
どん底を仲間の檄で蘇生する
文明の違いでいのち値がちがい
正論をぶった気骨を煙たがり

富田林市　稲川惠勇

秋夜長読みたい本がありすぎて
秋の色に私を染める菊花展
セーターを編む気にさせた秋の冷え
親の方が燃えていました運動会
天高くグルメの旅に出ませんか

羽曳野市　福田悦子

明日へのノウハウ貰う縄ノレン
本日も年功順に生かされる
エピソードマイク喋って場が和む
ハンドルの休憩せがむ道の駅
風鈴の風の優しい昼寝時

箕面市　北川ヤギエ

八月の雲忘られぬ原爆忌
岩清水本物の味手で掬う
浮き沈み越えた私の盆の月
窓際の人生椅子の暖かさ
一人旅あなたの影に包まれる

和歌山市　松尾和香

和歌山県　森下順子

クラス会男ばっかり欠けていく
旅人の目には美し田舎町
ほろ酔いで知床旅情演じ切る
海鳴りに恋の挽歌を聴いている
臆病風が吹いて無難を選ぶ癖

和歌山県　辻内次根

ビー玉を覗く記憶の青い海
有り余る時間で増やす趣味ひとつ
黙々でいいです細い影ひいて
真実へ凝らす眼が二つある
病院の待合室はみな無口

京都市　清水英旺

昼寝する妻のうちわの手も眠い
蝉しぐれきようも炎暑か寝覚め床
皿洗う何とはなしの充足感
どしゃ降りの夕立街の下熱剤
また一つ歳を重ねて忸怩たる

横浜市　荒井広和

社史だけに残して過去を切り捨てる
繕って来た甲斐がある古希の自負
ひと呼吸して真夜中のベルを取り
風鈴の音にも愚痴る熱帯夜
倖せに浸る苦労の回顧談

横浜市　長島亜希子

憧れのウスユキソウに会いに行く（早池峰山登山　3句）
宿坊を登山の客が占拠する
夫婦して登れる幸を感謝する
生きているだけで幸せよと言われ
暇　元気　あって青春最中です

東京都　清原悦子

玄関に一輪さして客を待つ
親切が災いとなるお節介
ふる里はやはり心の中で生き
少しずつ角もとれてる下り坂
エプロンをとっても母は肝っ玉

武蔵野市　亀井円女

辛抱出来ず流れに棹を差すことも
父という樹の温もりをまだ胸に
中位でも亡母に貰った好きな顔
初曽孫見ればみるほど男前
あちらにこちらどなた様にも有難う

秋田県　湊修水

権力が道を外れて歩き出す
リフォームをそろそろしたい倦怠期
台風の進路貧しい島に向く
歳とって丸くなるのは背中だけ
ヒグラシに肩たたかれる立ち話

藤井寺市　若松雅枝

海征かば亡兄の歌声まだ耳に
踏まれても内に力を溜めている
子守歌聞こえてきそう里の家
理想には遠いが温い家がある

岸和田市　亀井皎月

優しさに触れて老化が立ち止まる
ささやかな抵抗赤いシャツを着る
喜寿近し妻の毒舌常備薬
八起きめも最後の転び考えぬ

松江市　松本知恵子

行商の温いトマトを手に貰う
記憶から記録に残すヒロシマ忌
散歩道盲導犬とすれ違う
夏まつり神楽の神と踊ります

尼崎市　河津正治

公園のベンチで風の独り言
ブランコが心の揺れを見抜いてる
風を読み少女の耳朶も紅を差し
パセリふとたまには乱れてみたくなる

吹田市　須磨活恵

まだ夢のかけら引きずる影法師
身の内の小鬼といつも押し問答
諦めた種火撲る罪な風
いわし雲人にそれぞれドラマあり

和歌山市　土屋起世子

番号で呼ばれ私の影返事
福耳の孫に期待ののし袋
高速の下でしたたか生きる森
夏バテもせずに見てます　みのもんた

東大阪市　田中美弥子

虹へ届く翼がほしいやせ蛙
古都の鐘こころ平らにしてくれる
はしゃぎすぎ空しさだけを抱いて寝る
女の直感侮ること無かれ

大阪市　三浦千津子

ひまわりの視線が雲を突き抜ける
口にせぬ言葉詰めてる堪忍袋
明日生きるパワーをくれる大夕日
都市砂漠四角な空に秋の月

尼崎市　軸丸勝巳

葬は急ローカル線の気の利かず（葬　2句）
風と共に台風の日に姉が逝く
OB会鬼も仏の顔になる
八月の重さは消えぬ半世紀

横浜市　巖田かず枝

真夏日よ頑張らなくていいんだよ
真夏日が大きな顔でいばってる
言う事を聞かぬ頭だ手だ足だ
飼い犬が隣近所の仲保つ

あさがおや朝の空気をひとり占め
気がかりで蹴って見ました瓶の蓋
一輪は一りんなりの美しさ
友が来た笑い袋をふところに

島根県　菅田かつ子

ひとり旅放浪癖が雲を追う
生真面目な夫が座る真っ四角
負けて勝つ知恵を拾った回り道
良い話少し呑むかと妻に酌ぐ

羽曳野市　森下一知

まだ女　米寿過ぎても紅を引く
安穏な今日一日に感謝する
なにげなく吐いた言葉が人を刺す
川の字に猫も昼寝の老夫婦

鳥取市　山口千代子

言い訳に血液型を出しにする
ブロンズを緑に染める酸性雨
ご無沙汰の電話で借りを思い出す
どの花も緊張してる菊花展

横浜市　秋元和可

すげかえた首が合わないモーニング
環境に心優しいうちわ風
パチンコを家でしているあほらしさ
父の背が気になり出したすねかじり

河内長野市　大西文次

朝市で能登の香りを持ち帰る
バス旅行触れ合った縁まだ続き
振り向けば棘の道も茜雲
二人して歩いた道も様変り

大阪市　西川更紗

一ツ身が三つ身になった夏祭り
ラッシュ時に乗れば気持も若くなり
心電図時々謀反起してる
冷えた部屋孫といくさの話する

東大阪市　笠井欣子

自我という縄に縛られ生きている
楷書しか書けず垣根の外にいる
笛吹けばついて行きます向い風
四捨五入すれば話が丸くなる

八尾市　田中トシエ

ふるさとで変らぬものは波の音
聞き上手しんみり相手しゃべらせる
誰にでも振れる尻尾になっている
円満を願うスープのさめぬ距離

八尾市　山本宏至

ぶらぶらな右手に神経来ぬものか
神経がふらふら苦手なことばかり
杖ついて袋を下げてポスト見に
ツツツツツー麻痺の右手つり上がる

横浜市　豊田羊子

肉少し感づいている犬いとし　アルゼンチン　松井　美稚子
孫のよう子犬を抱いて客送る
見えてない電話にジェスチャーひょいと癖
柳誌より遥か大和の輪血受け　ニューオリンズ　阿良喜　聆
やっちやった好きなコップが一ツ減り
亡き母の湯呑誰にも触れさせず
孫の熱下がっておばァーも食進み
万歩計腰に仲良く老夫婦　宜野湾市　杉谷　一栄
先ず犬に好かれて近所仲が良い
親子って言葉足りないとこが似る
昇る陽も沈むも見えて窓ひとり
書き違い言いちがいする勇み足　唐津市　坂本　兵八郎
パラサイト幼児期ボタンかけちがい
参観日私語する親が顔並べ
姑には小枝折らせて幹を折る
腹の虫強めの酒で押え込む　松山市　古手川　光
日本が滅ぶ少子化スパイラル
研ぐという文字も死語へ無洗米
風鈴も黙りこくって熱帯夜
炭坑節がなぜか空しい盆踊り

お願いは孫がお世辞を言ってくる　松山市　山之内　八重美
夾竹桃あの日も赤く燃えていた
球を追う夢が叶った甲子園
うら盆会切ない思い蘇る　愛媛県　黒田　茂代
せかせかと生きて見落とすこと多し
ポップスも爪弾く若い三味奏者
辛口の話に効いてくるわさび
夏の利尻島残雪のアクセント　愛媛県　安野　案山子
体温を超える暑さへ蝉時雨
枯れそうな蔓へ西瓜がしがみつく
炎天へ秋の気配の赤とんぼ
鳥小屋の苛め見付けてほっとけず　岡山県　土居　ひでの
おはようの勇気を貰うサクラ草
カーテンをピンクに替えてから元気
梅干しの欠かせぬ膳で老母元気
ふところが深く眠れる母の海　岡山県　国米　きくゑ
迎え火に華やいでいる先祖の霊
盆提灯火影に揺れる亡父母の顔
照る曇る日々大切に夫婦みち
点滴に呼び戻された吾が命

松江市　松浦　登志子

欲しい物頬ふくらませ手に入れる
情けある言葉をかけてくれた月
淋しさのあまり背いたサクランボ
夏椿背いた男振り向かす

出雲市　加藤　スズコ

嘘一つ明るい話題で友見舞う
古里のやさしい風の中に住む
逆境に母は無言で傘をさす
遠い日の夢が落ちてる田舎道

出雲市　川島　和歌子

つばめ二羽去年の古巣忘れずに
歳重ね脳が次第に凝固する
どんどんと今日という日が過ぎて行く
船頭多く進むどころかもめている

出雲市　栂　ミツヱ

岩の上静かな波がさそいくる
海静か波と昼寝がして見たい
盆が来た亡夫を思い涙出る
友が病み心の中が暗くなる

出雲市　荒木　英子

佐渡のトキ容姿端麗一目惚れ
大暑来て海見える町恋しがる
夏盛り冷やソーメンで涼を呼ぶ
自分史をそろそろ書く気させる過去

島根県　福間　博利

天高くまだまだこの世楽しめる
健康法　散歩昼寝とおしゃべりと
シベリヤの夢に出て来たにぎりめし
一つずつ有事立法背番号

島根県　持田　多輝子

ガン告知奇跡を祈る生命の灯
ノーメイク心の和む浜育ち
幸せな便りのろけも書いてある
うっかりと本音をもらし墓穴掘る

島根県　毛利　幸

店頭の野菜季節を忘れてる
夕涼み川風そっと顔撫でる
ひぐらしに故郷の山川想い出す
人は皆さだめ背負って生きている

鳥取市　岡田　信恵

何もかも許す涙だいじらしい
円い人みかけによらず角がある
人間がそれらしくなる回り道
鈍行も終着駅は同じ場所

鳥取市　横田　春名

沈黙の背にでもねと手を伸べる
一言が沈めた泥をかき回す
去る人は大物に見え眼鏡拭く
家族だよ消しゴム役を引き受ける

郵便受けに解雇通知が寝てました
生命ともいえる娘に叱られた
臆病よ少しかけっこしてみよう
まだ生きるつもりで職についてみる

鳥取市　大坪天涯

気障になるたったひとこと言い出せぬ
ピリオドはもう少し先風に聞く
追い風は止んだひとりの風になる
戻らない猫一ぴきが眠らせぬ

鳥取市　森美智代

名水となればどんどん付価がつく
遊び場はアケビの熟れた山や谷
どろだんご作ると母の声がする
花の株分けて楽しみ倍となる

倉吉市　大下智子

言うことを聞かせるための魔法かけ
頑固すぎ脱皮できないままでいる
鳥かごを出よう自由になるために
本性を隠す仮面をつけている

倉吉市　森川あらた

初めての値札を貼った絵画展
恙無く金婚式に向かう朝
朝顔が咲いた話で朝の膳
妻二病　夫三病　労わりて

米子市　小塩智加恵

診察券余生ゆっくり泳がせる
温度計故障したかと振って見る
シャンシャンと雨乞い傘の乾いた音
いい天気続いた揚げ句愚痴も出る

米子市　猪森スミヱ

声殺す合掌　肩が軽くなる
足もとの明るいうちがふらつかぬ
押し問答しては流れの岸にいる
八月十五日　貴方は何をしてました

鳥取県　平尾菜美

団欒を育てた母のまるい背
スランプの肥やしがきいて花が咲き
目じるしの一本杉は動かない
特攻の寄せ書きにじむ友の顔

鳥取県　鈴木一弘

口下手と不器用一生つきまとう
ふつふつと親の偉大さ三回忌
直線コース惨事の花によく出会う
仏壇へ洋花どこか似合わない

鳥取県　吉田弘子

帰省客迎えて主婦の夏の陣
誰だってロマンを胸に生きている
原色でギラギラしてた若い夏
おのろけをご馳走になる新家庭

鳥取県　細田裕子

原色もあなたしだいで七変化
愛憎の糸が絡んでやがて秋
親子だな勉強ぎらいだけが似て
面倒見のいい人だからあまえてる

鳥取県　岡村孝明

手抜きしたツケに今でも悩まされ
次世代へ残す杉山手入れする
摘み終えた庭木眺めて杯すすむ
無二の友古希を過ぎても助け合う

和歌山県　中村君枝

実り多い一日だった娘の新居
接点を互いに模索する夫婦
パズル応募冴えぬ頭を持て余す
八起き目の手綱ゆるめず半生記

和歌山県　村中悦男

吉凶はまさかと思う後に来る
友情はまさかと思う底で咲く
鬼とても露より光る泪する
うるさいと言われて老いが深くなる

奈良県　江波正純

チャンスには頼らず歩くマイウエイ
蝉しぐれ降るせせらぎで絵三昧
お小言がもぐらたたきのように降る
そのうそに気づかぬふりをする平和

神戸市　伊勢田毅

ケイタイを持たぬ男で自負がある
露天風呂湯気の向うに猿がいる
洞ヶ峠で旗立てる時機狙ってる
切り札を使わぬままに幕を閉じ

神戸市　田中章子

訪ね来るひよさえ可愛い昼ひとり
親は子の大器晩成見ずに逝き
めがねしてめがね探している自分
逆立ちで時間もどればいいのになぁ

尼崎市　林昭三

甲子園太陽と砂持ち帰る
通学路大人も信号守ってる
台風一過 素焼きの鉢を二つ買う
新しい海図直線太く書く

伊丹市　延寿庵野靄

ワンタッチアイボと遊ぶ老いひとり
相席のプランに変えるひとり旅
竹ベラの土器がゆっくり喋り出し
ネジを捲き時間をもどすクラス会

三田市　石原歳子

端切れ買い見よう見真似の孫の服
洗濯の竿から消えた布おむつ
箒目を踏むのも惜しい寺の庭
食卓はいつのまにやら和食党

宝塚市　飯西ミサヲ

梅干しを持ってきました日向ぼこ
さるすべりたくさん咲いて許す気に
若き日のまだ捨てられぬ日記帳
何故かしらこの身侘びしい物忘れ

兵庫県　安達厚

古希なんてまだまだ若い恋してる
盗まれた西瓜お布施とあきらめる
困ったら記憶にないと言えばよい
みかえりの影がちらつく贈り物

大阪市　岩崎公誠

役人が技を極める二枚舌
人生の船漕ぐ腕が痩せ細る
都市砂漠役目を探す蟻の群
渡りつつなにか嬉しい村の橋

大阪市　伴洋子

よしもとの笑い浴びせる石頭
小利口な女手玉に取り易い
理想とのギャップ適わぬものと知る
莫山の穂先は海を飲み尽くす

大阪市　熊代菜月

遊軍になって肩から力ぬけ
思い出のビデオ元気な亡母がいる
下手な嘘だまされておく思いやり
絵手紙が無沙汰の友を呼びおこし

大阪市　寺井弘子

かき氷で涼を取りつつ夏過ごす
夏休み朝寝させない蝉時雨
うす味に慣らされ妻の言うがまま
ときめきの心失くして老いてゆき

大阪市　池上清治

祖母と孫おしゃれの好み合う不思議
アフガンにブルカを脱いだ素顔の美
マラソンの先頭を行く細い孫
デパ地下は味見をしたいものばかり

池田市　多田契子

意見する人ばかりいる大家族
お若いのこの力こぶ見えないか
味見する舌は元気に批評のべ
納得の挙手の高さに温度差も

河内長野市　印籐智子

八月の酷暑当時を思い出す
台風に会話貰っている二人
褄取りのようにロングを持ち上げる
自分似の孫がやっぱり可愛くて

吹田市　木村無禄

我未だ叱る母あり墓参り
癌告知勝つも負けるも長期戦
官庁の賞与税金だと思う
住基法此の身数字に成り果てる

高槻市　乙倉武史

秋晴れの一と日を歩く握り飯
努力せず痩せ願望の薬漬け
水だけは欠かさぬ草花思いやり
六回忌亡妻に欠かさぬ月参り

寝屋川市　岡本勲

北極の海が泣いてる温暖化
困った顔みたくて無理をいってみる
絶妙な造花に生花拗ねており
友想い西国巡る老いの春

枚方市　荘司弘之

寂しさは線香花火のポトリかな
楽しみは同類項で集う酒
返金で感謝されてる名幹事
子と将棋本気が少し顔を出し

藤井寺市　俣野登志子

ことごとに家事のノウハウ教えとく
八卦では娘とっくに金屏風
立ち話トンボが肩で仲間入り
休めない話の種にされるから

藤井寺市　西村栄一

いい世辞に出合い心の風が凪ぐ
風と散る花の行方は追いません
谷川は昔のままに流れてる
鮎の骨も男の骨もうまく抜く

藤井寺市　吉田喜代子

親ばかり化粧直しの地蔵盆
ニラ　ゴーヤ夏に負けじと食べている
見栄ばかりキリギリスだと気付かない
故郷を背に戦いの大都会

箕面市　寺井柳童

ニアミスを時どき起こす人間と神
連休の疲れ会社で癒してる
病院にあずけた命プロのミス
割り勘にほっとしているレジの前

八尾市　與田明

政治記事まじめに読んで腹が立つ
盆踊り千鳥足でもよいリズム
しみじみと男ひとりの盆供養
隠し事あるから無駄を喋りだす

大阪府　前田忠子

いさぎよく刹那焼きつけ花火済む
星の夜未知の世界に夢弾む
クルージング大阪湾はセピア色
どん底を知って優しいお人柄

大阪府　藤井郁代

秋色の服に着替えてさて何処へ
一面のコスモス畑童心に
フルーツが美味しすぎます秋太り
国産の松茸ごはん孫が来る

京都市　三宅満子

蝉トンボ追いかける子も見ない街
入道雲に元気をもらう夏昼間
日めくりの教訓立派すぎ疲れ
暑中見舞　返事気になり暑さ増す

草津市　久保和友

夏見舞　水客死すのことに触れ
鉄道局がありましたのやカメラ店
自分史に国鉄一家など書けず
こんな句はよくあるなあと夏見舞

尾張旭市　三浦きぬ

あの世まで持って行く嘘二つ三つ
鍔広の帽子の中は美人かな
深夜便タイムスリップ青春歌
個性ある文字だと下手を自画自賛

静岡市　中西雅

待合室近所のうわさてんこもり
農婦の汗太陽と仲がよい
履物のぬぎ捨てざまに人を見る
オアシスが虹の向こうにきっとある

富山市　松見たえ

君というカンフル剤に沸く勇気
秀才の家系に生まれ落ちこぼれ
子の見せる癖が夫に生き写し
良く笑う嫁が来てから輪が温い

横浜市　金森徳三

呆けじゃないとぼけて聞えない素振り
程ほどと適当好きで丸く生き
年寄りにほど良いうちわ冷奴
浄土にもメールよ届け盆の入り

横浜市　三村八重子

言い訳を言えたら空は高かろう
矢印に命あずける登山道
日めくりを可も不可もなくめくる夜
一言の過不足あって気の疲れ

横浜市　芦田鈴美

グリーンの起伏がプロの目に挑む
日本を出て才能が磨かれる
あついあつい言っても腹はちゃんと減る
お断り言うには笑顔優しすぎ

横浜市　山梨雅子

歩かない犬を抱き上げ散歩させ
庭いっぱい　のうぜんかずら見て暮らす
草むしり大事な野草引き抜かれ
一本道苦手な人がやってくる

横浜市　平達也

孫の名で息子を呼んで笑われる
鬼ごろし飲んで仏の酔心地
慕情の丘訪ねる老いの二人旅
秋深し幼時を偲ぶ熟し柿

横浜市　鈴江純子

チャンス無く知恵の引出し錆びはじめ
目をいくつ持っているのかうそ見抜く
共にした歳月を消す離婚劇
シースルー熱波の中を泳ぎきる

川崎市　浦野昭志

残り火で程良く家族温める
夕立が去るといちどに虫の声
夕焼に今日一日をありがとう
蝶を追う親子の網がもつれあう

川崎市　塩澤ひで

溜め込まず心に風の通り道
思い切り怠惰に過し秋を待つ
観音の半眼明日を教えられ
吹く風にぶらりへちまのいい加減

藤沢市　妹尾安子

ダイエット　コンニャク様に感謝状
飼い主といれば威張って吠える犬
宝石の似合わぬ指で母元気
娘の電話盗聴したい親心

東京都　やまぐち珠美

巧妙に造られている日記帳
一条の芝居であってほしい恋
夏の瞳　目深な帽子からこぼれ
通天閣のふもと昭和を抱いている

町田市　土田今日子

プチ家出　信じぬひとで儘ならぬ
喋ったら男が廃るんでしょうか
日本の長さに四季の順送り
年金の目減りを見越す買い渋り

野田市　那賀島雅子

明け方の夢の欠片をつないでる
わが胸に音のみで画く遠花火
増えすぎたストレス捨てる縄のれん
すぐばれるグラスに浮いた軽い嘘

日高市　根岸方子

金持ちでないから家庭平和です
去年とは違う雑草庭に生え
善人になれぬ私の負け戦
近況はいいことだけが書いてあり

秋田県　秋野宏

娘の癌にただおろおろの親でいる
四十九娘の葬儀ことばなし
職安に安いプライド捨てて来る
ことごとく自業自得と心得る

青森県　福士トキ

ハイビスカス北の国にも赤く咲く
生きている証か太陽背を焦す
蝿一匹一人芝居の盆座敷
朝顔に今日の力をもらいます

蝉時雨おれがおれがと自己主張
歳重ね心美人が見えてきた
筋通すこともしんどい老いの道

枚方市　小川良吉

赤トンボ私に会いに窓のぞく
陽が昇り心に生気湧いてくる
七坂を越えて丈夫な母となる

鳥取県　山岡久枝

古里の方言やさし盆踊り
敗戦日泣いた涙がよみがえる
この暑さ球児の汗は真珠だね

鳥取市　谷岡清子

盆花を抱え亡母に会いに行く
こおろぎが残暑いやしてくれる夜
はつ秋の風が青田を泳がせる

藤井寺市　伊藤アヤ子

自信など無くても木の実たち弾け
純な子の白い歯がでる唄が出る
ワインから溢れ出てきた人情味

鳥取県　竹森富久江

友が逝くだんだん淋し老いの坂
花の咲く庭が見たくて遠回り
人恋し用もないのに電話する

大阪府　小栢こずえ

コーヒーで別れてからの思慕つのる
砂に水吸い込むように母の愛
いやな過去忘れたいのに胸に住む

今治市　野村清美

舵とりが危うくなった夫婦舟
ひとつ家に住んで似通うのが怖い
これ以上痩せられません板挟み

島根県　武島ちよえ

病友の生きる姿に涙する
過疎の村子等賑やかに虫を取る
冷そうめん暑さいたわる嫁姑

鳥取市　河田のり代

この家を素通りしてくお中元
盆踊り浴衣の孫のいとおしい
喜寿過ぎた男に重い背番号

因島市　村上和輝

髪染めて若い輪のなかとけこんだ
待望の雨音までもはねている
パソコンの若い仲間と仲よしに

兵庫県　黒崎美紗子

衣食住どっち向いても中国製
またですか今日もテレビで見るお詫び
高齢化戦いすんで日は暮れず

交野市　田岡九好

巨人じゃないトップニュースは日本ハム
夏休み豆台風が一過する
渋滞のニュース見ながらビール飲む
大阪市　中村忠敬

よろこびを分かつ夫のない孤独
敬老に招かれ老いが加速する
花に惚れ刺で傷つく鬼あざみ
大阪府　畑中節子

泳ぎ切る自信もなしに船出する
泳ぐのは下手でも水には浮いている
泳ぎ切りあとは浮輪に身をまかせ
鳥取県　池澤大鯰

冷房の効き過ぎくしゃみがキャッチする
虫までも日本乗っとり狙っとり
コーヒー店だけが元気に香り出し
大阪市　平井露芳

独り居に退屈させぬ絵の具皿
ほおずきの赤の風雅さ短冊へ
挑まないしかし好奇は老いさせぬ
兵庫県　岩本美緒子

弱そうでしっかり手綱にぎってる
職退いた夫は金魚と波長あい
巣立っても細いまんまの父の脛
鳥取県　平木公子

立秋を知るやつくつく法師蝉
水撒きに蝶やトンボもよってくる
労働の汗へ冷たい缶ビール
唐津市　岩崎實

生き方を見習う理由は我がのため
大声は傍迷惑と蝸牛
貪りへ手持ちぶさたになる片手
高知市　澤村哲史

にが瓜もゴーヤと呼べばにがくない
蝉時雨せみも鳴かねばならぬ夏
割箸に抵抗のない冷やっこ
愛媛県　宮本末子

他人事で悩みじっくり聞くゆとり
傷付いた胸がふる里恋しがり
五感まだ狂わぬうちが華と知る
香川県　伊勢八重子

信頼が持てる自分で悔いがない
腹八分食べて病が寄りつかず
この余生明日を夢見て今日耐える
香川県　松村輝夫

時代です案山子ミニ着て鳥の番
似ないでよいとこが似て来た親子です
波たたぬ日日に感謝の手を合わし
香川県　向山治延

八月忌学徒で散った友悲し　府中市　岩本雅代

真夏日よビール味方にして生きる
ストレスを捨てにカラオケ演歌節　安来市　原煩悩児

初孫に勝る夢など持ちはせぬ
日本の平和の影に原爆忌
台風の進路ひたすら神仏　鳥取市　近藤秋星

納涼祭　寮母はみんな踊り好き
梅雨は明けたが景気の梅雨はいつ明ける
恋一つ川に流して夏が逝く　鳥取市　西尾敬之介

激しさは道半ばまで息切れる
風鈴も古さに比例音渋く
理由ありの品不思議にも売れてゆく　倉吉市　前田喜美子

青田吹く風に団地も窓あける
いけません　きっぱり叱るママが好き
帰省客うけて兄嫁疲れぎみ　倉吉市　青砥菊枝

雨静か君の爪弾き聞きたいな
トラブルを消してやさしい風に逢う
どの顔も善人となり手を合わす

一人前恥もかかなきゃなれません
女ざかり無口になんてなれませぬ
これからもきっと地球に住むだろう　鳥取県　蔵本悦子

語部を囲み子供の輝く目
神さまに希望と聞かれ今のまま
ときどきは切れぬ切れそう綱を持つ　鳥取県　岩崎和子

不況でも花火が揚がるうちはいい
年金もカットするぞという政治
夏草も白旗あげるこの酷暑　鳥取県　竹信照彦

隣国へ頭を下げて援助する
ああ未だ仏になれず靖国へ
甲子園寄付だけ集め予選落ち　鳥取県　松川行男

大ホール出来てスターの顔も見る
太鼓判押して彼女を連れて来る
愛車とのお別れボディー撫でてやり　鳥取県　河本晴子

好奇心持てば持つほど若くなり
楽しみはスタンド消して見たい夢
酒の量増えるにつれて本音出し　和歌山市　橋爪佐一

ふるさとの風を包んだゆうパック
旅の人皆金持ちの顔をして
涼しさに歩け歩けの貯金する

和歌山市　北村光男

嘘表示魚　肉　野菜全部嘘
古稀間近　紫香先生目指す今日
子や孫と話の合わぬ歳となる

和歌山市　前岡健三郎

炎天下泣いてる蝉のたくましさ
補聴器をそおっと入れて嫁の声
自分史をちょっと脚色してみたい

和歌山市　根田美子

どうなるの放漫絡む支援室
内閣の派閥争い始まった
うらやまし　わが友そっと逝きました

和歌山市　宮本三喜夫

夜光虫ほどの明かりに救われる
青春を彷彿させる友のデュオ
デュオリサイタルに昇華されてく我が心

海南市　堂上泰子

ムーンライト私の微罪包み込む
手酌にて本音揺蕩う友の顔
水まくと庭木みんなが憩ってる

生駒市　飛永ふりこ

久しぶり友とかわすはうまい酒
役職を離れて真の話し合い
夏の夜星を眺めて宇宙論

生駒市　小西稔

この酷暑考え方が雑になる
面倒なことは涼しくなってから
変ですね今年は見ない蟻の列

神戸市　木村忠義

包んでた虫の居所破けだす
生き甲斐は今　プランなどない老後
虹の色涙に包む原爆忌

尼崎市　桑原東園

真珠婚ことこと煮詰めた夫婦味
サングラスかけたとたんに人変える
父の日に顔も知らない父思う

三田市　辻開子

この酷暑点滴よりも生ビール
遠花火涼み床几へ対浴衣
人妻を誘いデュエット北空港

姫路市　服部一典

せんべいで写真に入る奈良の鹿
脳みそを掻き回された抽象画
落書きも展示されれば芸術品

大阪市　伊藤博仁

大阪市　星野　きらり

夏休み婆ちゃんの財布空にする
だまし舟あなたと漕げば海は凪ぐ
団魂の世代も白髪せわしない

和泉市　小坂凡英

そうはいかぬが正論の孫清々し
遠雷に首伸ばし待つ熱帯夜
ふりかざす正義と力欠ける慈悲

泉佐野市　備後三代子

すれちがい今の子　男　女かな
去年の今日夫の手術の回顧談
隠しごと出来ぬ性分似た母娘

門真市　矢阪英雄

光線で心問われた闇の浜
一気のみ一夜あければ点滴を
恋ひとつ成就したのか花火咲く

河内長野市　木太久正一

気まぐれの妻の波長に逆らわず
内科歯科三十年のお付合い
甲子園若い力が夏を裂く

岸和田市　坂口英雄

散髪屋趣味が合うので決めました
ザリガニを見せれば孫は伊勢エビか
いいスーツ眺め財布を確かめる

堺市　大橋錦

宮城から空の旅して孫二人
孫達は帰る言葉を嫌い出す
孫台風去った玄関二足だけ

堺市　河盛龍三

立秋はうだる暑さに潜む風
嫌われる野良猫母子は睦まじい
安請けの癖は直らず四面楚歌

堺市　荻野像山

ガム噛めぬ友がこのごろ多くなり
本題はそこそこ熱が入る余談
隣席の美人へ顔が向きたがる

摂津市　もちづき遊美

ぶつかってしまい御免と茶髪の子
田の蛙　鈴虫の音の絶えて無く
えのころ草異郷の友が偲ばれる

高槻市　執行稲子

悲喜こもごもひっそり詰めて靴並ぶ
ひと夏の憂さ忘れけり盆おどり
MRI返事はくれぬ更年期

高槻市　大崎侑子

努力こそ実りを生むとあがいてる
生まれるも死ぬのも神の思し召し
夫にも買える瑪瑙が誕生石

あじさいの紫　母と午後のお茶　高槻市　安田忠子

若者の善と美を見たW杯

平和だな湯布院の旅湯の香り　豊中市　源田啓生

恬淡と生きよと古希に諭される

古希などは未だ初年兵長寿国

甚平に風を透かして無一物　羽曳野市　濱口フジ

青春を暑さで燃やす甲子園

還暦の思い出さがし一人旅

旅の宿湖畔の宿を口ずさむ　羽曳野市　永田章司

熱帯夜寝起きは熱いお茶が良い

年金で大金無いが小銭あり

役割をきっちりこなす黒子役　東大阪市　今岡貞人

ついちょっと洩らした語尾が歩き出す

他愛ない噂に踊る影法師

了見がせまいと海に叱られる　枚方市　大昇隆広

ふっと旅へコスモス風に揺れたから

いつまでも母の賛美が要る男

台風が作る団らん久し振り

お名前が思い出せないまま別れ　藤井寺市　増井ヨシ枝

目がさめて有難うから日が動く

日焼け肌一足先に秋を着る　八尾市　中島春江

朝顔の蔓に自我あり意志のあり

古着物手ばなすでなく着るでなく

母逝きて里遠くなり盆の月　八尾市　平川幸枝

夏の雲謀叛に湧いたハタタ神

ホタル一匹女の手の中に住む

打ち水の杓子にホース暑に遊ぶ　大阪府　東文江

母の味おしえてもらい娘は嫁ぐ

初孫に抵抗もなくおばあちゃん

浜風を気にしながらの甲子園　大阪府　桑田ゆきの

雲の峰見ても涙腺弱くなり

敗戦の玉音今も耳朶にある

蚊を打って溜めたストレス晴らす嫁　大阪府　野田栄呼

四季通し海山の幸母の膳

抵抗力減る分増えてくる薬

ゆるやかに川柳人生坂登る

風鈴もうちわがほしい昼下り　大阪府　高木道子

さんま食べグルメ番組観ています

哀しみに去年と同じ百日紅　新潟県　高野不二

サッカーが終ってテレビ取りもどす

番号のある人間になり下がり

ひょっとして発表を待つ宝くじ　横浜市　吉田裕峰

裏の裏読んだ噂がまた流れ

切り札を隠して妻は低姿勢

年金が介護保険で薄められ　横浜市　布山嘉信

見通しはつかぬが先ずは王手飛車

陰陽師不安の世相餌にする

源平のホタル仲よく闇に舞う　横浜市　石原三郎

笑顔には心の奥が読みきれぬ

聞く耳を持てば相手も聞いてくれ

熱帯夜　団扇でしのぐ頑固者　川崎市　小林久美子

悔いばかり残る過去には蓋をする

商いの浮くも沈むもケセラセラ

三叉路で迷う磁石を持ち歩き

税務署へ着てゆくもので迷ってる

幽霊を見る目で席を譲られる

酔うほどに唄がどんどん古くなる　川崎市　中村泰竜

きこえない寝息に無事を確かめる

シルバーのシートはいらぬ踊りの輪

いい人と褒められ今日はよい日柄　川崎市　大島三四朗

第25回　神戸川柳大会

とき　11月23日（勤労感謝の日）午前10時開場

ところ　兵庫県民会館9F大ホール
神戸市中央区下山手通4丁目16－3
☎078－321－2131

課題
「プロ」　村上氷筆（ふあうすと川柳社）選
「メニュー」　卜部晴美（時の川柳社）選
「プライド」　荻野圭子（川柳展望）選
「シンボル」　濱野奇童（弓削川柳社）選
「テスト」　小松原爽介（時の川柳社）選
「リズム」　泉比呂史（ふあうすと川柳社）選
「ポーズ」　大森一甲（時の川柳社）選

アトラクション　講談（予定）

◎各題2句提出・欠席投句拝辞・席題なし・会費1000円
◎出句締切11時30分　開会13時　各題秀句呈賞

主催　神戸川柳協会

後援　神戸市・神戸市教育委員会・神戸市議会　ほか

麻生路郎物語

―こども地獄―

(10)

東野大八

路郎夫妻は、その五十二年間にわたる結婚生活で、四男五女の九人の子供に恵まれている。

―子煩悩がったんがったんしてくらし　路郎

―あるときは子をだんばしでくひとめる　〃

―浴槽へずらり立ったはみなわが子　葭乃

長男ロンドン一周忌に寄す

―まぼろしであったか死んだ児の裸　葭乃

―一周忌こんな蒲団で寝ていたか　〃

九人の子供は、結婚生活の前半二十年間に集中した形である。結婚した翌年四月に長女純子、その翌年の大正四年に二女御世子（かぞえ三才で死亡）翌五年に三女御幸（かぞえ三才でこの子も死亡）と年子の出産で、大正八年に長男ロンドン（昭和二年死亡）翌年四女奈那。大正十一年次男アート。大正十四年五女リリ。昭和四年三男一歩。昭和五年四男洋（三才で死亡）と年子、年子の出産歴で続いている。以上の九人のうち二男三女を幼くして失っているが、最も愛情多いわが子の死といえば、長男ロンドンの場合であったようだ。可愛さかりの男の子であったことが、三つの子供ばかり死なせた夫婦にとっては、最も心に残るのもムリはない。

「長男にロンドンと命名して、その名を英文で区役所に届け、戸籍係りと激論したという珍話もある。彼は家庭にあって夫人と子供を叱らない。むしろなすがままの自由である。ロンドン君の発音が英語に近いとて他愛なく笑う素直な父親である」（『大正川柳』大正12年刊・安川久流美）

世に〝死ぬ子みめよし〟というコトワザがあるが、路郎夫妻にとっては、長男出生の喜びに加え、九歳まで元気に成長をみた愛児だけに一しおの愛着ぶりであったことは、両親の断片的メモや、母葭乃の追悼句にもよく示されている。

ロンドン、アート、リリといったカタカナの名を、戸籍に登録することについては、当節ならいざ知らず、大正時代としては誰しもこのことに奇異な想いを誘ったことはあきらかである。以下は葭乃書簡に示された、母としての葭乃の感慨である。

「子供の名前は、呼ぶ時の符牒のようなものです。ですから何であってもよいのです。私は万事が路郎まかせですから、よしんば嗜みの名を苦労して寄せ集めたところで、結局、路郎の好きな名に落ちつくのですから、一人できめることにした方が手数もかからなくてよいと思うのです。子供の生年月日と亡くなった日をきかれますと、私のような子沢山には生まれてきた順番さえ忘れているのですから、いずれが姉やら弟やらと、実におぼつかない記憶をたどらねばなりません。ただ、私の脳裡にハッキリ植えつけられている事は、小児科の先生を島の内の本院や、九条の分院へまで病児を抱いて居眠りながら街を歩いたことです。

ロンドンの死後などは、何を見ても思い出の種で、車に乗っていても道を歩いていてもわけもなく泣けてくるのでした。幾日も幾日も、私はだまっていました。言葉を忘れた人のように―。そんな気づまりの時、いささかでも、私の心を慰めて呉れたのは、門下の関

本雅幽という人の弔句でありました。それは

—砂手本　さぞはげむらんはげむらん

と云うのでした。

常安橋の古本屋時代には、通いの子守さんを二人雇っていました。鳴尾時代には五十恰好の所帯盛りのおばさんがお台所をきり回してくれていました。アートなどは、静岡のおばちゃんと呼んで、大層なついていました。そのおばさんが、のっぴきならぬ急用で、暫くひまを取って帰国している間の出来事なのですが、五人の子供が流感で枕を並べて寝込みました。お手伝いさんもなく、私は帯も解かず、二十日間は座ったままの看病でした。氷枕や胸の湿布の取り替え、服薬と一睡もできませんでした。西宮の主治医へ電話をかけて相談をする暇もないうちに、ロンドンの病状が悪化してきたので、鳴尾のお医者様と看護婦さんを紹介して貰い。四人の子供を二階の部屋へ隔離しましたが、ロンドンはなにかにつけて条件が悪く。とうとうジフテリアで亡くなりました。

ロンドンの葬儀のあと、間もなくリリが中耳炎が悪化して、阪大病院へ入院しました。阪大川柳会の尾崎方正先生の手術を受けたのですが、三才の子供が頭蓋骨を削り取らねばならぬ大手術でしたので、可愛そうで、私は昼夜リリのベッドの傍らで世話をしました。

ところがこんどは路郎が腸チブスで入院してきました。私はリリを鳴尾へ帰し、そのまま路郎のつきそいで入院を続けました。リリは毎日鳴尾から祖父芦村に抱かれて、耳鼻科まで処置を受けにきておりました。私は路郎の入っている別館から脱け出し、こっそりとリリと父芦村の姿をよそ目ながら眺めてはわずかに心を慰めていたことでした。

このころ路郎の友人たちは、私達一家が、一家心中をするのではないか、と案じたそうです。私の子育ての間は、一度落ちついてゆっくり食事がしたい、一度ゆっくりと眠りこけたい、こんな単純な欲望に毎日、毎日とりつかれたことでしたが、その望みはながい間、叶えられる日はなかったのでした」

筆者が、昨年生駒へ葭乃夫人を訪問した際、たまたま子供の話になったとき、この老女は、惆然とこうつぶやくのだった。

「沢山の子を抱えた若いころの私は、いま思えば〝こども地獄〟この一語につきます」

葭乃書簡は、まだ続く。

「永い人生の紆余曲折を、考えただけでも私などはぞっとします。門下の一人がいわく〝これだけ毎日寄せて貰っているのですが奥さんはいつきてもおんなじ顔ですなあ〟

私の感情はそれほど動くことはなかったのでした。私は幾度も子供を亡くしましたが、人の前では決して涙をながしませんでした。父芦村も言いました。〝女というものは、葬式が出てからも、いつまでも泣いているもんだが、その点お前は、しょいなあ〟と。

私は軍人の妻にふさわしい、情強わな人間なのでしょうか。人前も恥じずに手ばなしで泣くのが私にはどうしてもできないのです。そこまで取り乱した自分のおろかさを人に見せたくないのです。こんな非人情な根性でいる私ですから、明日はあすの風が吹く式で、景気がよくても、わるくても気持ちの上の動揺がないのです。子供達はよく私に言いました。「お母さんは無神経だ」と。然し誰の眼からも無神経だと思われる程、何事にも抵抗を感じない姿勢にはよほどの訓練が要るのです。私は永い間にその修練を経てきました。

—今日の私の心に嵐立ちそびれ　（福寿草より）

父芦村は、私の母の死後いつも母の命日には、納骨をした天王寺の一心寺へお詣りをしていました。一度も缺かしたことはないのです。家へお詣りして貰う菩提寺、つまり壇那寺がなかったからです。御世子も御幸も、お骨はすぐ一心寺へ納めましたから、戒名もなく俗名のままであったと思います」（葭乃書簡）

葭乃書簡に眼を通しているうち、筆者は、いつとはなしに与謝野晶子のイメージが、その達意のペン跡につねにたちまどっているのを強く意識した。晶子は葭乃と同じ堺市の出身である。晶子の娘で、里子に出されていた与謝野宇智子の出した「むらさきぐさ」は、世に秘められた歌人晶子の人となりを冷たく

凝視した母を語る手記である。それによると晶子は十三人の子を産んでいる。

晶子と夫の寛との生活は貧しく、その上、子供がつぎつぎと生れた。双生児や死産、数人の子は里子に出す。晶子にとっても、まさに〝子供地獄〟のあけくれであったろう。

—胎の児は　母を噛むなり影のごと　晶子
　無言の鬼の手をば振るたび
—その母の骨ことごとく砕かるる
　苛責の中に健(たけ)き子の啼く　〃
—生きてまた帰らじとするわが車
　刑場に似る病院の門　〃

晶子は明治三十四年に結婚し、翌年長男が誕生してから、大正八年六女の出生をみるまで十七年間に十三人の子を生んだが、これだけの子の保育に、女中の手をかりようとどうしようと、母親としての厳しい現実には挙もかわりはない。

晶子の生家は羊羹屋であったが、父鳳(ほう)宗七は、文人肌の読書家で、漢籍に造詣深く、俳諧に通じていた。晶子はこの父の感化をうけ、十二歳から家業を手伝いその仕事の中の唯一の楽しみは読書で、源氏物語もその齢で読破するという才気ぶりであった。

晶子が『明星』から新詩社時代の『みだれ髪』へ、そして『青踏』時代へと、その生涯を浪漫主義の色鮮やかな朱色のタテ糸で貫き通した彼女の文学思想とは、簡潔にいえばそれは「生む」という女の肉体を通して知った地を這うような身の重い生活現実からふりあおぐ空想領域。天翔ける想いそのものではなかったか。晶子の性の強さはここにある。

昨年十二月十四日付の葭乃書簡にこうある

「家族の者が病気にならない日といえば、一カ年に一カ月もあれば上々だったのです。もし私が晶子さんのように双生児でも産んでいたら、とうの昔に私という者は消えてなくなっています。晶子さんは根性の座った強い女性ですけれど、私にはそれがちっともないのです。人目からはさも暢気そうに見えてます偽善者なのでしょうか。

この世の中に生を得て悩みのない人はおそらく無いでしょう。悩むなという事は、死ねということに等しいのです。拙句

—**舞扇もてば霞も十重二十重**

という心境で暮していきたいのです。だから私は人生の暗い面は、なるべく覗かないようにしているのです。すべて悩みの素因となるものは、気前よく切り捨てて終います。いわば体裁のよい隠遁者なんです。鼻持ちのならぬ卑怯者なのです。だけどそれが私の性分なら仕方がないでしょう。路郎が私によく言いました。〝お前ぐらい人の言うことを真面目に受ける者はない。楽屋丸出しにするものはない〟と。私を一番よく知っている者は、路郎です。」

筆者は晶子の娘の書いた『むらさきぐさ』を生駒へプレゼントしたわけだが、彼女はその読後感をつぎのように寄せている。

「到着の本、夕方から夜中へかけて読み終りました。あれを読んでいますと、私も子供に何も言わないところなど、一寸晶子さんに似ているような気がします。実際に夫から言うてくれたようなことを二度くり返ささなくてもいいわけですから、私も人にしゃべらせておいて黙っている方です。家のものにいわせると、たとえ一言でも母の言葉があれば子供（里子で育てられた）が満足するというのです。血を分けた子供にそんな形式的な社交辞令が要るのでしょうか」

葭乃もまた晶子のように、二人の子供を里子に出している。四女奈那、四男洋である。

「葭乃の性格は内剛外柔である。だから誰にでも一応よい奥さんとして認識されている。従って敵というものがない。時にはキリスト教の殉教者のように、彼の女の持ち味だと思われる内剛すら教養の力で抑圧しているようである。このあらわれが「福寿草松に従いそろかしこ」になったのかも知れない。（中略）ただ牡蛎の如く黙りこくってわが道を往く彼の女は、それで充分幸福と感じているらしい。一見東洋的な諦観的なげやり的な態度にも見えるが、それは彼女の無口のせいであって、彼の女自身の創造する神様への忠実な奉仕者であることは、彼の女の句に親しく接したら氷解するであらう」（葭乃句集〝福寿草〟序文・麻生路郎）

平成十四年度 路郎賞

尼崎市

田辺鹿太

振り向けば吾が人生はつづら折
まだ若いときめく胸のある限り

肩書も所詮この世の迷子札
大空をご覧よ許す気になれる

ネクタイがゆるむ男の更年期
粋がって芯まで濡れる花の雨

雪辱を期して定年から遊ぶ
裏方に徹する妻のありがたみ

スタートの遅れた私がずっしりと重い賞を頂き感激というより恐縮の極みであります。
今後も今まで通り気張らず焦らず自分流で精進したいと思っております。
本当にありがとうございました。

川柳は良き師良き友良き伴侶

柳歴

平成　三年　尼崎小園川柳会入会
平成　五年　川柳塔社誌友
平成十一年　川柳塔賞準賞一席受賞
平成十一年　川柳塔社同人
平成十四年　尼崎尾浜川柳会会長

路郎賞準優秀作

橿原市

居谷真理子

箸だって逆手に持てば戦える
褒められてやっぱり僕は人が好き
燗徳利可愛く酔える歳は過ぎ
激安店生き血吸われている誰か
辛い夜は胎児の形して眠る
蜘蛛の糸ほどの情けはくれる天
素顔より素直になれる薄化粧
国語からまず痩せてきて斜陽国

平成十四年度　路郎賞

愛媛県

中居善信

一匹になれぬ弱さを持っている　真っ直ぐな一本道を歩いてる

役者だと言われた事のある素顔　人を恋うしとしと雨の降る夜に

湧き水があるから僕はここで住む　濾過したら僕の長所が消えちまう

覇気のない僕を丸いと言っている　たった一夜舞うた死骸が落ちている

昭和四十二年、宮尾みのりさん達と、それはそれは小さな町に小さな川柳会「つりはし川柳会」を結成した。それから三十有余年が過ぎた、柳誌も三百七十号を数える。

私は会員に「川柳は叫びである、句は平明がいい、句の中に自分が居るか」等と繰り返し繰り返しいっている。そして今回その事が認められた気がする。それが一番うれしい。

柳歴

昭和四十二年　つりはし川柳会結成
平成六年七月　川柳塔入会
平成八年八月　つりはし川柳会会長
平成　十二年　川柳塔同人

二賞選考規定（要約）

①路郎賞　川柳塔欄の入選句から8句
川柳塔賞　水煙抄欄の入選句から8句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選応募する。

②第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編。

④第二次選者
本社関係　名誉主幹・主幹・理事長　計3名
地方関係【】＝ブロック（　）選者数
【北海道・東北　関東　北陸（2）】
【京都・奈良（1）】【大阪（6）】
【兵庫（3）】【和歌山（2）】【鳥取（4）】
【島根（3）】【岡山・広島・山口（2）】
【四国・九州（2）】
計36名

平成十四年度　川柳塔賞

松江市

三島淞丘

激流に打たれた石の面構え
しつけ糸ほどかぬままに嫁に出す

野心捨て余生無色の風になる
人生は危険信号続く旅

自分史に書けぬ一夜の出会い宿
ソムリエの舌にお世辞を言うワイン

ややこしくなった三色ボールペン
意外にも冷たい掌です燃える人

川柳塔賞受賞の報を頂き唯々びっくり致しています。川柳のせの字から習い始めてやっと二年を経た私がこんなビッグな賞を頂くとは恐れ入るやら勿体無いやら正に夢見心地です。人間の感情、言動に意味を持たないものは有りません。それを今後もじっと見つめ続けたいと思っています。諸先生、諸先輩に心から感謝申し上げます。有難うございました。

柳歴

平成十二年　九月　川柳塔まつえ吟社誌友
平成十二年　十月　川柳塔まつえ吟社同人
平成十二年十二月　川柳塔社誌友

川柳塔賞準優秀作

横浜市　芦田鈴美

健康グッズどれかが効いているらしい
足枷が取れて歩幅が整わぬ
百点を運ぶルンルン　ランドセル
再検査もう病人の顔になり
高価だと知らない内は欠けもせず
完璧を求めて路地へ迷い込む
いい人にされて恋から遠くなり
お隣のバラが我が家に向いて咲き

川柳塔賞準優秀作

愛媛県　黒田茂代

ふる里の夕日も風も柔らかい
何もかも飲み込み過ぎた胃の痛み
生きている実感のない水中花
膝抱いて寒いこころを温める
思い切り泣いて心を軽くする
電線に春の音符が並び出す
掏られないようにわたしに鈴付ける
オーイ鳩そこは立ち入り禁止だよ

お祝のことば

河内天笑

二賞の選考方法が改まって四年目の今年は、締切り日を8月10日としました。8月12日は第一次選者が本社事務所に集まり選考に取り組みました。猛暑の中を竹原市から蘭幸副理事長も来て下さり、選者全員で40人余を選出、優秀な作品の中から私が20人に絞るのは大変な苦労でした。

偶然にも昨年同様路郎賞が同点で二人になり、田辺鹿太さんと中居善信さんのよろこびの顔が拝見できることになりました。

川柳塔賞の三島淞丘さんは、5月4日の川柳塔九百号記念大会事前投句天位（5月本社句会の月間賞）に続く栄冠で、重ねておめでとうございます。

こうしてみますと、路郎賞の二人も川柳塔賞も共に男性作家が獲得され、昨年、一昨年と圧倒的に女性優位でありましたが、今年は名誉挽回と申せましょう。

愛染帖賞の西山幸さん、茴香の花賞の中井アキさん、一路賞は政岡日枝子さん、そして各地柳壇賞は石堂潤子さんと、総数ではやはり女性上位は変りませんでした。

二賞選考経緯

木本朱夏

昨年に引き続き今年度も全国を九ブロックに分け、第二次選者二十五名を選出し、名誉主幹、主幹、理事長を加えて二十八名と決定しました。後に名誉主幹から選考委員辞退の申し入れがありました。

応募締切後の八月十二日、第一次選者が本社事務所に集まり、慎重に選考した二賞それぞれ数十編の中から、主幹が各賞二十編を選出。各賞二十編ずつをコピーし二次選者に郵送しました。

郵送した後で路郎賞に応募資格のない方の作品が選出されていたことが判明、失格となりご迷惑をおかけしたことを謹んでお詫び致します。

返送されてきた葉書を二十一日に整理し、規定違反がないか確認のうえ、受賞者が決定しました。残念だったことは、昨年度より応募者が少なかったこと、締切り後に届いた作品が多かったことでした。

伝統と権威ある路郎賞、川柳塔賞に応募することは、一年間の自分の作品に向き合い、見直す絶好の機会でしょう。来年はより多くの方々のご参加をお願いします。

二賞候補者在住地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
路郎賞	橿原市	鳥取市	川西市	鳥取市	大阪市	藤井寺市	枚方市	羽曳野市	尼崎市	大阪市	茨木市	寝屋川市	（失格）	大阪市	愛媛県	青森県	出雲市	堺市	和歌山市	藤井寺市
川柳塔賞	倉敷市	横浜市	鳥取県	神戸市	鳥取県	和歌山市	河内長野市	愛媛県	岡山県	柏原市	藤井寺市	箕面市	松江市	日立市	神戸市	町田市	海南市	尼崎市	川崎市	河内長野市

路郎賞得点表 （応募総数208名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内　天笑			3							1								5		2
板尾　岳人	2			1	5										3					4
清水　潮華		1			4	2			5								3			
播本　充子	2				4	1									5					3
坊農　柳弘	5							3							4	1	2			
江口　　度		3		2					5						1					4
加島　由一					2						3				5		1			
塩満　　敏				4	2				5						3					
髙杉　千歩								2	4							5			1	3
谷口　　義	1					2			4						3				5	
八十田洞庵						1			5		2	3								
長浜　澄子	2								4	5						1				3
春城武庫坊	3	4							5		1								2	
古川　奮水	5								4			1			3		2			
福井　桂香												1				2		4	3	5
松原　寿子	1														4	3	5			2
新家　完司	2			3	4										1				5	
鈴木　公弘		5		3	1				2											
鷲見　正子	3				1							5					2	4		
中原　諷人									4						2	5	1			3
西村　早苗				1						2	5				4	3				
原　　章峰	5											1			4	2	3			
松本　文子	4			2											1	3	5			
大石あすなろ	3								2	1					5					4
森井　菁居									3						4	5	1			
川崎ひかり	4						3							2					1	5
久保　正剣	2	1									5								3	4
	44	14	3	16	23	6	3	5	52	9	16	11		2	52	30	25	13	20	42
	居谷真理子	植田　一京	西内　朋月	倉益　一瑤	神夏磯典子	鴨谷瑠美子	寺川　弘一	三好・専平	田辺　鹿太	板東　倫子	藤井　正雄	森　茜	（失格）	小糸　昭子	中居　善信	西谷　大吾	竹治ちかし	志田　千代	古久保和子	高田美代子

川柳塔賞得点表 （応募総数123名）

1位＝5点　2位＝4点　3位＝3点　4位＝2点　5位＝1点（表の数字は得点）

選者＼作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
河内　天笑		5		4								2				1				3
板尾　岳人							3	2			1		4							5
清水　潮華		2						4	5		1		3							
播本　充子											3		2	1	4					5
坊農　柳弘				2					5			4	1					3		
江口　　度									1			3	4						2	5
加島　由一		2			1				4							5				3
塩満　　敏												4		2	3				1	5
髙杉　千歩						3		5	2									4		1
谷口　　義			3					1					5					2		4
八十田洞庵						3	2	4			5		1							
長浜　澄子		2			5		3							1		4				
春城武庫坊		2			4	5				3	1									
古川　奮水			2		3			1	4				5							
福井　桂香		3						5				4	2					1		
松原　寿子					1	3							5		2		4			
新家　完司		1					5					2					4			3
鈴木　公弘		5			4							3				1		2		
鷲見　正子								2	4		5			1		3				
中原　諷人				1			5	3		4								2		
西村　早苗		5		4			3	2					1							
原　　章峰	3	4									5					1	2			
松本　文子		3			2		4	5					1							
大石あすなろ		5									2					3		4		1
森井　菁居						5		2	3		4							1		
川崎ひかり						4		3				2	5	1						
久保　正剣									4				1		5	2			3	
	3	㊴	5	11	20	23	25	㊴	32	7	27	24	㊵	6	14	20	10	19	6	35
	撰喜子	芦田鈴美	西沖彰雄	田中章子	鳥羽玲子	松尾和香	村上直樹	黒田茂代	国米きくゑ	永浜加津子	若松雅枝	寺井柳童	三島淞丘	加藤権悟	伊勢田毅	土田今日子	堂上泰子	山田耕治	中村泰竜	大西文次

平成十四年度　愛染帖賞

受賞作品

和歌山市　西山　幸

ひとり芝居にまだ喝采がもらえない
ちぎり絵のちぎれたままの誤解かな
人差指はみんな疑い深そうだ
春夏秋冬待ち呆けには馴れている
生かされる日の眉墨を淡く引く

評　幸さんの作品は長い間培われて来た基礎の上に表現されてゆく人間陶冶で、決して表面に出ようとしない、目立たない場所にいながらしっかりと裏を支えてくれる安堵感が句の中に見えてくる。様々な葛藤にもまれて来た幸さんの句は幸さんの人生以外の何物でもない。「春夏秋冬待ち呆けには馴れている」と発表句の中にあるが、蓄積された沢山の川柳が愛染帖の中で立派に成長し続けている事に敬意を表したい。

準賞の高瀬霜石さん、「いないないばあでみまかりたいものだ」兎角言葉遊びの多い最近の川柳界で川柳とはかくの如し、と頑張っている心意気を買いたい。同じく準賞の池森子さん。川柳の詩を追い続ける感性は見事だ。特に「そして冬いのちの水を探さねば」冬の孤独さを表現してあまりある。やまぐち珠美さんの句も将来が楽しみだ。良い師を見つける事が上達の道だと知って欲しい。（波多野五楽庵）

準賞作品

弘前市　高瀬霜石

わが街もわたしも道路工事中
湯豆腐と一緒に今日も暮を引く
いないないばあでみまかりたいものだ
折れた矢で足の踏み場もない書斎
天寿全う父の達磨に目を入れる

富田林市　池森子

やさしさに熟れるしかない木守柿
そして冬いのちの水を探さねば
亡母が来て止まった春の長ばなし

東京都　やまぐち珠美

雨を行く女は大きな蝸牛
雨へ行く男は小さい蝸牛

西山　幸

長い中断と、くり返す入院生活で失意の日々が続いていましたが、毎月の投句が支えでございました。

受賞のお知らせを頂き、まだこんな嬉しいこともあったのか、と喜びを噛みしめ、心から御礼申し上げます。

今日からは、地に足をつけてもう一度ゆっくり出直す存念です。本当にありがとうございました。

柳歴

昭和五十二年　川柳塔賞受賞
昭和五十八年　路郎賞受賞
昭和六十二年　茴香の花賞受賞
平成五年　濤明賞受賞

平成十四年度　茴香の花賞

受賞作品

富田林市　中井アキ

晩学にまだまだ涸れぬ海がある
流れ星待ちくたびれたんだろうか
すこし弾んでひとりピカソの絵と遊ぶ
まだ冬を引き摺っているくすり指
不器用な田舎の風にほっとする

評　中井アキさんからこの句が生れたのは、日頃からの川柳に向かう姿勢ではないでしょうか。何歳でもおそくはない「晩学」には底深い無限があります。足元に火がきては遅いし、瑞々しい細胞の今が潮どきとアキさんは見抜いています。準受賞者、岩崎みさ江さん、高田美代子さん、居谷真理子さん、政岡日枝子さん、それぞれの個性に花を添えていただきました。本当に素晴らしい茴香の花が大輪として咲きました。特に居谷真理子さんは後半からの勢いで群を抜きました。二句とも命がけの句です。有難うございました。

（宮西　弥生）

準賞作品

鳥取県　岩崎みさ江

しあわせでした錯覚と気付くまで
まだ余裕あるから泣けていた昔
風下が大好き耳が遠いから
花手桶やがては無縁墓となる
生きる気でいるから欲が捨てられぬ

藤井寺市　高田美代子

背筋伸すとまだまだいけるなと思う
沈黙を守る賢い口である

橿原市　居谷真理子

殺し合う命を母は産んでない
もう死んでと言うまで生きていて母さん

米子市　政岡日枝子

落ちつけぬいちにち象に逢って来る
悔しさに反応している生きている

中井アキ

川柳に興味を抱き、仲間にして頂いてから八年、憧れの茴香の花入賞のお知らせに、夢かと驚いております。嬉しくて舞い上がってます。これからの長い坂を、この賞を励みに、精進してゆきたいと存じます。

育てて頂いた諸先生、柳友の方々に厚く御礼申し上げます。有り難うございました。

柳歴

平成　六年八月　富柳会　入会
平成　七年十月　川柳塔社誌友
平成十二年八月　川柳塔社同人

平成十四年度　一　路　賞

受賞作品

米子市　政岡　日枝子

鏡からはらはら満ちてくる哀よ

評　良くも悪くもだんだんと母に似てきた私が鏡の中にある。少し若い頃の母が私と同じ顔をして見詰めていて女の一生がある哀を抱く時の女は美しいし可愛い。

準賞の扶美代さんの句、若さと前向きがとっても嬉しい。玉恵さんの句、中心にいる重圧をどんと受け止める。

（高田美代子）

時に味方そして敵でもある鏡、年を重ねて行く女の哀を感性で素晴らしい句にされました。作者は「薔薇の花」の選者を担当されますので来年度からは賞の対象外になられます。準賞の扶美代さんの句、人間好奇心あってこそ若々しく生きてゆけます。玉恵さんの句、擬人法でうまく表現されました。

（西口いわゑ）

準賞作品

藤井寺市　太田　扶美代

好奇心二つの眼閉じるまで

岡山県　山本　玉恵

まん中の石が乱れを食い止める

候補作品

鳥取県　西沖　彰雄

愚痴るまい自分の足で来た道だ

札幌市　三浦　強一

太陽が真っ赤平和なクレヨン画

東京都　播本　充子

一回り大きくなって返り咲く

出雲市　竹治　ちかし

ちょっとしたことかも知れぬ青い空

政岡　日枝子

この度は全く思いがけない賞を頂き、心から喜んでおります。自由吟にせよ、課題吟にせよ、身を削るような思いで作っておりますが、この句によって認められたようで、嬉しく思います。

皆々様のおかげで頂いた大切な賞です。有難うございました。

柳　歴

昭和五十年頃より川柳を始める
昭和五十六年　川柳塔社同人
平成五年　国民文化祭いわて　文部大臣奨励賞受賞
平成九年度　路郎賞受賞
川柳塔きゃらぼく会員

平成十四年度　各地柳壇賞

受賞作品

河内長野市　石堂潤子

喝采を浴びて未来が狂い出す

評　人生至るところに落とし穴はあるものだ、いつまでも喝采に酔っているわけにはいかない。しっかりと軌道を修正して、自分の道を踏み外さないようにしなければ。

準賞および候補作品もそれぞれに奥の深さを感じさせる素晴らしい作品でした。（川上　大輪）

受賞句、準賞句から、共に人間の弱さが感じられます。有頂天になると周りが見えなくなり勝ち。足元をしっかり見つめないと自分を見失ってしまいます。

候補作品いずれも人間をよく観察し、こころを巧みに表現されていると思います。（山本希久子）

準賞作品

鳥取県　山内芳江

親の血を引いているのをつい忘れ

候補作品

逞しくなって峠を後にする　土橋　睦子

とび込んでしまった泳がねばならぬ　古川喜美子

恍惚の海に溺れたシルエット　一戸　ツネ

俺だって猫が帰りを待っている　木村あきら

石堂　潤子

ふとした切っ掛けから川柳に手を染め、試行錯誤の日々でございます。

この度、身に余る賞を戴ける事になり、夢のような心地でございます。

何と感謝申し上げて良いやら、言葉もございません。

お世話になりました諸先生始め、教室の皆々様、本当に有りがとうございました。

柳歴

平成十一年　川柳を始める

同年　長柳会入会

平成十四年　NHK九州川柳大会　特選入賞

愛染帖

波多野五楽庵選

旅の終りの掌にあるレモンの黄　和歌山県　木本　朱夏

ヒロシマ　ナガサキ　千の息吐く紙の鶴

あと一枚皿が足りないまま夜明け　富田林市　池　森子

一匹とひとり　影なり光なり

枯れた字で男一人の絵葉書よ　和歌山市　西山　幸

腐葉土に花は疑い深くなる

秋が来てまた蓄えてゆく失意　和歌山市　福井　桂香

あの日から行方不明のガラス鉢

燃えながら紅ほおずきは淋しがり　東京都　やまぐち珠美

何本目がわたし　あなたを織る糸の

罫線をとれば自由が重くなる　札幌市　三浦　強一

終電車折る形でみな無口

女人礼賛その原点に母がいる　鳥取県　岩崎みさ江

そして朝　月下美人の花むくろ

透明なガラスのような物忘れ　海南市　三宅　保州

足向けて寝られぬ人と無沙汰なり

仲良きことは美しき哉蝶二匹　尼崎市　春城武庫坊

夢を追う下駄が闇夜を突っ走る

昭和の風送る我が家の扇風機　尼崎市　春城　年代

教えて下さいホントにあの世ありますか

純粋に神を捜しているのです　藤井寺市　高田美代子

おくんちもねぶたも済んで稲を刈る

ふと殺意　執念深いのもおんな　吹田市　山本希久子

どなたにも見せぬ私の深い湖　高知県　桑名　孝雄

五線譜に閉じ込められた僕の鬱　米子市　鷲見　正子

踏み切りの鐘がわたしを唆かす　米子市　青戸　田鶴

あの森のカラスはなにを企んだ　羽曳野市　吉川　寿美

ボタン一つで事たる街の失語症　愛媛県　中居　善信

敗北のなかで晒している五体　鳥取県　鈴木　公弘

餌さがす鬼を背中に負うている

点滴の海で心は凪いでいる　鳥取県　上田　俊路

深呼吸三度してから歩き出す　弘前市　高瀬　霜石

過ぎ去った日々を反芻する日向　弘前市　高橋　岳水

行き先を忘れぬように目を瞑る　弘前市　宮崎ヒサ子

鬼灯がきゅきゅっと泣いて夏の鬱　大和高田市　鍛原　千里

予想した通りになった第二幕　東京都　後藤　早智

不本意な別れに今もなお微熱　西宮市　門谷たず子

胸試ししたくて高い木に登る　和歌山市　武本　碧

掴まれたハート掴んだのは魔性　四条畷市　吉岡　修

すり減った指紋で辞書が捲れない　和歌山市　古久保和子

癪にさわるからシュレッダーには掛けぬ　和歌山市　福本　英子

社交性に欠けているのは薬指　美祢市　安平次弘道

一期一会の情けをそっとふところに　岡山県　山本　玉恵

望郷ソーラン不漁つづきの海がある　砂川市　大橋　政良

秋は気まぐれ　空でゴッホの耳が舞う　米子市　林　瑞枝

名に番号すでに囚われ人になる　西宮市　牧渕富喜子

夏の陽の無口　説得力がある　和歌山市　楠見　章子

行く先がまだ決まらない若い鮎　弘前市　斉藤　劦

浦島の五郎ぐらいは許されよ　弘前市　蒔苗　果林

身勝手なひとりぐらしが怖くなり　尼崎市　内田美也子

平均の上か下かで生きている　神戸市　田中　章子

リストラで今朝から海図無い進路　和泉市　横山　捷也

君というナビゲーターがいる安堵　尼崎市　長浜　澄子

蓼を食う虫はやっぱりいたんだね　八尾市　村上ミツ子

悠々自適　老獪の背まださらし　和泉市　西岡　洛酔

半分は運だと人生悟る歳　高槻市　乙倉　武史

勿体ない腕といわれて職がない　弘前市　福士　慕情

泣くことを忘れていました古河童　弘前市　一戸　ツネ

義理堅い男で仮面外せない　黒石市　相馬　一花

過去形は本音もどきの腹話術　弘前市　相馬　銀波

逃げ口上考えている秋桜　八尾市　髙杉　千歩

正常に老いております物忘れ　香芝市　大内　朝子

許す気になって白髪が増えてくる　八尾市　生嶋ますみ

女故おんなの恥が許せない　鳥取県　石谷美恵子

矢印がなくても道はわかります　大阪市　前　たもつ

踏まれても踏まれてもまだ花をつけ　倉吉市　淡路ゆり子

したたかに生きるしかないバラの刺　枚方市　海老池　洋

不満ばかり言うてこころが晴れますか　東大阪市　北村　賢子

六畳一間その幸せの中に居る　倉敷市　小野　克枝

建前も本音も容赦せぬ鏡　大阪市　町田　達子

白絣　父のうしろに母がいて　和泉市　中川　楓

損得がないから拍手ばかりする　和歌山市　吉村さち子

念仏と思えるような蝉しぐれ　鳥取市　夏目　一粋

勘違いしていた霧も晴れました　鳥取県　西原　艶子

未練だと簡単に言う他人事　堺　市　山本　半銭

指切りをした手この頃痺れだし　米子市　小塩智加恵

吃水線あたりさ迷う思慕の海　富田林市　中井　アキ

一枚の鱗流しについたまま　松江市　松浦登志子

面白い蝿で転落ばかりする　鳥取市　大坪　天涯

ビールには魔女がひそんでいるらしい　西宮市　西口いわゑ

夕焼けが連れて行ったに違いない　藤井寺市　太田扶美代

俺も寄付したのを知らぬ寺の鳩　松原市　小池しげお

秋風があなた好きよと吹き抜ける　池田市　栗田　久子

台風をUターンさせたのは案山子　鳥取県　土橋はるお

ここだけの秘密へ肩を寄せてくる　今治市　渡邊伊津志

動議出す前兆腰が落ち着かぬ　鳥取市　武田　帆雀

幸せを探りあぐねた欲でした　弘前市　岡本　花匠

切り札を持ってるなんてきざっぽい　八尾市　吉村　一風

時どきはヒロインになる泣き上戸　和歌山市　上地登美代

スーパーの主婦も魚の眼も疲れ　吹田市　早川　棲世

寝屋川市　江口　度
さて顔を見ると文句が出て来ない

大阪市　板東　倫子
残酷なニュースに馴れて行くこわさ

堺　市　和田つづや
自己主張好きで流れる星になる

唐津市　仁部　四郎
あの時と妻が言い出す銀婚日

唐津市　岩崎　實
あるがまま少し言い分あるけれど

唐津市　久保　正剣
契約の証書の隅の小さい文字

鳥取県　西沖　彰雄
七十を過ぎてもころり騙される

寝屋川市　平松かすみ
無口だが齧れる脛が魅力です

東京都　播本　充子
亡母の家引導渡すのは誰だ

和歌山県　森下　順子
有終を飾る舞台がせり上がる

藤井寺市　中島　志洋
逃げ道をそっと開けとく年の功

今治市　塩路よしみ
政局はどうあれ今日も米を研ぐ

熊本県　高野　宵草
夜のしじま鼓動が聞ける生きている

米子市　木村富美子
夕立を客の顔してやり過ごす

和歌山市　青枝　鉄治
山売ってからの故郷は遠くなり

富田林市　大橋　鐘造
一人旅矢印などは気にしない

横浜市　田中　笑子
苦労など過ぎてしまえば点にみえ

倉吉市　米田　幸子
愚妻だが何があっても動じない

川崎市　浦野　昭志
人形に本音を言わす腹話術

堺　市　渡辺さだを
荒模様ゴッホの呻きわが呻き

横浜市　金森　徳三
満月がゆがんで見える熱帯夜

和歌山市　松原　寿子
ささやかな領土だろうかマイホーム

大阪府　澤田　和重
妥協するたびに狡さも身につける

米子市　光井　玲子
振り出しに戻り一から学びます

唐津市　田口　虹汀
横死者の霊を弔う川施餓鬼

唐津市　井上　勝視
つぎはぎに生きて写経に辿りつく

唐津市　樋口　輝夫
惚けぐあい探り合ってる長電話

唐津市　山口　高明
夫婦して食べる大蒜気にならず

鳥取市　岸本　孝子
新盆の仏に席を空けておく

宇部市　平田　実男
寝たきりへ長寿万歳とは言えぬ

香川県　川崎ひかり
歩にだって言い分はある負け将棋

日立市　加藤　権悟
子のために杭はしっかり打っておく

倉吉市　牧野　芳光
幸福は対角線にいつも居る

鳥取市　岸本　宏章
年寄を使う賢い嫁といる

横浜市　山梨　雅子
ペイオフが老いの暮らしを慌てさせ

滋賀県　中　宗明
ビアガーデン帰宅途中の愚痴る場所

八尾市　宮崎シマ子
そっとしとこう今口出せば火に油

八尾市　井尻　民
うたかたの此の世重ねたイヤリング

豊中市　樫谷　郁子
八十路坂ずしんと背負う私小説

倉吉市　松本よしえ
子の敷いたレールに親が乗せられる

三田市　北野　哲男
俺の子や　息子も嫁に敷かれとる

大阪狭山市　羽田野洋介
チチンプイぐらいじゃ効かぬ今の孫

大和郡山市　坊農　柳弘
追伸に津軽訛りの母の愚痴

尼崎市　田辺　鹿太
臨機応変　妻の手腕に期待する

奈良市　渡辺　富子
戯れに来し方綴る雨の午後

エッセー

家庭教師物語

酒井一壺

靴下の穴

それは六十年以上の昔私が二十五歳頃の事、友人の依頼で堺の社長の小五の息子の家庭教師を始めました。一日目、夕方五時半過ぎお宅に着きました。少し緊張していましたら奥さんが「先生、とりあえずお風呂に入って下さい」とおっしゃいましたので、早速風呂場の脱衣籠に、すべてを無造作に脱ぎ入れて入浴をさせて戴き、いい気持で風呂から上がって来ました。

すると、服は勿論のこと下着から靴下まで、すべてきちんとたたんで籠に入っているのです。風呂に入っている間にお手伝いさんがたたんで下さったのでした。驚いたのは一番上に置いてある私の靴下に大きな穴があいていたのです。

今の人はわからないと思いますが、当時は靴下が弱くてすぐ破れたのです。私の大失態です。最初の日なんという事をしたのかと恥ずかしさでいやな気分を味わいました。

それ以来、毎日のように靴下の新しいかわりをカバンに入れて持ち歩くようになりました。靴下だけでなく表から見えない下着などにも注意するようになり、大変教えられた苦い貴重な経験です。

財布のお札

一年ほど過ぎた頃奥さんからお聞きしたお話です。「私の家ではいつも三人のお手伝いさんがいますが、これまで大体十年ぐらい勤めてもらい、最後は嫁入道具を一通り揃え結婚させています」とのこと。

勿論初めは先輩の仕事を見習い、掃除から始まり台所の仕事など、生活全般及びお客の応対まで躾のすべてをすませます。最後にご主人の身の回りのお世話をしてもらい、きっちり出来れば仕上げと言う事だそうです。

しばらくして、私の所へお茶を持って来ていた一番先輩と思うお手伝いさんが急に居なくなりました。「結婚されたのですか」と聞きましたら、奥さんは淋しそうな顔で、「実は本人の両親にもすまなかったのですが、辞めてもらったのです。かわいそうな娘さんでした。」と経緯をお話し下さいました。

ご主人の身の回りを世話させている内に、服のポケットの財布の中味が時々減っているのがわかったのでした。そこで、せっかく長く勤めてもらったが、思い切って辞めてもらうことにした、とおっしゃいました。「九仞の功を一簣にかく」の例を思い出し、なんとも言えない淋しい気持になりました。

その娘さんはどんな人生を歩んだでしょうか。教えるより教えられる事の多い若い家庭教師でした。

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切は二時半。会場はいずれもアウィーナ大阪です。

平成十四年（二〇〇二年）
十一月二日（土）三階　信貴
十二月六日（金）四階　金剛

平成十五年（二〇〇三年）
一月七日（火）四階　金剛
二月七日（金）四階　金剛
三月六日（木）四階　金剛

誹風柳多留二四篇研究 46

伊吹和男・大野秀二
小栗清吾・橋本秀信
粕谷長生・山田昭夫
清　博美・佐藤要人

344　**乱れ矢の中ヵを白歯があっちこち**

伊吹　矢場風景の句。「白歯」は未婚の女性のこと。矢取娘が、乱れ矢が飛び交う中で、あっちへ行ったりこっちへ来たりして、外れ矢を拾っている図。男達が射る矢にからかわれて、実際に白い歯を見せて笑っているのかもしれない。歯を羽に掛ける。

ミだれ矢の中へ娘ハわつて入り　安九天2
烏歯もしら歯も見へる矢場女　一〇四7

小栗　賛。「白羽の矢」をきかせるか。
橋本　同。客はその矢場女を目当てに通う。
清　同。現代でも温泉場やお祭りなどで行われる射的と同じ寸法。
佐藤　賛。

345　**なかぬやつめハしやば中に借りだらけ**

伊吹　「泣かぬ奴」は泣き言をいわぬ奴。「てやんでえ、ベラボウメ、毎日々々なきごとばかり並べ立ててる奴ァ、江戸ッ子の風上にも置けねえや」と威勢のいい強がりばかり言っている奴に限って、世間中借金まみれになっている。

義のつよいやつにかきつて銭がなし　一六24
男気なやつだか根から銭か無イ　明五智5

清・佐藤　賛。

346　**腕おしの地どりのよふな疊さし**

伊吹　「腕おし」は腕相撲で、「地どり」は相撲の稽古。畳刺の仕事場での実景の句。畳刺は畳床に畳表やへりを太い針や糸で縫い付けるのを仕事としているが、その仕事をしている様が、まるで腕相撲の練習をしているようだというのである。

腕押に素人めかぬ疊さし　一五六16

橋本　賛。腕（押し）＝相撲という言葉が共通理解にあって、「地取り」という相撲の縁語を持ってきた。
清・佐藤　賛。

347　**俄か雨箸も持タない乞食なり**

伊吹　にわか雨にあって、糸立を頭からすっぽりかぶる。その姿で椀や箸を持てば乞食であるが、雨を避けるだけであるので、箸も持たない乞食ということになる。

俄雨乞食の相をはたすなり　一一1

小栗　賛。「箸も持たぬ乞食」（全くの無一物であることのたとえ）の援用。
清・佐藤　賛。

348　**妻戸見て残たざくろ喰人なし**

伊吹　「折境本尊の御前に柘榴を備置たるを追取、忽噛砕、妻戸に活と吐掛たまへば、柘

榴忽火焔と成て三尺ばかり燃上が。」『前々太平記』巻二十一、「ワキをりふし本尊の御前に。柘榴を手向け置きたるを。地おつ取つて噛み碎き。〳〵。妻戸にくわつと。吐きかけ給へば柘榴忽ち火焔となつて扉にばつとぞ燃え上る。」謡曲『雷電』などによる句。管丞相が柘榴を吐きかけた妻戸を見れば、本尊の前に残っている柘榴を喰う人は、恐らく居ないであろうという想像句。

こげた戸の側にざくろがころけてる　三四21

清・佐藤　賛。

349　**まんそくに産ムと親子てをどるなり**

伊吹　古川柳の約束から言えば、身篭った踊子は薬研堀などで堕胎するのが普通である。しかし、子をおろさずに、満足に産んで育てて、その子が女の子であれば、親と同じ踊子にして、親子で踊るだろうというのが主題句である。

母もよろしくとおとり子座になおり　一八3

あねさんとい、やとげい者子をそだて　六12

清・佐藤　賛。

350　**たゞの名の女しんぞうこわいなり**

伊吹　遊里で働く女性の殆どが、本名以外の源氏名で仕事をしている。ただの名、すなわち普通の本名で仕事をしているのは遣り手。新造が恐がる筈である。

さいけんの中にしやばの名壱人リ有　案九義4

細見のすみを新造引ッつめり　四六18

清・佐藤　賛。

351　**内に寐た夜を女房にかぞへられ**

伊吹　「来る日も〳〵毎晩悪所泊りで、このひと月、家で寝た日はいったい幾日か知ってかえ？おまえさん！」。この男が家で寝たのは、恐らく半月以下なのであろう。

夜着二ッやけをおこして女房着る　一〇20

山田　賛。しかし、お大尽ならともかく、そんな金どこにあるのでしょうネ。不思議でしょうがない。

清　そこが趣向。

佐藤　賛。

352　**駿河町食を三石壱斗たき**

大野　駿河町は、越後屋呉服店の異称。ほとんどこの一町を独占していたからである。（『川柳大辞典』）

三石一斗は、駿河町からは富士山が見えるので、三国一が掛けてあろう。『川柳江戸砂子』によると、寛政三年七月の書上として、番頭七人、帳面掛百六十三人、廻り手代二百人、増人二十三人、飯米方四人、小遣二十五人、見世手代三百七十一人、締めて七百九十二人とある。一日に一人三合とすると千三十三人分の飯ということになる。そうすると一日に三石一斗の飯もある程度根拠のある値となる。

句は、駿河町一町を占める越後屋には従業員も多く、それだけ食料も多く必要になる。一日に三石一斗も飯を炊く。日本一の越後屋であるから三国一の意味もあろう、というのである。

江戸のするがにも日本一があり　一六33

駿河町畳みの上の人通り　初16

小栗　賛。三国一がいいたいのみ。

清　同。三国一がいいたいだけで、飯の実数は全く関係がない。

佐藤　同。

女性コーナー

尚香の杜

政岡日枝子選

聞き分けた耳のうしろの幾山河　富田林市　池　森子

不透明な現実がある海の彩　吹田市　山本希久子

この部屋でうっかり忘れている戸籍　鳥取市　徳田ひろこ

歩道橋渡れば遠い向かい側　富田林市　片岡智恵子

螺旋階段から夕日落ちてくる　大和高田市　鍛原　千里

影法師を捲くのは次の角辺り　藤井寺市　高田美代子

赤トンボ浮いて時間が静止する　米子市　鷲見　正子

朝顔は真夏を登り詰めたやら　和歌山市　古久保和子

そむいたり愛しんだりの仮の宿　米子市　青戸　田鶴

いまここで言いそびれると判定負け　米子市　白根　ふみ

生きるものの歩いた跡が道となる　鳥取県　岩崎みさ江

腐葉土を作って花を笑わせる　米子市　野坂　なみ

気付かれぬように畳んでいるこころ　西宮市　牧渕富喜子

橋を渡って掴んだきずな蒼くなる　和歌山市　松原　寿子

プライドの塊抱いて肩が凝る　香芝市　大内　朝子

かすかなる尾灯は消えて愛終る　今治市　塩路よしみ

溺れたいマリンブルーの瞳の中で　和歌山市　福井　桂香

保護色がだんだん薄くなってゆく　寝屋川市　籠島　恵子

余命チクタク今日を楽しむ無駄遣い　寝屋川市　太田とし子

一万歩あるき満足して眠る　愛媛県　花岡　順子

母鬼が少し耄碌して昼寝　寝屋川市　岸野あやめ

再婚を覗き幽霊もえている　八尾市　宮崎シマ子

絵手紙がドキッとするよなことを言う　横浜市　近藤　道子

水に流すと心の杭に絡みつく　和歌山市　桜井　千秀

時どきは傾く船に甘んじる　倉敷市　小野　克枝

ジーンズの文体が好き真似てみる　東京都　播本　充子

騙されるたびにきれいになる鏡　松江市　川本　畔

四面楚歌ではないんだとちぎれ雲　堺　市　志田　千代

窓際の椅子にゆっくり陽がかげる　三田市　久保田千代

ゆびきりの痛みが残る風の駅　八尾市　高杉　千歩

この辺でビールにしよう座が軋む　西宮市　西口いわゑ

一つだけだいじなロマン胸に積む　鳥取県　石谷美恵子

意に添わぬ方へは延びぬ豆の蔓　香川県　川崎ひかり

目と目で合図する男性がいて楽し　西宮市　門谷たず子

輝いた青春にある輪唱歌　米子市　木村富美子

遠い人ばかりを思う熱帯夜　鳥取県　西原　艶子

決心がぐらつく歳になって来た　大阪市　神夏磯典子

人間て欠けているから伸びるんや　八尾市　村上ミツ子

充電しに張り切って行く甘党屋　大阪市　鈴木トヨ子

肩書が少しはずんで出す包み　八尾市　井尻　民

むくげ咲く今日の命を高らかに　大阪府　小栢こずえ

旅支度しっかり出来た夏椿　米子市　木村　春枝

ラップされおんば日傘で嫁きおくれ　倉吉市　野口　節子

ルビー婚息ほどほどに合うてくる　羽曳野市　徳山みつこ

脇役に徹し戸惑う事がない　藤井寺市　太田扶美代
いい姑を演じて肩が凝ってきた　鳥取市　岸本　孝子
持ち歩く見果てぬ夢を入れた箱　和歌山県　森下　順子
匿名にして足跡を消しておく　出雲市　園山多賀子
独り言　残して鍵を確かめる　米子市　小塩智加恵
父さんが滅多に見せぬ裏の顔　倉吉市　米田　幸子
居直って八十代を華とする　尼崎市　春城　年代
神様も老いて順序を間違える　和歌山市　西山　幸
遅々として進まぬ思案爪を切る　尼崎市　長浜　澄子
何の責めだろうか背骨軋む音　岡山県　山本　玉恵
言い分はたんと持ってる冬いちご　羽曳野市　吉川　寿美
星いくつ数えたことか野の仏　藤井寺市　鴨谷瑠美子
卒寿坂歩いて登る運のよさ　寝屋川市　平松かすみ
来年も生きる積りの梅らっきょ　岡山県　矢内寿恵子
旅はまだ半ば亡夫には追いつけぬ　和歌山市　福本　英子
刑よりも長い異国の四十年　アルゼンチン　松井美稚子
水音がやさしくなって仲直り　和歌山市　武本　碧
飾らない友の輪の中寝転べる　東大阪市　田中美弥子
茶柱のせいか楽しい日を過ごす　弘前市　宮崎ヒサ子
殺風景な心潤うサルスベリ　海南市　堂上　泰子
こころ磨けば渋い光を放つだろう　大阪市　町田　達子
締め切りへ冷ややかな気が横に居る　松江市　安食　友子
啄木の子蟹が足を這う渚　米子市　林　瑞枝
娑婆の声ゆっくり聴いて米を研ぐ　弘前市　一戸　ツネ
負けそうな予感　鉛筆尖らせる　鳥取市　福田　登美

シロップをこっそり母の超元気　大阪市　津守　柳伸
三歳の疑問　正しいことを教えとく　鳥取県　さえきやえ
絵手紙を書いて涼しさ届けよう　豊中市　樫谷　郁子
ふる里の味覚山盛り道の駅　倉吉市　松本よしえ
今の世にも居そう因幡の白兎　大阪府　米澤　俶子
やさしい言葉羽毛ふとんを着たような　大阪市　本間満津子
アッチムイテホイの心で一つ屋根　東大阪市　北村　賢子
新札に金で苦労の顔がのる　橿原市　居谷真理子
心配の種を流した星祭り　鳥取市　録沢　風花
もう着ない視線からんだブラウスだ　鳥取県　吉田孔美子
平常心　平常心と気負わされ　横浜市　芦田　鈴美
わたくしのもしもへ笑顔撮っておく　寝屋川市　森　茜
似合う人似合わない人みなロング　横浜市　山梨　雅子
故郷もさま変わりする近代化　羽曳野市　濱口　フジ
お互いに痛い所は庇い合い　鳥取県　西川　和子
翔ぶつもり賞味期限の切れるまで　横浜市　秋元　和可

森子さんの句―自分には見えない耳のうしろの幾山河に惹かれました。情に流されるでもなく、意地を通すでもなく、自分を殺してまで聞き分けた耳に胸が熱くなりました。皆が持っている物語を鋭く表現されています。並みの事ではありません。**希久子さんの句**―理解つかないまま この不透明に捕まりました。無限大にある不透明の中で、自分の居場所を、自分の椅子をしっかり探す事だと教えられた思いです。**ひろこさんの句**―リラックスした時の脈拍は「G線上のアリア」と同じリズムだそうです。主婦である事、妻であること等々を忘れさせてくれる素晴らしい部屋。いいですねぇ。しかし一歩出れば、また戦場が待ってますよ。**智恵子さんの句**―全くこの句の通りです。歩道橋は特におとしよりには優しいものではありません。でも向こう側には行きたい。行かねば、嬉しい風にも、優しい風にも逢えませんもの。

家

市丸　晴翠選

家を捨て語学留学してみたい　大　鯰
家族です親を見る子も見ない子も　慕　情
幻の家に逃げ込む母の乱　ツ　ネ
駅一つ梅干し取りに行く実家　正　雄
家を継ぐ長男として躾けられ　武　史
遺産分け淋し家族の輪が乱れ　鐘　造
女にはとても勝てない家事育児　勝　視
格式の家にこだわる床飾り　タ　ミ
翔ぶ母の尻尾つかんでいる家族　めぐみ
マンションに家訓の似合う部屋がない　勝　巳
ホームレス位牌一つを手放さず　隆　盛
もう家に入れぬと昔なら言えた　四　郎
家長だから頑張っている痩せ蛙　富　子
家出には少し足りない貯金箱　邦　昭
玄関に円満という花を活け　檳榔樹
積善の家に絶えまじ華と香　虹　汀
なつかしい家を沈めたダムに月　(奥)五　月
実印を押したら家が傾いた　保　州
床柱無くしたパパの下がり眉　俊　子
翔んで翔んで結局家に舞い戻る　善　信
柿のれん田の字の家のにぎやかさ　美津子
新築の家でマスクをする不覚　一　花

喪の家の悲しい事情洩れてくる　ヒサ子
山頭火の家が掴めぬ納税書　正　剣
銭湯の女湯見えた僕の家　章　久
酸素まで足らない家の老い二人　一　粋
家の補修　余命がやめよと言っている　兵八郎
過疎の里農家に鶏の始業ベル　(稲)洋
家出の娘　銀座のママで生きている　(樋)輝　夫
リフォームの家に構える古位牌　とし子
三対二タバコ吸えない家が建つ　栄　子
一代で家風を替える若夫婦　水　笑
由緒ある家を泣かせる相続税　東　吉
山一つ削って並ぶうさぎ小屋　安　子
屋根裏でタイムスリップする実家　修
増築に待ったが効かぬ声変わり　泰　竜
茅葺きの家で醗酵する民話　劦
佳
水からも火からも守って来た家族　活　恵
家売って楢山へ行く話など　昌　枝
保母さんがボタンをつける父子家庭　あずま
家庭不和すかさず伸びる非行の芽　岳　水
まったけがいつも素通りする我が家　度
人
病院で死し葬祭場でおくる　千　代
地
譲れない位置に本家の鬼瓦　権　悟
天
皮膚呼吸している家もにんげんも　高瀬霜石
軸
家業継ぐ孫に手強い祖父の腕

積む

神原まさと選

反省の材料ばかり積み重ね　一　風
生き下手で積んだ苦労に悔いはない　一　壺
何もかも積んで幸せ号発車　典　子
仏典も聖書も積んでいる迷路　岳　水
妥協案積み上げ妻と仲直り　富　子
積み立てた老後資金が目減りする　義　男
積善にようしゃなく吹く不況風　綏　子
参考書積んでマンガを隠した日　今日子
積善の家に舞い込むつばくらめ　(樋)輝　夫
低金利鹿も積もればなんて夢　セツ子
積んである本が読めない眼の老化　シマ子
こつこつと小さな夢を積み上げる　ますみ
年金を積み立て奨学金にする　螢
労使とも面子のコイン一つ積む　修
豊作で売れない米をどんと積み　可　住
本五冊積んだらすぐに眠れます　千　代
積み残しされた気分で生きている　朝　子
積み上げて読めない本を眺めてる　ミツ子
初回から積立金をもうあてに　りつえ
妻の掌を借りていびつな積木つむ　度
義理というお返しを今積んでいる　扶美代
嘆願書積んでオオタカ守られる　あずま

近頃の積木くずしは親もする　安子
生活費削って旅費は積立てる　玄也
窓ぎわで積木崩れる音を聞く　重人
通帳に塵も積らぬゼロ金利　徳三
こつこつと犠打積み上げて日本新　一知
菩提寺の寄付へ積立てしています　あやめ
極楽の予約へ小さな善意積む　俶子
背の荷物積み替えている村境　愛論
いっぽんの電話に積木崩される　霜石
振り向けば馬鹿正直の積み重ね　紫晃
リンゴ箱美空ひばりの歌で積む　雅城
積み立ての意欲を失くす低金利　弘子
財産を積んでやる子のない孤独　南花
積み立てができる余生に感謝する　隆盛
札束を積んだ免許と書いてない　みつこ

佳

絵のとおりつみき積んでもつまらない　宵草
検査日は荷を積み替える非常口　正雄
積んである本の吐息が聞えます　千里
ワラを積む夕日に溶ける父の背な　柳弘
束ね髪ほどいて夢を積みなおす　雄々

人

札束を積むと砦がもろくなる　しげお

地

年金へ疑心暗鬼を積んでいる　充子

天

さよならを言えずに石を積み重ね　三宅保州

軸

志ならず六法積んだまま　妻子
俊子
正剣
保州
螢
たもつ
権悟
重人
絹子
ちかし
四郎
次男
徳三
孝雄
典子
充子
ミツ子
正子
みつこ
雄々
淞丘
昌枝

西

徳田ひろこ選

西へ発つ皆んな不思議な事はない　霜石
敵味方ならんで西を向くお墓　寿美
笠竹は西と出ました尋ね人　早智
アンテナも西方浄土向いている　シマ子
西向け西へ極楽の旅つづく　寿恵子
予報士も一目置いてる西の空　和香
リストラの西日　容赦のない西日　安子
ノルマとは悲し西日の中を行く　活恵
容赦なく大道芸に照る西日　たえ
西日背に農夫の鍬はまだ跳ねる　りつえ
沈む陽を追って働き着く浄土　富子
太陽が西に沈んだホッとする　しげお
陽がやっと西へ沈んだ休刊日　悦男
日は西にもういいだろう酒の燗　みね
陽は西に沈んだはずの熱帯夜　度
軍配は西に上がったギャグの数
朝顔に西日を遮断してもらう
西方の話へ落ちる午後のお茶
一日を灼いてさよならする西日
望郷の思い西日を見るたびに
八雲立つ故郷の空は遥か西
西日射す厨わたしのテリトリー
父さんの書斎西日が入る部屋
西日さす部屋で膝抱くペンネーム
夕焼けの彩を取り込む西の窓
靴投げて西へ向いたら西へ旅
西へ向く貨車へ小さく荷をまとめ
西方へ祈り捧げる盆の月
西方に恋人がいる遍路笠
人恋し鬼灯色の西あかね
ゆっくりと笑顔時きまき西の旅
西向きのお地蔵様へ夏帽子
茜雲今日は怒ったままだった
なるようになりなさいとて日が沈む
西よりの風をさらりと躱さんか
雲西に流れるおいでおいでして

佳

集中力を根こそぎ奪い取る西日　順子
ロザリオの祈りも深し大西日　美明
一度だけ西が明るい朝を見た　天涯
西風にまだ逆らえるペダル踏む　ますみ
病葉もゆっくり西へ流れ行く　千里

人

リビングのやや西にある喪の順路　扶美代

地

一切を呑んで貫おう西の空　敏子

天

西側に幸福の木を植えておく　斉藤劦

軸

失意するたび西方の応援

初歩教室

題 ― 黒

吐田（はんだ）公一（きんいち）

課題吟はその性格から言って、必然的に同想句や類想句と言われる句が多くなることは否めない。例えば今回について

○流行へ私も黒い傘をさす

○黒い傘流行だから持っていく

と、またこれに類した句が多かった。ただ同じ内容を詠みながら表現に工夫を凝らした、

○流行の黒い傘行く炎天下　山雅　子

のように抜群の技法が見られた時、この句は決して類想句と呼ばれるものでなくなる。

これは川柳もやはり表現力、つまり言葉選びの文化であるということでもある。で、できる限り他の文芸作品を繙き、辞書を片手に作句することをお奨めする。

添削句

○頑固者黒を白でと譲らない　三喜夫

時事吟としてとらえてみると、

▽黒を白ムネオ頑固に否定する

○黒い服細身に見えてお気に入り　弘　子

説明句に近い

▽ちょっとでも細く見せよと黒い服

○画がきぞめ若竹サーと活気湧く　孝　明

「黒」の題が詠まれていない

▽若竹を墨一色で味を出す

○囲碁相撲議員さんまで白か黒　洋　介

作句の時点ではこの現象（真紀子辞職）はなかったので無理もないが

▽白か黒疑惑のままの辞職劇

○若者よ茶髪より良い黒い髪　稔

投句三句共説明句。

▽黒髪を毛嫌いしてる若い人

○買ってから五回だけ着たモーニング　九　好

少しでも読む人にドラマらしいものを感じさせるように――

▽モーニング着る間もなしに身が縮み

○真黒に焼けた肌して鼻ピアス　欣　子

焼けたは冗長。真黒な肌とあるから

▽真黒な肌に似合った鼻ピアス

○つば広の黒い帽子が夏を翔ぶ　美弥子

上五は冗長。これを省いて翔ぶ訳を

▽恋最中（さなか）黒い帽子が夏を翔ぶ

○カルメンのパンツは赤より黒がよい　和　友

カルメンの魅力を詠めば――

▽カルメンの魅力引き出す赤と黒

○黒い服着てる人みな美女になる　こずえ

同じ内容を詠み変えてみると、

▽着る人をみな引き立てる黒い服

○黒石を勝ってもいつも持たされる　大　鯰

このままでは説明句。味がない

▽社長との囲碁はきまって黒にされ

○つけボクロ客の好みで場所を替え　安　子

中七を私なら

▽つけボクロ相手に合わし場所を変え

○面倒見良すぎて黒い政治屋に　裕　子

良すぎて（四音字）をいい（二音字）にしてみると、二音字節約できる。

▽面倒見いい政治家に黒い金

○電流で焦げた黒幕鈴木さん　栄　呼

発電機を指していることは分るが

▽黒幕に鈴木が噛んだ外務省

○白黒をつけるとその場しんとなる　満　子

下五の表現方法を一考すれば、中七の表現も引き出せるのではないか

▽白黒をつけて空気が重くなる

○黒い服三三五五に喪を告げて　美恵子

中七が川柳としては無意味に近い。

▽黒い服紋切り型に喪を告げて

○古里を支える柱黒光り　清

これだけではドラマが見えない。

▽黒光りの里の柱にやんちゃ疵

○胃カメラに写し出された黒い影　敏子
誤字に気をつけて、中七が単純で、ここに自分の感情を詠み込めばいいのでは
▽胃カメラに気になる黒い影一つ
○国政や市政のもある黒い影　裕峰
原句もいいと思うが
▽政界を住み処としてる黒い影
○みどりなす黒髪に逢う懐しさ　つよし
上九音字は若い女性を対象の言葉。下五から推せば初恋か——
▽初恋の黒髪いまは懐しく
○月毎の黒字を追い今日決算　勝久
見付けはいいのだが
▽決算の黒字へ会議弾み出し
○腹黒い人程優しそうに見せ　郁代
選挙などを想定すれば
▽手を振って応援を乞う黒い人
○黒真珠つけて見送る嫁の父　文江
亡父(ちち)でないと父が黒真珠をつけて喪を送る様子となり、合わないのではないか
○真夜中に門扉を叩く無礼者　敬之介
下五がこの句を駄目にした。
▽真夜中に門扉を叩く事件記者
○孫の背にTシャツそのまま日焼けあと　節子
中八を今流行の言葉に代えると
▽孫の背にボディーペイントの日焼けあと
○喝采の中で目玉を黒く塗る　輝夫
ダルマであろうと思うので、書き込む目玉は黒に決っており、重複の感が否めない。
▽喝采の中でダルマに目を入れる
○黒髪が老若男女に疎まれる　登志子
老若男女と疎まれるが不適では
▽黒髪も今は茶髪に押され気味
○死語ですか黒いカラスの濡羽色　円女
一応カラスは黒いもので重複
▽茶髪には通じぬカラスの濡れ羽色
○さわやかに黒は黒だと言える今　弘之
ご自分だけに分る句（ひとりよがり）
▽辞職して黒がそのまま灰色に
○白黒をつけて行事に文句つき　像山
この場合〝審判の協議〟だから文句ではなく〝行司差し違え〟となるのでは
▽白黒をつけた行司に差し違え
○黒を着る締って見える腰の線　フジ
原句も分るが
▽太りだし細身に見せる黒を着る
○見せ所黒子も役を担ってる　更紗
大抵の場合主役に対し黒子は報われない
▽汗だくのわりに黒子は報われず
○すみきった黒い瞳は夢灯り　アヤ子
上五が冗長。
▽黒い瞳(め)に明日の夢が宿ってる
○不況風黒ファッションが大手振り　侑子
下五の表現が不適
▽ファッションも黒がはやっている不況

佳　句

清張の黒シリーズに魅せられて　忠子
黒白をつけるときずな切れるかも　トシエ
黒枠のあなたと生きる六十路坂　和香
黒リボン掛けた写真の母若し　ゆきの
黒ネクタイ出番が増えた古稀の夏　章司
顔黒が美白になって町闊歩　栄子
黒猫に踏まれてばかりいるピアノ　栄一
失恋を思い出させた黒ビール　ヤギエ
日に一度黒星もらう物忘れ　智加恵
黒白は言わずグレーで身を守る　ふりこ
まっ黒なお腹に住んで太る虫　喜子
黒い霧いつ晴れるのか北の島　和輝
白黒をつけて仲間の輪の外に　菜月
黒幕と分かってからの車間距離　恵勇
にこにことお腹の中は黒いのに　益子
（ユーモアたっぷり）
黒塗りの下を想像してしまう　鈴美
（見付けがいい）
一本を決めて黒帯締め直す　昌鼓
（すかっと詠めている）

私の句

法廷で遺影を抱いている喪服

秀句鑑賞

同人吟　舟木与根一

―9月号から

私が川柳にとりつかれて以来、五十有余年。その間仕事上のことなどいろいろあり、川柳が重荷となって、いっそ止めようかとも思った時期もあった。昭和三十六、七年頃には『川柳雑誌』の不朽洞会員を努めた履歴もあるが、生来才能がないのか、川柳で好成績をとった記憶はない。その私が同人諸氏の句を鑑賞するのは、僭越であり全く申し訳ないと思っている。それでもし脱線していたら、そこのところはこの年齢に免じて、大目に見ていただくよう宜敷くお願いします。

ひもとけば青い吐息の日記帳

鷲見正子

いっそ日記帳をつけるのを止めたらと言いたいが、そうもならないのが人間の業というものであろう。生きて行くのはほんとうに大変だと思う。

家計簿を上手につけて離婚する

谷口　義

こうした手口のほうが、はっきりしていていいかも知れない。上手につけてとは面白い。

心臓もイエローカードもらってる

岩津ようじ

イエローカードは持っているが、その心臓がまだまだ頑張ると信じている。内蔵のチームワークを大切に生きて居られると思う。

ロボットを妻にしたなら気安かろ

板東倫子

ロボットは命令どおり動いてくれるから安心だ。この頃虫も殺さぬ顔をして夫に保険をかけ、殺そうとする妻がいる。物騒な世の中ではある。

七夕やうちの牽牛ままならず

今　愁女

食うて寝て、わが屋の牽牛は動こうとしない。七夕祭りも父さんがままならず大変である。父さんが留守になった方が気楽で静かである。

いつまでも手を振る母のたんぼ道

清川玲子

里帰りのたびに見送ってくれた母が、田んぼに今でも生きている。

エリートの一直線が味気ない

保田絹子

学歴が左右し、七光も後押しをしていると思うと味気ない。一直線がよく効いていて面白い句である

超高層ビルが沈める天守閣

丹後屋　肇

超高層ビルが建って天守閣が沈められたとは面白い表現である。筆者の住む松江でも、ビルに邪魔されて松江城が見えなくなった地域もある。街の発展が情緒を消してゆく淋しさがよく表れている。

東京の外れに棲んでいる天狗

播本充子

東京の外れに住んで、鼻持ちならぬ天狗の東京弁はいただけない。

音痴だが今日も与作の仕舞風呂

井上勝視

筆者にはこの句がぴったり合って楽しくなる。筆者も退職後与作に返り田畑の仕事が多い。音痴のあたりもよく似ている。

かまきりが有事の鎌をふりかざす

森　茂美

世相をかまきりで表現したのはさすがだと思う。こういう川柳は、なかなか作れないものだ。

洗濯機回して夫婦仲が良い

津川紫晃

今日の洗濯当番は夫の番であろうか。主婦業も分担して、マーケットへも二人連れか、仲の良いところを見せられた。

いちじくが花とは知らぬ小鳥たち

三島淞丘

小鳥ばかりではない。人間さまでも案外知らないで食べている者もいるだろう。こんなところにも川柳があった。

侍ばかり集まっていて決まらない

政岡日枝子

船頭が多くて何とかということもある。侍ばかりとしたところが面白い。

ドクターに双葉マークが無い恐さ

森井菁居

この句は素晴らしい。双葉マークとはいい見付けである。すべて医学も機械化で、あまりに器機に頼りすぎている現在、新人とわからないから恐い。

老い二人ピント外れも仲が良い

楠昭子

老いがすすむと、やることなすこと、行き違いが多い。お互いさまだと二人が笑ってすます。そんな笑い声が聞こえてくるようだ。ほほえましい句になった。

幸せな旅だ女房と酒を連れ

竹治ちかし

まさか一升徳利をぶら下げて旅をしている訳でもあるまいが、女房と酒を連れとは面白い。何となく幸せそうな状況が見えてくる。今夜は宿で夫婦楽しい酒盛りが始まることだろう。

プクプクと金魚も法螺を吹いている

土橋はるお

本当にそう見えるようだ。金魚を見ていると人間がまさに法螺を吹いているようだ。この句を読むとこれから金魚を覗く目付きが変ってくるかもしれない。そんな事を考えたら思わず吹き出した。

お砂糖をまぶした言葉だとわかる

西原艶子

セールスの言葉なのであろうか、それとも政治家ならぬ政治屋の挨拶か。いずれにしても、お砂糖をまぶしたとは面白い表現だ。何気ない言葉でもこんな時に生きてくるものである。さすが巧者だなと思う。

捨てかけたお皿を棚にまた仕舞い

宮脇道子

そういうことがある。使い古したものにはいつも未練が残る。思い切るという事が出来ない。歳をとった証拠ではないか。

記憶力良過ぎるのもくたぶれる

猪川由美子

いい事ばかりではない。悪い事でもいつまでも憶えていてくれるから困る。忘れてくれればいいのに、と何度思ったことか。記憶力が良くて便利のいい事もあるのだが。

遺伝子が騒ぐ祭の笛太鼓

木本朱夏

夏祭り、秋祭り、太鼓の音を聞くと血が騒ぐ。遺伝子だろうか。ともあれこれが日本人の血筋ではなかろうか。どんな世の中でも祭は賑やかに、いつまでも続けていきたいものだと思う。

ひとかどのサムライであるブルドッグ

新家完司

ブルドッグは犬類の中では大将格。威風堂々としていて、さすがサムライとはよく言ったものだ。

鵜がぼくで鵜匠が妻というドラマ

早川盛夫

ドラマどころか、我が家も案外その部類ではなかろうかなどと考えさせられる。鵜飼いに一つの視点を持って行ったこの句の面白さはさすがだと思う。婦唱夫随だなどと言ってしまえば味気ないところだが、これが川柳の妙味、面白さではなかろうか。

—水煙抄

秀句鑑賞

—9月号から

嵯峨根　保子

正直な答がかえる水鏡

塩路　よしみ

心象的な水鏡から、厳しい答えが返って来ました。ここ一番踏ん張ろうと、静かな覚悟が、生まれて来そうな一句です。

交換の時期か脳みそ軋みだす

福西　茶子

時計が急に止まり、電池を交換した時、この句と同じ思いをしました。心だけ自前で過せば、サイボーグにはなるまい。などと。

いい汗をかいて人間らしくなる

正畑　半覚

酷暑でした。きっと人のために何か爽快な汗を流して、ご自身、納得されたのでしょう。

計算は合うがお金は残らない

両川　無限

もっと残っているはずなのに、チェックしても合っている。日頃の私です。親しく乾杯！

新しい眼鏡に誰も気付かない

三浦　強一

ン万円を投資したのです。この日の眼鏡はリトマス試験紙でもあったのです。気付いた人、気付かない人。このペーソスの面白さ。

里の庭　妣に繋がる花ばかり

黒田　茂代

お亡母様の、花木を育てて下さるご実家。静かな豊かさを感じることが出来ました。

老人と役所で決めて手帳来る

平野　あずま

「老いたり」とは、自分で決めたいですね。でも、老人医療費だけは有難い。役所向けには老人で、川柳は気分も若く成人で。

家事をする母が好んだ七分袖

土田　今日子

母の原点は割烹着の「イソノフネ」さんです。服にしたなら七分袖。なつかしく共感。

捨て切れぬものを大事にして生きる

須磨　活恵

こころの在り方を教えられました。捨て切れぬものこそ、得難い温みなのですね。

善人にされて毎日忙しい

木下　敏子

一度善人にされると、悪人になる難しさ。お人柄と、お元気な様子が句に浮かびます。

手を叩くだけでは鯉も寄ってこぬ

軸丸　勝巳

笑いました。犬も、私の手許を見て、立ち上がり方を変えるのです。IT時代に入っても、人情の機微は変らぬと、鯉が風刺。

お化粧をしたのに訪問客がない

円増　純子

ノーメークの時、久々の来客があったりして。そんな翌日の、女ごころが巧みです。

結局は妻の虜になって生き

原　賢

裏返せば、何とお幸せな結論でしょう。こんな一句を吐かせた、奥様が羨ましい。

少年の日に戻りたい遠花火

安野　案山子

男性の大方の感慨と判っていても目に止まる句です。苦労の陰で安穏と暮しました。

本当の事を言わない売り子さん

巌田　かず枝

食品業界のあの有り様では、売り子さんの言わない本当など枝葉末節。「お似合いです」服売場の嘘などは、まだ自衛できますもの。

ミスしないために両目を開けている

森川　あらた

警鐘です。両目はおろか心眼まで開かねば、ミスをしそうな、されそうな、この頃です。

追悼

麻生アート君との思い出

阿萬萬的

八月の本社句会での「お話」で、路郎先生の御子息の麻生アート君のご逝去を、甥の西村哲夫さんから知らされました。

それを聞き五十数年も前のアート君にまつわる思い出が雑然と頭の中に戻って来ました。それと言うのは、私の若い頃川柳仲間としてお付合いがあったからです。しかし、さて何かを書いてみようかと思ってみても遠い昔のことなので、記憶もあやふやで順序よく纏まりません。

その川柳仲間と言うのは、「ガムシャラグルッペ」といってアート君の外に、夷一笑さんの川柳雑誌玉出支部にいた辻紅多呂と、京都平安にいた馬場理公君です。理公君は魚屋さんの息子でしたので一時魚介と号したこともありました。メンバーはその三人に私を入れての四人でした。

その頃の私の記憶の中に残っているアート君の句に

それぞれのけむりとなりし巻煙草
ルンペンの車にSのイニシアル

（ルンペンは今は禁句ですが）などがありました。

紅多呂君の句で記憶に残っているのは

鶴のあしあれで地球をささえてる

があります。

もう一人の馬場理公君は私と同じ当時鉄道省に籍があり、彼は大鉄局大阪倉庫に勤め馬詰苦楽公氏（ふあうすと同人）の下で働いていて、川柳雑誌大鉄局支部の句会に顔を出してくれていました。

昭和十年頃でしたか柳誌『番傘』に不満があって辞退し、百雷・蝉古・夕蜩・芽十らが『昭和川柳』を発刊しました。そして天神橋五丁目の角の喫茶店で十人ばかりの人達で月例句会を開いていました。

それを知った若い向う見ずの私達は、飛び入りで参加したこともありました。

だが紅多呂君も理公君も共に大東亜戦争で帰らぬ人になってしまいました。私達のグループも戦争と共に自然解消となったのです。

これは戦後ずっとあとになっての話ですが、或るとき中尾藻介さんが、「馬場魚介さんから萬的さんの短冊を貰いました」とのこと、その句は

何でも理解しているような波の音

だったそうです。

その後私は職場が芦屋の変電所勤務となり、徹夜三交代なので川雑本社ともおつき合いが薄くなり、それに輪をかけるように大阪大空襲で家を焼かれ、宿舎を転勤と共に転々としていました。しばらくは暮らしに追われ川柳もまたそれなりになっていました。

平成十年路郎先生の三十三回忌の法要を西村哲夫さんのお寺で勤められたとき、久し振りにアート君とお会いし、古い話に花が咲きました。その後『川柳塔』にも投句を復活していただき、また川柳塔同人として援助して戴くようになった次第なのですが……思い出はつきません。

合掌

アート句抄

獅子座流星なにほどのこと高いびき
欲しいのはサボテンの美とそのつよさ
友達はニックネームで覚えてた
ベッドのまんなかラジオと僕とふたりぼち
物語すっかりきえて終電車
投げキッスあの世の妻へ送らんか
食べること食べたことだけ書く日記
リストラを気にしながらもサボるなり
山上の垂訓　雀ふとり居り
冬の暗黒わたしは老いた深海魚

本社　九月句会

九月六日（金）午後五時半
アウィーナ大阪

一向に暑さの衰えぬ九月、汗を拭いながらの百十二名の参加を得て、定刻午後六時半開会された。

はじめに喜多瑞峰氏の御挨拶。同氏は朝日「なにわ柳壇」を中心に活躍されたが、目下は作句を休み闘病生活を送っておられる。往年の入選句をベースに『居酒屋おやじの川柳』を出版され、本社句会の出席者に贈呈された。

おはなしは天笑主幹。先般、青森県川柳大会に講師として赴いた。路郎、栞、薫風各主幹が招かれている縁の深い大会である。青森は難しい句が多いとの印象がある。そこで「ユーモア川柳」と題して、ユーモアの大御所である豆秋氏の句をプリントして配布し、句を参照しながら、軽み、うがちについてお話した。

路郎師や豆秋氏の句には無駄な言葉がない。短詩文芸では最高と思う。シンプルイズベストである。単純で明解である所を学びたいと思うと結んだ。

月間賞は岩佐ダン吉氏（岸和田市）に輝く。

（司会―遠野）（記名―月子・澄子）
（受付―寿美・瑠美子）（清記―尚士）

席題「萩」　西内　朋月選

端居して萩と一緒の月見酒　鐘造
わたくしも萩も夕陽に揺れ急ぐ　森子
人の背を眺めて帰る萩の寺　尚士
老妻としみじみ歩く萩の寺　弘一
一人ふたりと仲間が消えて萩こぼる　たず子
萩を見に行こうと決めた寺がある　扶美代
許す気で萩はこぼれる月あかり　求芽
萩咲けば心せわしい受験生　武庫坊
盃をとる口実に萩の花　尚士
萩揺れる女お喋り秋日和　愛論
マドンナに誘われてゆく萩紀行　雅文
萩の寺いつも揉めてる老夫婦　伽羅
夏ばての歩幅を癒す萩の白　一風
萩ススキ亡夫の忌も過ぎ青ブドウ　アキ
再婚のはなしに揺れる萩の花　隆盛
合掌の指から洩れる萩の風　睦子
こぼれ萩浴びたあの日のかくれんぼ　章久
萩揺れて思いも揺れる夕間暮れ　(矢)五月
尼寺の鐘にはらはらこぼれ萩　鹿太
うたた寝の尻の丸みや萩の餅　昭
こぼれ萩なんでなんでを繰り返す　千歩
萩揺れる面影揺れる月の道　みつ子
夏痩せに無限の恵み萩の白　公誠
髪に萩飾りいそいそ会いに行く　文
水子地蔵にいつまで祈る萩の寺　たず子
も一人の私と出会う萩の寺　楓楽
散り急ぐ萩へ返事を迫られる　希久子
夏が逝きさみしさ癒すこぼれ萩　恭昌
くどくどと釈明しない萩の白　アキ
満月に照らされうれしそうな萩　月子
最敬礼の姿で萩の花盛り　笛生
萩ゆれて亡夫と酌み合う初しぼり　和香
少し酔い少しときめく萩の寺　睦子

佳

萩くれるひとあり今夜ひとり酒　瑠美子
こぼれ萩女は深い業を抱く　寿美
萩こぼれこだわり少しずつ消える　みつ子
夏萩がもんどり打ってとおせんぼ　茜
咲き匂う萩に別れを諌められ　柳弘

人

白萩の可憐花盗人になる　つづや

地

コスモスよ萩よ命を燃やさんか　森子

天

こぼれ萩経を唱えて秋を掃く　一風

軸

萩こぼれ詩人にさせる寺の庭

兼題「イメージ」　山本　義子選

祖母に重ねる私の余生イメージよ　満津子
プラトニックラブのイメージダウンする　螢
ネクタイの色がイメージこわしてる　照子

富士登山イメージ壊すことになり　かすみ
イメージの悪さは花でカバーする　鹿太
秋風に娘のイメージも大人びる　昭
誠実さイメージ通りだから好き　春
イメージチェンジ若い社長でやり直す　紫香
イメージを見事打ち消すノーメイク　遠野
イメージを変えて父さん台所　(奥)五月
休日のこれが社長かなと思う　美代子
善人というイメージに騙される　尚士
イメージの私はきっと悪女だろ　昭子
ジーパンになると舞妓と気がつかず　楓楽
イメージの変らぬうちに文を書く　武庫坊
イメージがふくらむ子らのクレヨン画　賢子
封印を解けばイメージころげ出す　民
爽やかなイメージ抱いて白い画布　愛論
イメージをコーヒー党と見た不覚　いわゑ
眼を瞑るとわが故里の千枚田　たもつ
イメージで遊び心を育ててる　睦子
イメージは乗馬する人には見えず　瑠美子
イメージと違う娘連れて来た次男　あやめ
この世去る日のイメージがまだ湧かぬ　(矢)五月
バラ一輪君をイメージして描こう　希久子
イメージが違いすぎてた声美人　寿美
イメージを変えたあなたの手の温み　ダン吉
イメージのまんまで育ってほしいもの　とし子
イメージを信じて足を掬われる　鐘造
イメージを重ね重ねて本を読む　舞夢
アイドルから見事脱皮の汚れ役　洋
イメージがだんだん薄れ行く遺影　笛生

命名へ孫のイメージふくらませ　一風
イメージが湧かず白紙の原稿紙　諷云児
どこよりもいいイメージが故郷にある　シマ子
佳
四角いスイカ切るイメージが湧きますか　野霧
イメージをみじんに砕く窯開き　菜月
目をつむる愛をイメージするために　楓楽
ハナエモリ言えば浮かんでくる蝶々　セツ子
流木を磨きイメージふくらます　典子
人
イメージはじゃがいもみたいだけど好き　倫子
地
イメージの青が崩れてゆく地球　朝子
天
語り部のリズムにイメージ影を追う　愛論
軸
三面鏡にイメージ問うて出かけます

兼題「啖呵」　寺川弘一選

上沼に負けないように啖呵切る　螢
勝ったなと馬鹿な啖呵を聞いている　充子
すぐ逃げるくせに啖呵を切りたがる　三喜夫
啖呵一つ切れずに一生終わりそう　蕉子
かっこいい啖呵のわりに客を言う　修
啖呵など要らぬゆっくり勝つ心算　あやめ
手強いなわたしの啖呵笑ろている　かりん
わたくしの啖呵へ犬は尻尾振り　文
かあちゃんに啖呵きっても無視をされ　玄也
押し売りへ啖呵は切れず咳払い　かすみ

聞きなれた啖呵そうかと酒を注ぎ　千枝子
一度だけ使ってみたいこの啖呵　雅文
啖呵きったが洗濯機さえままならず　千歩
啖呵切った手前ダイヤを買わされる　典子
玄関を出てから胸のすく啖呵　扶美代
帰り道そっと啖呵を切ってみる　ダン吉
浅草で大阪弁の啖呵聞く　つづや
あほやなあこんな所で切る啖呵　朝子
啖呵切るたびに友達減っていく　保子
もう啖呵切れないボクは総入歯　昭子
ずうずう弁啖呵切ったが通じない　ふりこ
忠告をしたら啖呵で返された　倫子
啖呵切ってるつもりでしょうか笑っちゃう　冬葉
啖呵切るにはもう少し酒が要り　月子
啖呵切り終ると妻は貝になる　楓楽
どんと胸叩く女についてゆく　アキ
啖呵切る母の乳房を待つ楽屋　恭昌
啖呵より怖いはんなり刺した釘　重人
別人の顔で啖呵を切る美人　森子
啖呵切り辞表を出したのは女性　ひさ乃
啖呵切る人とは見えぬたおやかさ　いわゑ
そこまでと妻の啖呵に袖を引く　鐘造
あなたなら妻に啖呵を切れますか　金太
佳
あらそうでござぁますかという啖呵　保州
啖呵切るきっと血圧上がってる　茜
道頓堀啖呵をきって水の中　桂作
内部告発うっかり啖呵切れません　求芽
啖呵まではんなりと切る京なまり　尚士

人
ニンニクをたっぷり効かせ吐く啖呵　朱夏
地
啖呵きった男もいよう青テント　千代
天
均等法男も子ども産みなさい　保州
軸
引き際の舞台に置いてくる啖呵

兼題「転ぶ」　木本朱夏選

転んで転んで頂点に立つ男　充子
転んでも起きてくるまで構わない　螢
転ぶたび掴んだ物が光り出す　みつ子
楽な方に転んでばかり夢ばかり　たず子
ビー玉ころころ少年期が転げ　洋
親亀も子亀も転ぶ株指数　笛生
妻の目の届かぬとこでよく転ぶ　重人
妻子には転んだなどと言うまいぞ　保州
転んでもプラス思考にきりかえる　ふりこ
転んでるレーニン像の赤い舌　修
空掴む軍手転がる炎天下　かりん
もう箸がどう転んでも笑わない　いつふみ
フランスパンが転んだままのワンルーム　弘一
一歳にころびかたをなろてます　蕉子
おつかいのりんごも転ぶ一輪車　茜
仏の手握っているのによく転ぶ　諷云児
転びました神さまのお手待っている　義子
骨折をしない程度に転べます　金太
寝転んで見上げる空へ空になる　朝子
敵よりも味方が転ぶのが怖い　鹿太
曳きずった絆に転ぶ秋の陣　森子
イエスマンの方へ転びたがるトップ　楓楽
わたくしと転んでくれる影がない　睦子
二人三脚いつもあんたが先転ぶ　哲男
七転びのままで自分史終わりそう　ダン吉
転ばねばならぬピエロのサロンパス　求芽
転ぶのも上手になった馬の脚　月子
転ぶたび男がでかくなっている　ダン吉
寝転んで明日の風を読んでいる　森子
寝転んで夏やせを知る古畳　真理子
バリアフリーで転んだ疵が治らない　楓楽
損得で転ぶポリシー無い尻尾　セツ子
親の引くレールへ子供よく転ぶ　雅文
白桃したたり転びかた学んだ　保子
佳
物置に転がっていたこころざし　桃花
お布団の角で転んだのがたたり　天笑
いい人になろうとするとよく転ぶ　千里
本当は転げてみたいにぎり飯　洋
わたくしも転んだのよと手を握る　(矢)五月
人
いつも転ぶ所へ塩をまいておく　シマ子
地
あたり一面僕の転んだ跡ばかり　扶美代
天
全力投球した朝顔の種転ぶ　茜
軸
何度でも転ぶ答が見えるまで

兼題「錯覚」　山本希久子選

錯覚の海で抜き手を切っている　充子
ジャリトラから下りた男が女子トイレ　きらり
どの人も美人に見える傘の中　睦子
街角でふと錯覚とすれ違う　洋
錯覚じゃないか私の日本語　金太
錯覚ではないぞ地球が泣いている　鐘造
関白は錯覚でした定年後　尚士
半音の錯覚許さないタクト　正雄
錯覚同士金婚に来てしまい　天笑
錯覚で開いた扉閉らない　公誠
錯覚の海で溺れた夏帽子　森子
昔から女は弱いと思ってた　泰子
錯覚を悔いてる空っぽの財布　重人
錯覚のまま一生を終わりそう　ひさ乃
生きていることが錯覚かもしれぬ　保州
錯覚に嵌ってしまう試着室　文
ニアミスを恋と錯覚してしまう　楓楽
錯覚の中でナツメロ聴いている　かりん
中流と錯覚してた小さな庭　遠野
万札に見えて落葉を拾い上げ　たもつ
錯覚のふたり楽しい二重奏　重人
幸せと錯覚してた砂の城　寿美
錯覚という空間のありたのしかり　いわゑ
勘違いしながら生きている私　千枝子
親切を錯覚してた淋しがり　瑠美子
錯覚のメロンへ見栄が透けている　雅文
散りぎわを探す造花の思いこみ　美代子

まだらボケという手で老いを楽しまん　千代
束の間の錆覚でした遠花火　扶美代
ふと風に愛しい声を聞く墓参　セツ子
錆覚か迷路か地下を抜けられぬ　房子
移ろいの中で錆覚繰り返す　柳弘
錆覚をさせる作戦ねっている　瑠美子
花一輪もらい錆覚してしまう　桃花

佳

錆覚が会社ひとりでしょっていた　耕治
錆覚を重ねて無事に生きている　武庫坊
錆覚に頼り縦縞ばかり着る　真理子

高野山合祀法要

平成十四年十一月九日（土）

例年通り本年度物故者、並びに昨年までの物故者の法要を、高野山大霊園において行いますので、できるだけ多くの方々の参列をお願い致します。

詳細は十一月号で発表しますが、切符手配の都合がありますので、お早目に事務所までお申し出下さい。

今年度合祀者は次の11名です。

池田寿美子・椎江清芳・藤井計光・奥山美智子・菱田満州・板垣草丘・里小路・小林周信・正本水客・橋本多哥由・麻生アート

（総務部）

錆覚かアルツハイマーかが疑問　つづや
錆覚のドアを叩いて恋は憂き　保子

人

錆覚はお互いさまよ夫婦箸　正坊

地

ちぎれそうな釦錆覚くり返す　萬的

天

生年月日きっと錆覚だと思う　たず子

軸

錆覚は楽し秋のページめくる

兼題「広い」　橘高薫風選

新学期お家が広くなったよう　シマ子
平成の女性にグランドが広い　充子
束の間のたかーく碧い盆の空　きらり
ハナハトの頃は遊び場広かった　正雄
草に寝て宇宙の中の一人なり　たもつ
ストレスを捨てに富良野に来ています　月子
のら猫の上には広い空がある　典子
そら広い海へおかえり子亀たち　いわゑ
広いのに隅に固まる池の鯉　桃花
謝辞を言う広い額が揺れている　欣子

春

広すぎる額に帽子ハンサムよ　三喜夫
夏が終ると浜辺はこんなにも広い　千歩
大阪も広いな知らぬ街がふえ　和香
沖縄から宗谷川柳広い旅　美代子
飛行機雲よ国境はどの辺り　金太
幅広の地下たび農婦誇らしく　たず子
夫よりちょっぴり広く歩幅とる　泰子
未練みな捨てると広い四畳半　朱夏
つば広の帽子に隠す夏やつれ　金太
骨盤の広さは母に敵わない　恭昌
堅物の父にも夜の広い顔　伽羅
十階の窓から見てる広い空　鐘造
人間になって開けた広い視野　洞庵
広い空ひとりじめして山頭火　鹿太
広大な寺に小さな御本尊　義子
惚けた母ほとけの広いみ手の中　章久
ホスピスに広い大きな南窓　寿美
遺されたひとりに広い傘の中　民
決断をうながす広いひろい空　睦子
糸切れた凧で自由が広すぎる　重人
愛情の広さを知った花ことば　野鶴
美酒を酌み広いこころを貰ってる

佳

バオバブに聞きたい広い空そして　茜
人嫌い天体鏡の空広し　冬葉
広さより愛いっぱいのログハウス　澄子
余生を遊ぶインターネットの大広場　洋
さよならを海の広さへいいそびれ　雅文

人

何事も広い心で無関心　真理子

地

山火事も絵にしてしまう大地行く　文

天

広い海なんで救われたんだろう　岩佐ダン吉

軸

海よりも山は広いね鰯雲

第36回　東大阪市文化祭参加

第30回　市民川柳大会

日　時　**10月20日**（日）
正午開場　出句締切１時
会　場　東大阪市社会教育センター３階
（近鉄布施駅北へ５分）
ビデオ放映　「まちかど探訪」２編
宿　題　（各題２句・出席者のみ）
「屋　　根」　高橋　定男選
「揺 れ る」　瀬川　幸子選
「あ ん た」　坂本　晴美選
「記　　憶」　山本希久子選
「なるほど」　本庄　東兵選
「　手　」　中林　酔虎選
「チャンス」　西田柳宏子選
秀句に市長賞その他佳吟賞・参加賞・発表誌呈
会　費　1,000円
懇親会　3,000円（当日申込み）
お問合わせ　片岡湖風（0729-65-1341）
主　催　東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会・わかば川柳会
後　援　東大阪市・東大阪市教育委員会

第52回　富田林市民文化祭

川　柳　大　会

と　き　**10月19日**(土)午後12時30分開場
（昼食は済ませてお越し下さい。）
ところ　富田林中央公民館（0721-24-3333）
（近鉄南大阪線富田林駅南へ200米）
お　話　北澤紀味子氏「織田作之助と文学」
宿　題　「信」小林すみえ選（堺番傘）
「仮」瀬川　瑞紀選（グループ明暗）
「草」福島　直球選（ふあうすと）
「開」本多　洋子選（点鐘の会）
「数」平山　繁夫選（時の川柳）
「割」池　　森子選（富柳会）
席　題　なし、各題２句　締切13時30分
会　費　1,500円（作品集、参加賞呈）
賞　秀句呈賞
懇親会　4,000円（当日受付）
主　催　富田林市・富田林市教育委員会
(財)富田林市文化振興事業団　他
後　援　富柳会
連絡先　池森子　Tel 0721-25-0603

文化祭吹田市民川柳大会

今年もあなたをお待ちしています

日　時　**10月27日**（日）午前11時開場
各題２句締切り午後１時（多忙者９時受付）
場　所　吹田市文化会館メイシアター３階
梅田より北千里行約15分阪急吹田駅西口前
お　話　梶川雄次郎氏
宿　題　「捨てる」　西　美和子選
「憎　い」　浅雛美智子選
「連想吟」　松本初太郎選
「奪　う」　前田　咲二選
「器　用」　天根　夢草選
「叱　る」　西出　楓楽選
会　費　1,000円　秀吟賞　参加賞　軽食呈
懇親会　4,000円（10月15日迄に事務局へ）
当日追加注文は出来ませんので御注意下さい。
どなたでも自由に見学できます。作品集が入用の方は「住所・氏名」を受付へご提出下さい。
吹田川柳会事務局　06-6381-2431　早崎和子
〒564-0012 吹田市南正雀2-26-18
主　催　吹田市教育委員会・文化団体協議会
吹田川柳会

岸和田市文化祭参加

第52回　岸和田市民川柳大会

日　時　**10月20日**（日）正午開場
（今年は日曜日です。御注意下さい）
会　場　岸和田市立春木市民センター３階
（南海電車春木駅下車100米）
お　話　山本　蛙城氏
兼　題　各題２句・出席者に限る
「こっそり」桜井　千秀選
「勇　気」　土田　欣之選
「調　子」　塩満　　敏選
「粘　る」　芳地　狸村選
「茶漬け」　松本初太郎選
「輝　く」　河内　天笑選
締　切　１時30分
会　費　1,500円（参加賞・大会誌呈・軽食付）
賞　文化祭賞・文化祭奨励賞・文化協会賞
操子賞・きしせん賞
連絡先　芳地狸村（0724-27-5029）
主　催　岸和田市・岸和田教育委員会
参加団体　岸和田川柳会

第26回　寝屋川市民川柳大会

日　時　11月3日（祝）正午開場
会　場　寝屋川市立総合センター4階自習室
（京阪寝屋川市駅下車　バス西口①乗場より守口市駅行・③乗場より守口市駅行・太間公園行・古川橋行）
兼題と選者　「省　略」　江口　　度選
「深　い」　海老池　洋選
「　渦　」　上田　　仁選
「都　会」　高田美代子選
「手触り」　津田　一江選
「積　む」　田中　正坊選
席　題　ありません
出　句　各題とも2句　締切1時
賞　各題秀句に賞状と記念品
会　費　1,000円（記念品・作品集）
投　句　10月30日必着（切手400円）
送り先　〒572-0063 寝屋川市春日町9-9
高田博泉内　川柳ねやがわ
主　催　寝屋川市川柳協会
後　援　寝屋川市文化連盟
川柳ねやがわ

第12回　枚方市民川柳大会

日　時　10月27日(日)　午後1時半開場
場　所　枚方市立枚方公園青少年センター3階
（京阪枚方公園駅下車西へ徒歩3分）
お　話　番傘川柳本社主幹　礒野いさむ氏
宿　題（全題詠み込み可）
「　液　」　岡　　良三選
「　気　」　奥田みつ子選
「　生　」　久保田元紀選
「　玉　」　黒川正之進選
「　念　」　長江　時子選
「　有　」　本庄　東兵選
席題なし　各題2句　締切午後2時半
参加費　500円（発表誌呈）欠席投句拝辞
賞　市長賞・市教育委員会長賞
市議会議長賞
主　催　くらわんか番傘川柳会
後　援　枚方市・枚方市教育委員会
午前中はひらパー(枚方公園)でお楽しみください。
連絡先　〒573-0081 枚方市釈尊寺町28-4-301
足立淑子　Tel 072-853-8153

第3回　いたみ市民川柳大会

と　き　11月17日（日）開場10時30分
ところ　伊丹商工会議所 情報センター6階
TEL 0727-73-5007
阪急伊丹駅から徒歩4分・ＪＲ伊丹駅から7分
お　話「荒木村重と有岡城」　森本啓一氏
兼題と選者
（各2句・席題なし・出句締切12時）
「生きる」久保田半蔵門・「学ぶ」小松原爽介・「笑う」泉　比呂史・「燃やす」奥田みつ子・「先（さき）」田頭　良子
事前投句　「力」　延寿庵野靄 選
葉書に2句（10月31日締切・消印有効）
参加費　1500円 軽食・発表誌呈(出席者に限る)
賞　各題毎に賞およびラッキー賞あり
事前投句送り先・問合わせ先
いたみ川柳会事務局
〒664-0858 伊丹市西台5-5-26　岡村方
TEL&FAX 0727-72-3655
主　催　いたみ川柳会
後　援　伊丹市・市教委・商工会議所　他

第49回　八尾市民川柳大会

と　き　11月3日（祝）正午
ところ　八尾商工会議所（例年と場所が変わっています）
近鉄・ＪＲ八尾駅よりバスあり
八尾市役所前下車
かいひ　2,000円（呈作品集、鉢植花、軽食）
宿　題　「　棚　」　長島　敏子選
「　無　」　阿部　光雄選
「　血　」　小山　紀乃選
「　学　」　宮西　弥生選
「　雲　」　池　　森子選
「　薬　」　田中　新一選
「　仏　」　土田　欣之選
締　切　午後1時（各2句提出）
懇親宴　3,500円（希望者のみ当日受付）
主　催　八尾市民川柳会
後　援　川柳クラブ「わたの花」

夢フェスタとっとり～ふるさと　ふれあい　夢づくり～
第17回国民文化祭・とっとり2002

〈川柳大会〉案内

静かな田園の町【しかの】・【四季薫る町しかの】にあなたの句木を建てませんか？

夢フェスタとっとり（第17回国民文化祭）〈川柳大会〉は、10月26日（土）鳥取県鹿野町で開催されます。

この「夢フェスタとっとり・川柳大会」の上位入賞句は、川柳句木として、鹿野小学校周辺の『川柳街道』歩道に建てられます。是非、あなたの句もたててくださいね……。

現在、62本の句木・句石が建っており、昨年のプレ大会のものもあります。

また、会場となる「鹿野小学校」は、昨年新しく開校した学校で、城下町の雰囲気をそのまま建物にした木造建築のすばらしい学校です。当日は、土足厳禁のため、お持ち帰り用の〈川柳大会〉文字入スリッパをご用意いたしました。

この他、アトラクションには鳥取県を代表する勇壮な踊り「因幡の傘踊り」のご披露等、全国からお出でいただく皆様をおもてなしするため、全町民あげて色々な工夫をしています。ぜひ、「四季薫る町・しかの」に来て街並みの散策や、温泉入浴・人々の温かい人情に触れてくださいね。

大会当日の日程などは、次のとおりです。

日　時　**10月26日（土）**　8時30分受付開始
10時30分出句〆切
事前投句・当日句入選発表・
選評・表彰式　14時35分～15時30分終了予定

場　所　鹿野町立　鹿野小学校　体育館
鳥取県気高郡鹿野町鹿野二八八番地
（アドバルーンを目印にしてきてください）

題・選者　「果　物」　木野由紀子　選
「輝　く」　新畑ひろし　選
「静　か」　荻原　柳絮　選

二次選者　吉岡　龍城・今川　乱魚・礒野いさむ・橘高　薫風・大野　風柳

入　賞　文部科学大臣奨励賞など　10賞

交流会　10月26日　16時～17時30分
国民宿舎「山紫苑」（会費四千円）

合同大会　10月27日（日）　10時～12時
文芸部門上位3賞表彰式・ジェームス三木氏の記念講演）
東伯郡羽合町「ハワイアロハホール」

その他　○シャトルバスの運行
当　日　朝　鳥取駅南口・浜村駅・鳥取空港→鹿野小学校
大会終了後　鹿野小学校→鳥取駅・浜村駅・鳥取空港・山紫苑
交流会終了後　山紫苑→鳥取駅・浜村駅・鳥取空港
○昼食弁当代・交流会参加費は、当日申し受けします。

問い合せ先
第17回国民文化祭鹿野町実行委員会事務局
TEL　○八五七―八四―二三九九
FAX　○八五七―八四―二五九八

会場の鹿野小学校（2001年4月開校）

花地図

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

翠洋会（前月分）　穴吹　尚士報

好きな柄だけど値札に縁がない　真理子
顔立ちが父に似たから縁遠い　尚士
縁談が進み夫婦の会話ふえ　絹子
路地住い金には縁のない暮らし　正雄
合鍵のひとつふたりの縁きめる　孝一
初産に二人三脚雅子さま　春
バツ一がバツ二にいたわられている　恭昌
いたわられ親の出番がなくなった　日の出
いたわりが欲しくて赤い花生ける　蛙
公園の花いたわるようにこぬか雨　蕉子
いたわりの言葉短い方がいい　昭
いたわってくれているのは知ってます　千梢
同じ薬のんでいたわり合っている　理恵
二股をかけた見合いで困ってる　舞夢
小錦には負けてますねん言うておく　伽羅
幼児が見くらべて取る菓子の山　会美
クラス会幸せの嵩比べ合う　富子
容姿では比較できぬが妻達者　さと美
小粒だが夢はデッカイ柿の種　久峰
成績はいつでもパパと比較され　千歩
優劣の比較はしない五本指　志華子
B面で覚えた生きる知恵と勘　澄子
物を買う前に百均一まわり　叡子
決心をまたも鈍らす俄か雨　照子
台風が逸れて今夜はちらし寿司　義
迷わずに父の土産は一升瓶　東雲
伸び過ぎて思案している豆の蔓　正坊

三幸川柳教室　三宅　保州報

職人の腕が冴えてるプロジェクト　豊太郎
腕組みをしてると橋が渡れない　碧
才腕がぐる怒濤の波飛沫　満洲子
高慢な腕はピンチに折れ易い　町子
内紛の火種を消した腕っ節　孝子
腕に縋りかけて舵取る火の車　利治
ロボットの腕前嗤うたたき上げ　鉄治
ためらいを捨てると見える青い空　イセ
ためらってようやく点る右脳の灯　和代
求婚をためらう彼の裏事情　敏子
還暦でためらい古希で赤いシャツ　嘉平
厳かな宴でためらう銀の匙　登美代
とつおいつためらい傷はバネになる　公子
ためらいを隠し切れない筆の跡　純子
羊羹の厚さためらう客の数　和子
ためらっていると尾鰭がついてくる　マリ子
ためらっているのか新芽伸び悩む　千秀
人形にやがて来るかも反抗期　正匍
嫁ぐ娘に博多人形までもたす　桂香
人形展向かい合ったら動けない　昇
大切にされて人形しんどかろ　昭枝
人形の泣いている日は俺も泣く　正一
身のうちの宙を見つめる土偶の目　朱夏
水たまり梅雨が楽しい登下校　章子
田植えまで体験ツアー出る時代　美子
ひとときの涼を楽しむ心太　みね
水掻きが生えてきそうな梅雨しとど　保州
ためらってばかり白線越えられず　三千子
マネキンのポーズ奇抜になって夏　さち子
雨あがり草の匂いが夏にする　栄之進

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

母と娘の目と目無言のメッセージ　泰雄
メッセージ余白に添える花言葉　活恵
ありがとうこの世に残すメッセージ　武史
台風も地震も天のメッセージ　求芽
人相で評価されたらかなわんな　克治
父に似る顔至福の刻を知る　節子
自画像の裏も表も出る人相　比ろ志
人相で心の奥は量れない　庸佑
ぐらぐらとおやじの席を子が揺らす　孝一
つり橋とぐらぐら揺れている命　スミ子
ぐらぐらと揺れる長野のダム工事　五月
ぐらぐらの日本明日が判らない　尚士
ぐらぐらと鉾が街行く京の夏　満寿蔵
縁あって神すり合った深い仲　義一
万葉の袖振る恋は美しい　半蔵門
さり気なく絵手紙で来たプロポーズ　澄子

絵手紙に女に早い四季めぐる　メ女
絵手紙の祭りを偲ぶ遠花火　稲子
絵手紙を書いて絵手紙待っている　砂輝守
薄墨の景色がにじむ便りくる　秀夫
旅だより絵ごころ添えた烏賊すだれ　重人
山菜の絵手紙民宿から誘い　萬的
同権のはずが男性弱くなり　治三郎
幸せに見える古老の深い皺　紫香
労りの言葉もらえぬ曼珠沙華　あやめ
きれぎれの思い出紡ぐ仏間の灯　百合子
迎え灯が遅いと妻に怒られる　晴美
何時までも嘘が気になる雨模様　しげお
人かなし人差指のあるかぎり　礫
父の日は父をいたわるメッセージ　諷云児

川柳高知　川竹　松風報

才媛の新婦で和裁できません　快風
お茶の間の平和へ姑孫をだき　功
和解したことにしておこ夫婦仲　孝雄
妥協して和を貫しとするホーム　さき子
和を守るためには耐えた主婦でした　幸
すれちがい軽い会釈で和を保つ　かよ
味よりも生まれ育ちで売る和牛　圭二
良俗の祖先に深くありがとう　竹萌
夕立へ謝るように虹が立ち　成美
夕立のような男で後がない　佳風
夕立はここだけだった運不運　暖
夕立をのれんへさける男達　栄珍
夕立に遭った分だけ傘が増え　悦子
大ジョッキ泡へ媚する目の鱗　哲史
一杯のビールで酔える今の幸　てるみ
喉の奥ビールゆさぶる一杯目　和江
乾杯のビールが旨い入選句　美々
大ジョッキ片手に男隙だらけ　松風

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

幾重にも結んだ老母の宅急便　ひかり
生きるため何度己をかみ殺す　勝
いつの世も金に人間あやつられ　放任
口利きとワイロじゃ腹に据え兼ねる　かおり
表札の手前悪人にはなれず　あきら
古傷を忘れて仕舞う蝉時雨　いさむ
満ち潮の如く寄せ来る母の愛　賢
五風十雨喝采のない農に生き　吟笑
今日は亡母と二人の団らん日　寿々女
花粉症マスクは要らぬ山若葉　治延
事もなくお尻が拭ける有難さ　輝夫
全身に冷風くれる自動ドア　八重子
野仏につわぶき被せ行く遍路　貞月

岸和田川柳会　長谷川呂万報

衛星の写真成る程地図通り　穣一
虚を突かれ天狗が待ったする王手　洋
突き破りコンクリーから咲くすみれ　路子
突き上げる拳よ空は青いまま　ダン吉
うまいこと不意を突かれたひったくり　狸村
適当そうで確かな母の匙加減　俶子
適当な嘘も心をやわらげる　英雄
適当に教えた宿題みんな×　東吉
妻に嘘ついて道楽通してる　東雲
本職は社長政治はお道楽　蛙城
リストラへ道楽一つ身を助け　房枝
道楽の果てにガラクタ部屋一杯　弘子
道楽の限りつくした息子が看取る　苑子
再会の名残つきない同期会　昭二
たんぽぽが名残惜しげに風に乗る　珠子
ニシン来ぬ浜の番屋に風はなく　野添
お祭の名残恥ずかしごみの山　ゆり子
戦争の名残モンペの似合う母　みよ子
名残惜しそうに振ってる缶ビール　守
祭笛まだ鳴り止まぬダムの底　仁緑
さまざまの名残を乗せて終電車　一脩
忘れ得ぬ名残の友よ原爆忌　基

佳句地十選（9月号から）

篠原　いつふみ

音立ててみたい時あり砂時計　伸二
薄命な筋だが美人とはいえず　信子
しゃべってもしゃべっても菩湧いてくる　てる
ひとしきり済んだか小言眠り出す　直子
げんまんの指から嘘が抜け落ちる　寿子
風鈴が昼寝を誘う音で鳴る　鹿太
天気図が伸び縮みして梅雨がくる　信博
大器晩成母の錯覚まだ続く　忠良
拝復の後書いて消し書いて消し　一筒
愚痴っぽい人のとなりが空いている　よしえ

和洋とも凛と身につく着道楽　呂万
紅ひいて女の名残秘めている　さよ子

川柳塔みぞぐち　小西　雄々報

姉妹そろいの浴衣可愛いな　千代美
浴衣着て座れば女らしくなり　康女
しがらみも共に行水して流す　正光
行水に瓢箪下がる棚の下　久子
盆踊り浴衣の似合う友も逝き　鈴枝
構造の改革揺れて秋を待つ　公美枝
カラフルな浴衣着こなす娘も二十歳　弘子
糊のきいた浴衣が心引きしめる　智恵子
野良仕事終えて行水心地良い　和代
庭先の行水蛍飛んでいた　豊枝
行水を終えていちごのかき氷　静江
胸襟を開く浴衣に夕日落ち　雄々

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

北斗星今宵も見てる千鳥足　東園
ふる里に少年の日の星がある　勝巳
小波につい誘われて浜に降り　幸子
風格も母なる海の土用波　昭三
海は細波やさしく海に抱かれよう　武庫坊
もう誰もかまってくれぬ波の音　恵子
この願い仏に祈る唯祈る　千恵
慈悲拾い仏背にする遍路笠　満寿蔵
成仏を願い魂さらけ出す　久子
もぎり立てを嬉しく貰う茄子胡瓜　糸子
デフォルメが強くて空が海になる　寛之

蚊遣りして満月をみる人恋し　正子
元気づけ出勤前のセミの声　節子
黒づくめ陽を除けるひと焦がすひと　孝一
白い雲心の女の顔に見え　弘一
蝙蝠になった少女の朝帰り　半蔵門
サングラスの影にひそめている姑息　義芳
眼鏡ふいても拭いても茫として炎暑　年代
梅雨蛍血縁うすき掌に囲う　里江
老残と言われたくない鰻裂く　光穂
そうめんが冷えてめぐり来るヒロシマ　薫
八月の耳鳴り夾竹桃まっ赤　静
えのころの影揺れている迷っている　芳子

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

人間が人間らしくなる斎場　好栄
ある時はまんじゅう一個に角をたて　民子
人間に生まれ掟に縛られる　ちよえ
人間に裁ききれない罪がある　はるみ
流行歌音の速さに乗り遅れ　かつ子
無力です仏に悩み問うてみる　聖子
写メールの音がしらせる新時代　恵美子
人間でよかったバーの灯が赤い　博利
人間味子持ちの猿に教えられ　清泉
悔いのない生きざまなどと絵そらごと　白汀

東大阪市川柳同好会　森下　愛論報

紫陽花と一緒に揺れる蛙の子　猪太郎
紫陽花の指きり信じてはならぬ　美弥子
あじさいも筧の音へ眠くなる　雅文

紫陽花の一鉢で足る車椅子　緑
学力のレベル低いがやさしい子　賢子
落とし穴の方へ傾くやじろべえ　度
レベルの差見せず互角に石を置く　庸佑
納豆の糸のレベルとあうわたし　ばっは
宅配が届いた母の温い愛　和代
行き届く女将で流行る旅の宿　章久
下心あるらしEメールが届く　萬的
包んだら話さぬ欲を磨いてる　弥生
包装紙無理をしたなと知っている　太郎
情愛に包まれ暮らす旅路の奥　シマ子
捨てばちなこころ包んでくれる海　朝子
みな仲間海は一つで繋がれる　東雲
幸不幸母の港はいつも凪ぐ　湖風
ちぎり絵の港で眠る冬ほたる　愛論

堺川柳会　河内　月子報

自然治癒信じた母の尊厳死　八千代
旅に出る一番軽いカバンさげ　篤子
まだ雪にはしゃぐ心がほん少し　みつこ
阿吽の息色褪せ出したペアシャツ　りつえ
十八の頃の気持で立つ港　美代子
笑いすぎた命そろそろ涙ぐむ　扶美代
いい顔になった何度も泣いたから　月子
母さんに貰った顔で勝負する　アキ
体操を雪合戦に切り替える　舞夢
犬掻きを鮫が面白そうに見る　天笑
目玉焼毎朝食べている命　伽羅
本当の海を知らない養殖魚　玄也

道草で急に元気が湧いて来た　日の出　哲平
啄木を追うて函館港へ着き　深雪
あれ以来あなたの胸が港です　朋月
飲んで寝るだけで終わったフルムーン　泰子
西へ西へと片道切符の旅つづく　つづや
愛ひとつ壊れる音を聞く岬　かりん
深海も宇宙も人の声がする　五月
熱帯夜ことばの海で遊んでる　楓
雪解けて私の恋も水になる　半銭
うす汚れたわたしを包み込む雪よ　小雪
とっときの顔です今日はバースデー　巳代一
色も形も魔法の中にあるいのち　冬虹
息抜きの旅に上司と鉢合せ　梓
わたくしの終の港の現住所　恵勇
雪解けの絵手紙が来てほっとする　さくら
わたくしが酔えば夫がしゃんとする　俶子
風雪に耐えた岬の松も老い　和香
最果ての岬で霧に包まれる

尼崎尾浜川柳会　田辺　鹿太報

時々は自己主張する足の爪　鹿太
明日へ向くやる気眉間に湧く意欲　その
深呼吸空の青さに勇気湧く　江美
難関の受験に挑む孫いとし　よし子
山道のせせらぎ心なごませる　カズ子
暑さ負けだろうと思うもの忘れ　信子
案じるより産むが易しの孫を抱く　秋子
太りすぎ挑むエステは高くつく　亀与子
大食いに挑む女性もいる時世　耕治
挑む先晴か嵐か神まかせ　まさ
行列で買ったケーキをバカにする　孝一
湧き水に一息いれて水彩画　義芳
ゆかた着てしばし女の子にもどる　イサミ
個性派と言われ師匠に挑む芸　正治
なに急ぐ住基ネットに湧く疑念　求芽
機嫌よい朝だ沸々ファイト湧く　柳宏子
湧き水に五合目あたりが美しい　紫香

竹原川柳会　時広　一路報

みんな味方でカレーライスがおいしいね　蘭幸
味方にも敵がいる事忘れまい　夏喜
石地蔵ひとり味方を見つけたぞ　半覚
応援は敵も味方も無い私　規代
敵味方リバーシブルの裏表　敬子
終ってみれば味方は一人影法師　万年
リストラで社長の味方いなくなる　年子
体重計君は味方か敵なのか　民恵
おーい雲風を味方の草むしり　淑子
木洩れ日を味方に付けて紫陽花の彩　慶子
姉という強い味方がついている　一枝
黙っていても最後は味方でいてくれる　貞子
肩を抱くだけの味方ですまないね　不朽
太陽を味方にいつもひとりぼっち　栄恵
味方には大久保彦左衛門がいる　静風
花散りて老母にこやかに掃いている　孝枝
この家の涼しい場所を犬に聞く　千枝
夏色の空よ背のびがしたくなる　史子
万華鏡まぶた閉じてもまだ見える　笑子
私の目線の位置を確かめる　厚子
目くじらを立てたら僕の負けになる　菁居
人の目にどうあれ僕は僕の道　正宏
目の中に入れても痛くない金利　力
キラキラと七夕さまのランデブー　房子
七彩をやさしく見せて雨に咲く　汎美
7回の輪廻をくぐりたちあおい　幸子
逆転へラッキーセブンの風が吹き　節夫
七福神に入りたがってるうちの父　眞由美
七人の敵を味方にさせる策　一路

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

見直せば優しい子です落ちこぼれ　鉄治
カブト虫募集を森に吊しとく　裕美
この道が好き思い出と野仏と　度
八月の疼きを癒やす鎮魂歌　高夫
赤ちゃんの零れる笑顔ほんまもん　美子
新聞が零れる笑みも配ってる　怜
零れ種ばかりが伸びる庭の草　英子
七福神のこぼれ話を手に受ける　結美
虚栄盛る女の皿から理知零れ　佐代子
胸にこぼれた言葉が溝をやわらげる　寿子
同窓会零れ話を聞きにゆく　輝子
原爆忌涙零れる丸い背　和香
掌を零れた愛をまた捜す　あき子
美人募集自称美人がどっとくる　さち子
天国からの募集に鬼も並んでる　優子
暇ですの募集の予定ありません　三喜夫
余力あり募集に挑む定年後　和

セールスの募集無口が自信持ち　佐一
熱帯夜仏も鬼の顔になる　克子
出直した力を仏褒めてくれ　豊太
御仏の掌に乗せられている現世　保州
仏壇の父が笑えと笑む写真　泰子
八月の空へ懺悔の鐘ひびく　稚代
転んでも八起きの薬は掴んでる　和重
八合目もうふり返る事もない　大輪
八本を上手に使う蛸の足　射月芳
八頭身で煙たがられている女　美羽
八掛に色気の交じる裾さばき　和子
土一筋生きて八十路へまだ元気　正博
ふんわりと八方美人翔んでいる　順子

川柳ふうもん吟社　杉本　孝男報

政治家のレベル日本に明日はない　洋々
じれったい気持のままに夜があける　圭一郎
ひだるさを知らぬ子供のおもちゃ箱　(山)節子
生き抜いた証を素手は物語る　(澤)裕子
朝顔がねぼけた僕を見て笑う　(蔵)悦子
背伸びする心誰かに見透かされ　保子
じれったい時をさなぎのままでいる　あけみ
人生を語るレベルにまだなれる　一京
広めたい噂口止めして流す　昌鼓
無学無能無口の俺がじれったい　志げ緒
あの世からひだるいメール届いてる　益子
摘み終えて庭木の姿笑み浮かぶ　孝明
乾杯の音頭右手がだるくなる　金祥
プライドの虫一匹がじれったい　一粋
仏の眼慈悲は無言で罪悟す　喬水
お付き合いレベル合わせて上手くやる　由美子
じれったい鬼です角が折れている　一瑶
ない知恵を左右に振って考える　はつ江
じれったい地団太踏んで泥を撥ね　暢夫
煩悩の渦にもだえてじれったい　(版)多哥由
一言で私を言うとじれったい　修
無気力を空の青さに笑われる　(下)幸子
無邪気な目私もあんな日もあった　春名
君と僕レベル同じで馬が合う　宗明
一段のレベルが高く背伸びする　良子
哀しみの涙がでないじれったさ　螢
学力のレベル人間計れない　(西)悦子
三浪でレベル下げない意地がある　毅
夢語る男いっつも金がない　無限
ハイレベルついて行くのも息が切れ　孝男

川柳大阪　高木　信酔報

美しい心はあるが腹黒い　すがお
相棒が主婦してくれる今の幸　かよこ
花名刺これが証拠や観念し　まつお
機密費が私的に化けて靴背広　柳昌
春の花いっきに咲いて新生活　美花
届きたる新茶の香り仏にも　功
初孫の泣く声囲む義父と義母　叭笑
口げんか朝にはきっと仲直り　照月
イヤリング小さな嘘に揺れている　柳弘
働ける体と職があり元気　一歩
世の中をうまく泳いだ立志伝　青道
気分よし人間みんな好きになる　川童
飲み込んだ愚痴が胃の腑で疼き出す　洛酔
追い風に乗った逆転ホームラン　鉄心
背泳ぎで泳げば広い空がある　金太
いつまでも青い地球を残したい　重人
アフガンの子供三食してますか　敏
大空を泳ぐ夢見ている金魚　朝子
我慢強く永久に客待つ招き猫　章久
腹の中清流鮎を食べている　ダン吉
三食のあとで年金考える　元紀
焦らされて美人の返事待ってます　利昭
肩書きが職業になる名刺出し　ひろゑ
出勤の母通せんぼする子供　春蘭
常習の薬が保つ老いの道　喜楽
日中に溝を残してソウル入り　本蔭棒
ひと筋に守る老舗のさじ加減　民子
ちゃうねんわ私本当は男やねん　智子
逆境を泳ぎ切ったる顔の皺　楽子
明るさは星の数より貰いうけ　信酔

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

もの哀し胡弓のしらべ風の盆　みよ子
汗流す人へエールを送る風　みつこ
掌の風は味方と信じ込む　扶美代
風切って威張った人も塀の中　一壺
八十路にもまだ明日があるつむじ風　吐来
一家言もって頑固に老いてゆく　かつみ
欲張りの性格地獄で捨て切れず　専平
イヤと言えぬ質でいろんな役貰う　絢子

おっとりと太っているのにほれました　真一
ひと癖はあるが確かな腕を持つ　一知
ずけずけと照れ隠してる思いやり　りつえ
陰少しあって惹かれる人がいる　ダン吉
移って見たがどこも厳しい不況風　昇
いまここで移ると負けた鬼になる　敦子
移り気で究められない趣味の道　章司
いつからか妻に移った主導権　志洋
新築の家に移って深呼吸　フジ
核のない星へ移転を考える　敏
親一人タライ回しにするプラン　重人
激流へ鞭うち移る鮎の群れ　忠宏
朝夕のニュース暗いこと続き　昭平
夏バテに明るいニュース沸くわが家　たけし
補聴器が思わぬニュース持ってくる　庸佑
ひそひそのニュースはすぐに羽が生え　満寿蔵
聞き齧るニュース尾鰭をつけて飛ぶ　さとみ
立った歩いた孫のニュースの電話口　泰子
スキャンダル ニュースソースはお手伝い　久仁子

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

親よりも先に走った三回忌　八重
添寝する親子でかける虹の橋　富久江
ふり向けば親の二倍も生きている　八重子
五匹産みグッと貫禄つけてきた　孔美子
望郷へ親はもうない女郎花　くに子
大切な親苗抜いて実を増やす　実満
株投資ペロリなめられスッポンポン　菊乃
初心からペロリのみこむ勘のよさ　みどり
大鍋のカレーペロリと夏休み　かつ乃
たのもしいペロリと飯のお代りか　はるお
切手ペロリ愛をとどけているのです　みさ子
子ども二ュースで間に合う老いの社会学　弘子
一年の早さもうじき盆がくる　武子
さり気ない親切どこのどなたやら　公子
どなたにもお世話になってありがとう　英夫
どなたとも手を組む詩が大好きで　野草
どなたです隙間風にも声をかけ　なが子
どなたにも愛される娘が病んでいる　幸枝
どなたにも頭を下げる偉いひと　喜与志
お見送りしてから今のどなたかえ　汲香
私に杭を打ってるのはどなた　和子
出目金に黒を着せたいのはどなた　茶子
どなたにも松茸山は教えない　節子
運命にどなたも逆らえぬ絆　睦子
親が居るただそれだけで足が向く　きみ子
日本の忌と母の忌と忌を重ね　ひろ子
親馬鹿が子供を置いてパチンコへ　久枝
身の芯を流れてくれる親ごころ　諷人
逆縁を許すほかない盆がくる　忠良
親孝行知らない孫が六人も　螢

京都塔の会　都倉　求芽報

姑の目は部屋の隅々まで届く　てる
すばらしい絵に囲まれて小半日　達子
サングラス掛け善人の相かくす　春蘭
俄か雨 本屋捜して雨やどり　武庫坊
退屈も幸せの内午後のお茶　諷云児
夕ざれば風はゆたかな匂いもつ　年代
鱧を焼く祭太鼓が近くなる　正坊
鱧おとし京に夏来て夏が去る　礫
脈のあるうちに聞きたいことがある　典子
脈のある答を待っているポスト　欣之
人脈が日々を豊かにしてくれる　宏子
脈々と秘伝のたれという老舗　萬的
脈どころ押さえノーとは言わせない　吉之助
人脈のなかの一人が要注意　求芽
叱られているから脈はあるらしい　葉子
赤銅の膚はまだらの勲章だ　百合子
寅年で獅子座で豹柄が好きだ　啓子
冬山のまだらに溶けた山の肌　芳子
家中がふりまわされるまだら呆け　満子
名優の素顔に老斑を見たショック　克治
キュッキュッとワイングラスを磨く余暇　幸代
老い盛ん余暇をはみだすスケジュール　英一
多すぎる少なすぎても困る余暇　庸佑
病院の待合室に余暇がある　高栄
ありすぎる余暇に鼻毛が伸びたまま　ただし
生甲斐の余暇より孫に気をとられ　輝美
余暇のため買った道具があくびする　益子
祖母の余暇 集印帖の埋まる旅　メ女
余暇に書く戯れ画がとても面白い　紫香
定年後に備えて余暇に取る資格　ルイ子

川柳ささやま　遠山　可住報

思いきり走れば涙も乾くかも　恵美
乾パンは非常袋の中にある　純子

ネクタイをゆるめてすする夜泣きソバ　多美子
鉄格子すがる再起を願う母　美智子
恋愛の熱は只今四十二度　八重子
願い事叶い腰痛どこへやら　靖子
ネクタイをきちんと締めている悪魔　つや子
血も涙もないかの事件多すぎる　かほる
千羽鶴平和の願い空に舞う　君代
もう一度だけ逢わせてと流れ星　毬子
定年を区切りにネクタイ眠りこけ　開子
甘すぎる話にのった願いごと　美沙子
夢食べて夢におぼれた微熱かも　とみ子
ネクタイは思い出いっぱいすぎし日が　朝子
耳元で愛の余熱が覚めずいる　寿子
お願いは一票ほしいだけのこと　可住

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

薄衣をまとった月の悩ましさ　兵八郎
年寄りのおぎなう事は少しだけ　實
お茶だけで酔える男は素晴らしい　輝夫
同権にご隠居さまはオーイお茶　水笑
楽しんで螺旋階段老いの道　晴翠
一病と和して運命に素直です　勝視
三度目は伯父貴交じえた強意見　高明
何一つ出来てないのに卒寿来る　虹汀
栄転も左遷も同じ駅を発ち　四郎
炭を焼く窯場は知らぬハイヒール　正剣

かわはら川柳会　上田　俊路報

小説を読むと心が生き返る　輪多朗
小説のヒロインになり枕濡れ　余吏子
自分史を小説に書く夢をみた　悦子
ときめいて読む小説に老い忘れ　泰良
みそ汁の具にもそれぞれ困り事　寿子
困りごと早く解決青い空　雅予
おだやかなくらしにもある困りごと　道子
海開き困ったお客シュモクザメ　登生
困りごと顔には出せぬ自尊心　俊路

川柳塔打吹　大森　孝恵報

ストレスは貯まりお金は底をつく　勝見
天下取り知る人あって裁かれた　貴恵
過ちを涙流してちゃらにする　紀美恵
暗闇で妻と間違え人の手を　晴光
ミステーク盗っ人酒が顔に出て　和等
目が醒めるような博打を打っている　一揆
夫婦喧嘩裁く家族がいて欲しい　清
丸まって裁きを待とうダンゴ虫　玲子
こつこつと貯めたお金に羽がはえ　京子
ミステーク一夜明ければへいの中　たけ代
我ながら貯めたものだな古衣裳　順子
貯めるより生きてる内に使っちゃえ　扶美子
借金を貯めてあの世へ持っていく　久芽代
医療ミスなかった麻酔から醒める　忠良
ミステークして人間が温かい　照彦
醒めるには惜しいたっぷりもてた夢　博丈
貯めすぎて便秘の薬今日も飲む　友楽
貯めすぎて遺産でもめる嫌な記事　雄々
財貯めるもうけ話にもう乗らぬ　睦子
どぶ板の下百年の恋もある　克枝
うそぶいて裁かれ罪の深さ知る　幸香
そろそろだ閻魔の裁き受けるのも　節子
忍耐の裏に勇気を貯めている　螢
けちんぼう貯めては見たが使えない　しろう
簡単に許す私のミステーク　芳光
胴長でアユ釣り中に転けちゃった　重忠
結婚もミステークかな顔見つめ　和子
嬉しい時のために涙を溜めておく　龍枝
ミステークすべてを秘書が引き受ける　幸子
若づくりしても写真に裁かれる　孝恵

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

何物にも比較出来ない父母の恩　ますみ
妻の顔誰とも比較しないこと　東雲
クラス会横目で指輪比較する　宏至
子に負けて満足顔の背比べ　加津子
お隣と比べて笑う茄子胡瓜　潔
尊敬の度合いは父母の無限大　欣之
ショッピングまずはちらしの比較から　きよみ
孫二人悲喜こもごもの通知票　艶子
呼び捨てになってたしかな愛が湧く　民
湧き水に今日の懺悔を呑み下す　冬虹
交われば愛が湧きでる人とひと　シマ子
雷光の闇が目指している沃野　年人
どしゃぶりの雷雨おとこは逃げられぬ　秋雄
雷の音も流れてくる受話器　ひさ乃
風神雷神それから妻のなる番に　弘直
つまずいて別の世間が見えてくる　一風

このチャンス一つゆすぶりかけて見る　春蘭
よこしまな愛へチャンスがそっぽ向く　柳伸
旅ゆけば粋なチャンスに逢えるやも　頂留子
折り合いのチャンスをやっと探り当て　巳代一
風を読みチャンス来るのをじっと待つ　庸佑
ライバルも同じチャンスをねらってる　柳宏子
大器晩成ゆっくりゆっくり来たチャンス　弥生
残照にはかない命恋蛍　万亀の
愛一夜月下美人は闇に散る　幸生
精いっぱい燃やして蜉蝣のいのち　ダン吉
鬼灯が破れはかなく夏終る　千里

川柳塔まつえ吟社　津川　紫晃報

蛍一匹誰を待ってる橋の上　きみ子
約束は橋のたもとと念を押し　政子
いつだって橋のむこうが気にかかる　多喜
橋の向こうに恋しい人が住んでいる　昌枝
目的があって一本橋渡る　静恵
見て見ない振りで通した橋の上　与根一
電車旅ゆっくり土地の情にふれ　(多)博子
電車道辿れば若い日に会える　邦代
湖岸電車わたしと下りる風の音　房子
縄電車幼い恋の風のせて　玲子
心には湖岸電車の音がする　注湖
縄電車で遊んだ昔かえらない　秀子
ひと言が言えず終点近くなる　ひふみ
天秤にのった一言笑う風　たけし
いたわりのひと言ほしい夕茜　きみえ
ひと言で源氏を読ますあなたプロ　日出子
ひと言の向こう噂の海があり　畔
ひと言の重さを知ってから無口　ちかし
貧しいが心に優しい虹の橋　ちえこ
虹の橋わたり切らぬに消えた夢　昭二
朝の虹今日はいい日と信じよう　知恵子
父が見た虹を私も追っている　淞丘
大空に暑中見舞いの虹の詩　圭詩朗
虹が立つ味も素っ気もない世相　叮紅
瀬戸内の島より届くみかん箱　宏
長男も次男も島を捨てて出た　義良
原色の水着に島の夏がくる　茂美
橋が出来それから島は不眠症　多賀子
八月の島はいくさの愚を語る　桂子
美化された島でドラマが風化する　紫晃

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

八月の内緒白桃熟れている　富喜子
内緒事目で大方の用が済む　孝一
秘密持つ重さに壺がひび割れる　紀乃
喜びの涙内緒が胃に重い　メ女
ミニばらの内緒わたしはバイオの子　哲子
合鍵のないふところにある内緒　比呂志
逢い別れ飢えにも耐えた青春符　美代子
お腹一杯食べて心は飢えている　陽子
都市砂漠飢えた心を肌で知る　庸佑
アフガンの飢える子供は裸足なり　トミヱ
芋粥で忍いだ飢えを懐かしむ　松煙
近寄れば扉の奥が見えてくる　光久
美人にはすぐに近寄る癖がある　五月
ジンフィーズ急接近の恋となり　文
サッカーの主催身近な国になる　奮水
祈ってあげることしかできず背をさする　たず子
空の青鬼にも祈ることがある　いわゑ
蝉が鳴く祈りの形そのままに　義子
夕風に祈りとどけと揺れる絵馬　嘉彦
寄せ書に皆の祈りが込められる　鹿太
祈りからさめて穏やかな風を知る　求芽
祈りまだ続いて老母の丸い背な　柳宏子
輸血いま息を殺している祈り　しげお
八月が来ると平和を祈りたい　江美
夏祭り河内音頭で幕が開く　諷云児
午後の雨珈琲館は花盛り　房子
世界地図あっちこっちが焦げ臭い　いたる
土間涼し祖母の居そうな台所　春蘭
夾竹桃咲いてあの日が蘇える　正坊
焼かれても祈りは残る千羽鶴　曙蝶

川柳塔おおとり　原　みさを報

親ゆびで指切りをするEメール　せつ子
結び目の弱い約束ならばせぬ　彰雄
約束が欠伸している花時計　清子
指切りの好きな小指が痛み出す　雄々
口紅を替えて約束待っている　紀子
時刻表すごい約束だと思う　宏章
約束を果たす財布の底叩く　以和万津
約束はいつもの喫茶隅の席　登美
友情の約束　心かよい合い　小生
我が家だという顔猫もし始める　艶子

家々に灯が配られて暮れてゆく　一弘
家族とは背なを合わせて温かい　邦昭
夏休み家が運動場になる　仁子
久闊のペンがすらすら走りだす　幸次郎
風の子のまぼろしだけが野を走る　風花
駆けつけてくれた両手のあたたかさ　舎人
たばこ買うぐらいに車走らせる　由多香
亀さんはあれで走っているのです　たか子
漁火を横目に据えて帰宅する　大鯰
五七五忘れぬうちに走り書き　冨貴子
少年の走る姿を不思議がり　道子
小走りもままにならない歳となり　義弘
休みには心の幅がひろくなる　和子
休眠中の鈴虫と兜虫　螢
ひと休みすると遅れてしまいそう　真一
年一度休んで検査ドック入り　黙光
休日はあっという間に通りすぎ　芙美
向う岸で一服してる　亡父だろう　みさを

川柳塔なら　坊農　柳弘報

穴かがり一針ごとに愛をこめ　更紗
狩人の仕掛けの技に情けの目　カズ子
灯を慕い罠にはまった烏賊の群　きらり
空蟬へ輪廻転生今さらに　理恵
針穴に夫と息合う木綿針　登美子
蟬の羽化眺め生命の光見る　妙
さあ大変孫が一晩家あけた　ふりこ
人情が薄れ事件がこぼれてる　敏子
あの事件以来きれいになりはった　欣子
蟬しぐれ太く短くこの浮き世　むつみ
さっぱりと顔を洗えば腹が減り　とし子
企んで墓穴に落ちてたたら踏む　美和子
試験問題のデータが消えていた　桜竜
ラーメンを残して走る事件記者　春雄
靴下の穴を見付けた通夜の席　秋泉
針の穴ほども許さぬ父頑固　絹子
テレビ局が事件買ったという事件　真理子
愛憎の果ての惨事を見る金魚　冨子
空蟬の明日へ構えたまま朽ちる　茂雄
何時か来た釣の穴場をまたさぐり　春蘭
空蟬の命はかなく爪をたて　道子
母さんをときどき泣かせている事件　洋子
大自然の仕掛けをこわす人のエゴ　和夫
とかげの尻尾切って一件落着す　長生
尼寺の木陰鳴く蟬鳴かぬ蟬　睦朗
極楽も地獄も越えた針の穴　秋雄
子の声はちらほら蟬は鳴きしきる　良一
生きて来た証のシワだ仕掛けない　弥生
花の柩に恋の事件簿閉じこめる　隆盛
亡母さんの匂いの残る針の穴　朝子

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

誰ひとり王の裸を口にせず　久子
親の真似するなしてほし子は育つ　千里志
命綱ニトロ携え山歩き　信男
おしゃか様まねてゴールに天を指す　黒兎
血糖値食べる楽しみにぎってる　契子
転がると命を奪う世の乱れ　雪子
上手すぎる真似に自分を見失う　ヤギエ
真似たように見えてなかなか超えられぬ　禄骨
おばちゃんが占拠している美人の湯　柳童
古里の楽しき日々は短すぎ　長一
飛び入りも見様見真似の盆踊り　祥風
無一物ひらきなおりにちと不安　勝
知名度が頼り塾女のヌード本　正三郎
裸一貫なりて己の弱さ知る　吉太郎
寒行の裸で跳ねる白い滝　ただし

翠洋会　穴吹　尚士報

初盆の線香かおる里の家　桃花
胡蝶蘭香りより値でふと迷う　孝一
アロマテラピー有難きかな平和　千歩
うつり香はシャネル5番とふんでいる　千梢
敗戦忌香煙ゆれる兵の墓　正坊
祭には来ると言うからわくわくし　東雲
わくわくとした日もあって共白髪　叡子
炎天下わくわくしてる決勝戦　会美
競馬狂わくわくしてる菊花賞　久峰
歩いたぞまた歩いたぞ父の二歩　昭
悪い予言当らないよう祈ってる　舞夢
予言とや日本沈没せぬ祈り　春
よかったね医者の予言がはずれてる　日の出
東大は無理と教師のうす笑い　尚士
長生きの話に耳を傾ける　照子
甲子園メガホン胸に抱く祈り　恭昌
喪服着る喪服の似合う顔になる　義
必要とされる幸せ不幸せ　蕉子

意地張ってみてもついては来ない足　蛙　志華子
鬼灯をならすと亡母の声になる　富　子
USJキャンセル続く夏の陣　正　雄
豪快に三振明日に期待する　理　恵
忠告の手紙まっすぐ貼る切手

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

病む人へ蛍を放つ蚊帳の上　霜　石
空爆の記憶の中をとぶ蛍　きよし
不夜城になにを血迷う恋蛍　妙　子
ヒロシマの黙祷それは叫び声　ヒサ子
マドンナの後より匂うシャネルの5　て　る
マドンナのビキニの姿目にしみる　隼　人
猛吹雪来るなとさけぶ岩木山　順　風
山頂へ立てば叫んでみたくなる　慕　情
三回忌蛍はきっと亡母だろう　銀　波
八月はゆっくり先祖と対話する　ふさゑ
迎え火の蛍となりて亡母御座す　花　匠
叫んでもラストシーンは戻らない　雅　城
乱舞する蛍は恋のオーディション　ツ　ネ
虫かごの蛍を放つ人が好き　千加子
北蛍明るさ競う熱帯夜　花　峯
八月の街に溢れるへそピアス　一　花（カカ）
愛一途点し続けている蛍　五楽庵
叫ぶだけ叫んでみたい登校拒否

長柳会　加島　由一報

弟に意見されてるお兄ちゃん　英　美
つぶ餡最中無難な意見詰ってる　潤　子

不揃いな家族まとめる母の腕　史
首切りの噂妻にはまだ内緒　けい子
借金で回らぬ首が回りだし　てるこ
足並を揃えて凛凛し甲子園　正　一
正座して聞いた意見に足シビレ　良　男
捨て切れぬ美学男は首かける　芳　野
笛太鼓揃いのゆかた盆おどり　輝　治
アスファルトいやます暑さ蝉しぐれ　も　こ
今にして心にしみる父の言　敬　二
言い訳は止めた証拠が揃ってる　一　慧
美しいうなじ電卓叩いてる　冨美子
百均が揃う新婚台所　和　代
帰省ラッシュ長くなってる母の首　正　美
花びらの行儀の良さが摩訶不思議　和　子
意見より母の涙が効く非行　幸　雄
二の足も揃い輪になる盆踊り　三和子
聞くだけは聞き置く妻の節約論　直　樹
無口だが意見はさすが的を射る　正　子
意見する方にも同じ傷がある　由　一

岩美川柳会　石谷美恵子報

太陽が覗き出す頃鯛釣れる　蟹　郎
野次られてかっとくるのが玉にきず　一　粋
ちっぽけな僕を天辺から覗く　芳　光
ふところへ短所隠して応接間　一　瑶
十六夜の月に日記を覗かれる　よしえ
胃カメラの死角にあった黒い影　和　枝
八月忌また零戦に乗った夢　螢
時間かけ良心覗くようにする　修

焦るなと短所気遣う友がいる　睦　子
心棒が酒で歪んできたようだ　完　司
幸せな棒で私の杖となる　かつみ
後棒をかついだ罪は山分けだ　静　生
天保銭覗くと江戸の夢が見え　重　忠
三百六十五日うきうきしておれぬ　はるお
おざなりにするな広島長崎を　一　夫
暑さぼけ心棒までも枯れてくる　圭一郎
過去の悔い覗こうとする悪あがき　孝　男
またお盆親しい方の棒が立つ　和歌子
年金という大きな棒に支えられ　きみ子
長所ゼロ直ぐにはじけるシャボン玉　季　芳
明日咲く花でみんなに覗かれる　一　京
慟哭の夏ナガサキもヒロシマも　忠　良
短所など仲人口に出てこない　喬　水
麺棒のリズムが生んだそばの味　公　乃
一寸だけ覗くつもりがのめり込む　た　ぬ
母さんの指揮棒今日も元気です　節　子
ヒロシマの風化許さぬ原爆碑　裕　子
棒一本背なに通している男　雅　女
空財布覗きため息ばかり出る　孝　美
酷暑にも耐えて被爆の霊偲び　美恵子

川柳さんだ　北野　哲男報

ポーズつけ苦吟で終る初句会　昌　子
絹ごしの奴が涼を連れてくる　歳　子
今わたし夢の真ん中船を漕ぐ　ちあき
マメに生き歩きつづけたコップ酒　敦　子
純粋な祈りですとは程遠い　久　恵

終戦日一分だけの祈りする　サクラ
同窓会男がこまめに世話をやく　俊昭
風鈴に夏のリズムを教えられ　章子
突き上げた拳に勝利握り込む　正行
飲みすぎた朝にサラサラ昆布茶漬け　朋月
ジーンズの穴も飾りか若い脚　藤朗
注目をされてみたくてめし残す　忠
太陽の沈む輪廻を見た遍路　哲男
原爆忌終えて首相も夏休み　正和
他人より高くかかげる千社札　千代

川柳クラブわたの花　吉村　一風報

声援に押されて出来ぬ後戻り　美代子
帰らない過去をさまよう旅枕　民子
地中から自然に水が湧き出てる　明
首相の座はかなく消えて塀の中　八寿子
挑戦の勇気イコール可能なり　(増)道子
お隣の頂き物は倍返し　宏至
ライバルに逝かれてひとりずもうとる　ミツ子
鐘一つ打って亡母に留守たのむ　君江
一押しが足らず無念の臍をかむ　(馬)宏
同じ日が続く北国雪おろし　春子
痛切にありがた味知る妻の留守　一風
さまようてやっぱりいつか来た道だ　幸枝
一泊の島で目当ての磯料理　隆盛
別離の日出会った時の冬景色　晴美
湧き出ずる平和の雄叫び地球駆け　俊子
円滑に決まった受註疑われ　恭一
恋人に断り切れず押した印　奈良司

昼のない国に生まれて見たい夢　友甫
ほめごろし乗ってほぞ噛むへぼ将棋　正純
グルメ旅茶漬が待っていた我が家　一道
ジャンボひまわり比較にならぬ我が家にも　(本)たえこ
明記した産地信じて食べてます　(赤)妙子
痛切に幸せ感じ米をとぐ　ますみ
痛切な余生揺さぶる介護論　トシエ
蝉の声一樹が鳴いているように　まさと
ありがとう掃除楽です狭い家　いつふみ
犬の欠伸うつって夫婦寝るとする　義明
ばあちゃんの知恵で円滑わが家です　春江
不景気でもトラが勝ったら勇気出る　順生
孫がきて朝から家が沸き上る　知佐子

いずも川柳会　佐藤　治代報

残しとく昔のままの煙出し　ちえ
諦めているのに煙出している　美江子
禁煙へ意志の弱さを暴かれる　昌枝
もみ消しの煙くすぶる外務省　まこと
男の目煙を吐いて攻めてくる　治代
いたずらな煙だ涙止まらない　多喜
平伏して月のお告げを待っている　圭詩朗
権力に伏さず歯切れよく生きる　芳枝
目を伏せてあなたの愛を待っている　茂美
血圧の上がるはなしだ伏せておく　紫晃
落ち椿地に伏せてから天を見る　すみこ
あしたの本音臍の辺りに伏せておく　寿美
憶測で何処まで飛ばす風の罪　芙佐子
口上手心の奥は測られぬ　房子

母の愛測りはいつも持っている　蘭水
性格を測る心配つきまとう　篤子
目測を確かめ跳ばす千羽鶴　多賀子
どう出るか風を測ってから決める　桂子
目測を誤り溢れ出すスープ　玲子
慰めは言わずに肩を抱いてやり　竹夫
ぼた餅を食べて私をなぐさめる　満江
慰めを時々くれる里の四季　ちかし
反対に慰められた老いの杖　叮紅
慰めるつもりだまって手を握る　多輝子
がむしゃらに走って来たねお父さん　きみえ
走るのを止めたらわたし負けになる　昭二
よく走る友が隣でよくしゃべる　久子
老夫婦慰めあって生きている　与根一
慰めの言葉届かぬ腹の虫　淞丘
夏帽子沖へ沖へと走り出す　章峰

あおば川柳会　清水　潮華報

老いるとは錆びることだと鏡見る　達也
介護する明日のわが身をフト思い　句多留
子の未来信じて塾へ通わせる　政勝
算数の苦手は遺伝かも知れぬ　道子
少子化と介護寿命を脅かす　絹子
さび付いた釘がわが家を支えてる　徳三
あと幾つ坂を越すのか夫婦道　かず枝
少年の夢消えてダンベルも錆びる　サト子
手を焼いた息子大人の顔でいる　かづ子
重ね塗りしても昔の錆が浮き　鈴美
算数が得意で家計火の車　嘉信

暗算が弱くてレジに笑われる　三郎
花嫁を夢見て縫った母の愛　笑子
算数が得意なはずが赤字です　亜希子
分数をスイカで学ぶ夏休み　八重子
計算に弱いがお釣り間違わず　裕峰
半世紀風化はさせぬ海ゆかば　街湖
ソロバンと読み書き出来て恙ない　ふみ
少子化の未来図老後寒くする　潮華

富柳会　池森子報

一粒の涙に溶けてゆく情け　鐘造
味のある言葉が紡ぐ糸車　和子
味のある一言でした披露宴　和代
はちきれる笑顔でカバーするお味　冬虹
太い根を遺し小さく母が逝く　一慧
遠方をものともせずに味求め　深雪
良心をいびつにさせたバラの刺　花梢
単線の駅にあの日のままの風　アキ
内緒話電波のように広がった　昭水
浄土まで持って行きたい内緒ごと　幸代
成功は涙と汗の塩かげん　奈保美
喋りたい喋りたくない内緒事　キミエ
内緒事互いに増える倦怠期　洋介
善人の失敗あれは急ぎ過ぎ　巳代一
病名をかくす空気の重い部屋　紅紫朗
小さいがやがてショパンを奏でる手　勇
小さな捻子時どきゆるみ物忘れ　夕子
あのねのねうっかり聞いて身がよだつ　一夫
口紅の筆順かえてみよう雨　ひろこ

評論家になって在野に馴れてくる　初太郎
腰が曲る天を担いだ悲のかたち　呑舟
伝統のにんにく食べて理屈なし　東雲
風向きを見て北風をねじ曲げる　たかし
こわれそうな夢を抱いてるシャボン玉　浩子
伝統の重みで軋む能舞台　誠
引き出しにしまうこわれた内緒ごと　信子
内緒流して結束力をあたためる　かなこ
お見舞のリンゴとメロンせっている　宏至
人生は七転び八起き風薫る　春蘭
情熱の限りに亡母よ蝉時雨　森子

岬川柳会（前月分）　八十田洞庵報

婚約指輪ばれたふりして自慢する　とみ
釣書には書いてなかった酒の量　勇
お喋りな子どもがばらす一大事　みやこ
ポケットのマッチがばれる事になり　東雲
ついた嘘自分の顔がばらしてる　茂平
裏帳簿マルサの目にはばれている　洞庵
隠してもベルトの穴が知っている　富美子
口裏を合わすも母は見抜いてる　年子
ばれている事も知らず虚勢はる　桜琴
魂胆が丸見え下手な猿芝居　里子
余生まだ燃えるものあり風を待つ　俶子
久々に友にもばれる染めん髪　悦子
ばれる嘘顔見て分かる母が居る　よし子
燃える陽が部屋の隅まで覗き込む　令子
炎天下かげろう燃えて引きこもり　勝
グランドに燃える命の青春譜　和香

阿呆になる球場が燃えている　みつこ
燃えつきて涙で重い砂詰める　昌夫
振袖の遺影に手向く香悲し　孝子
職なくて何の施設と青天井　蛙城

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

野の仏やんわり風が抱いている　メ女
仏さん朝から嘘を言いました　しげお
お仏飯ひからび詫びる旅帰り　知香子
喜びをまず知らせよう仏壇に　博子
仏さん帰らはったら会いに行く　千津子
盆がえり誰もいなかった仏様　都代子
ひそひそと包む金額相談し　英子
密談に女将の堅い堅い耳　重人
ひそひそとそんな事かと笑いだす　啓生
先生も秘書もひそひそ永田町　玲子
不器用でまるい心になりきれぬ　萬的
遠い日の記憶に丸いにぎり飯　つえ子
母さんのひと言　話丸くなる　慶子
夫婦円満　円周率は3でよい　実
丸出しの大阪弁でパリを往く　則彦
いい話　重い空気を丸くする　和子
母の手の形に丸いにぎりめし　諷云児
十一桁これが私かよろしくね　郁子
番号はいらぬ孫との糸電話　正坊
欠番で偉業称える名選手　庸佑
番号をうっかり忘れ引き出せぬ　千里志
運のよい番号ですぞ尻上り　春
この人も郵便番号書いてない　寿美子

朝顔に力負けした夏のバラ　求芽
裸一貫になりて己の弱さ知る　吉太郎
一会かも素敵な人と流れ星　蛙
子や孫の世代想うて寝つかれず　久太郎
亀よりものろい私を許す人　満寿巳
難民の飢えに追い討ちかける夏　柳宏子
どっと出る男の汗は美しい　紫香

川柳藤井寺　高田美代子報

雑草の如く生きよと父の遺書　大八
休耕田我が世の春をおう歌する　喜代子
雑草の花喝采をまだ知らぬ　重人
越冬の雑草にあるど根性　終一
雑草も馬草も刈った少年期　みよ子
雑草にとても勝てないこの暑さ　アヤ子
雑草もメーンテーブル飾る夢　桂子
人間に化けたタヌキと出会う街　彰夫
夕茜向こうに会いたい人がいる　ヨシ枝
よたよたになっても酒と会っている　栄一
さくらんぼふと幸せに会う予感　みつこ
苦手とも会わねばならぬ重い靴　鐘造
再会をためらう傷が一つあり　龍一
もう会えぬ喪中ハガキのむなしさよ　美智子
鬼に会い仏に会うた人の道　和樹
人前は偶然会ったことにする　志洋
河内音頭時を忘れているゆかた　悦子
浴衣から覗く素足にある魅力　雅枝
王手飛車待ったまてぬと浴衣掛け　恵勇
ゆかた着ると金魚すくいがしたくなる　扶美代
土産選る丈のあわない宿浴衣　六点
河内音頭聞くとうきうきするゆかた　昭子
着てくれる娘がいて浴衣生きかえる　絹歌
内股に歩きやと浴衣着せかける　一筒
ヘボ将棋にらむ浴衣の腕まくり　一知
一応はゆかた縫えると自慢する　瑠美子
処刑のように夕べのゆかた吊される　婦美枝
着こなして美醜混在するゆかた　かつみ
藍染めのゆかたに遠い無言劇　千里
ハンカチに喜怒哀楽のうらおもて　春蘭

川柳ねやがわ　江口度報

土用入り熱い番茶で老い二人　弘一
あの二人熱さめたらし花時計　度
諦めろ二人は熱いあつい仲　一笑
大人よりでっかい児どもの電車賃　とし子
イエスマン矛盾あろうと無かろうと　光子
法律の矛盾に泣いた遺産分け　三峰
我がことになると矛盾に気づかない　洋
まつりごと木の葉が沈み石流れ　忠央
平和論背中に武器はそっと売り　一風
やんわりと妻が矛盾をついてくる　勇太朗
並々と注いでくれたが愚痴続き　博泉
注ぎこぼす間ももどかしく飲むビール　茜
正座して親に酒注ぐ嫁ぐ朝　波留吉
一日の汗に感謝のビール注ぐ　かすみ
涸れはせぬ注ぎ続ける母の愛　庸佑
白い手が貴方が好きとビール注ぐ　三郎
広告の薬で死者が出る怖さ　ルイ子
広告の隅に小さく中国産　順三
来るまでは誇大広告してた嫁　弘風
チンドン屋付いて歩いたよい時代　高栄
口コミの広告誠意売っている　恵子
広告の地酒にふいと途中下車　たもつ
湯むきするトマトへ白い母の指　あやめ
また違う身の上話聞かされる　利昭
おぼれようあなたが海であるのなら　礫
幼日に思いを馳せる蝉しぐれ　仁清
推敲してから息吹き返す文字　亜成
さよならの握手に明日のない予感　修
兄弟子がくれた字引に頼りきり　冬葉
豪快に注ぐビールの今日の幸　英壬子

倉吉川柳会　竹信照彦報

デジタルになって時計の針が消え　泰輔
山道でアケビが一つ隠れてる　一夫
凛として投入堂は崖に建つ　(前)喜美子
田を渡る緑の風に洗われる　節子
横綱を投げてモンゴル国の顔　賀寿恵
投票所カメラが私ねらいうち　康子
苦労して買った田んぼが老いの枷　重忠
田の端で子にふくませたはった乳　克枝
脳萎縮付いていけないデジタル化　龍枝
君よ君アケビに負けぬ種ですぞ　十三男
使い捨てカメラを旅の友に連れ　かつみ
おさな子と田んぼを見てる三時間　和歌子
しぶ柿が歯型をつけて投げてある　石花菜
デジカメを列車の棚に置き忘れ　和枝

酒飲んで人生投げているんだよ　修
吠える犬当らぬように投げる石　ゆり子
先生も知らない田植子らとする　よしえ
十年のぬくもりまとめ芥に出す　和子
三反の田圃と母が捨てられぬ　芳光
一心に蛇の姿でアケビ採る　次男
若い頃馬で鋤き掻き思い出す　志郎
投げ返す熱い言霊キャッチして　悠子
無農薬田んぼに虫の合唱団　智子
生き恥を投げて曝した悔いがある　螢
アケビ割るその指先の誘いかな　忠良
許し合う形で熟れてくるアケビ　きみ子
山にないアケビが庭で熟れだした　やえ
改革を投げる政治の皿まわし　小生
愚痴投げる前にポケットからこぼれ　雄々
燃料が切れてデジタル顔がない　照彦

岬川柳会　八十田洞庵報

無駄話しているうちにヒント湧き　とみ
バーゲンで得したように無駄を買う　勇
昼夜なく飛び交う電波無駄話　和美
かな文字の流れつややか恋のうた　みやこ
盾ついた意地も流れた姑年忌　みつこ
せせらぎをわがものにして鮎流れ　勝
流言は防ぎようないはやり風邪　俶子
今日の絵もあした描く絵も正直に　令子
晩酌が減った夫のまるい背な　重人
紫陽花も雨の音符が弾んでる　和香
雷は小言聞かせて光り去る　悦子
葱坊主風に揺られて夏至となる　富美子
横綱が休めばまねて皆休む　昌夫
母からの着物が似合う歳となる　よし子
似合う服あるまで粘る試着室　年子
総合誌知ったかぶりと良い子ぶり　蛙城
県政とダムの流れを変える知事　里子
五ツ星ホテルに似合う服を買う　桜琴
インタビュー受けて流れる滝の汗　茂平
君のテンション少し曲っていませんか　洞庵
口下手を心でカバーする努力　孝子

南大阪川柳会　吉川　寿美報

作者名書いた産地の味自慢　朝子
偽りの美徳産地の顔かくす　珠美
産地直送母が選んだ嫁が来る　シマ子
産地からなにわへ鱧の荷が届く　雅文
産直に集まる主婦が姦しい　なぎさ
産地よりデパ地下街が安いかも　叡子
外観はとてもきれいな毒きのこ　たもつ
台風となぎの日まるで違う海　度
外観に惚れて一生苦労する　久子
外観でカモフラージュする弱者　頂留子
再生へスクラムを組むアーケード　憲太郎
アーケード抜けて子の声駄菓子屋に　直子
真夏日は日傘替わりのアーケード　敏幸
涼しげに絽着る女が抱く火種　ひさ乃
真打ちが脱げばシャリッと絽の羽織　章久
習性で読み切るまでは目が冴えぬ　柳伸
読切って石打ったのに敵が上　初太郎
涙して母の便りを読み切れず　弘泰
長篇を読み切りほっとたばこの火　庸佑
読み切りが気楽でいいと小半日　千梢
この辺で読み切りにしとこ自分史を　朝代
外観は温和心に秘めている謀反　千里
その裏は見ないで下さい映画村　萬的
豪華陳列パン焼く店と思えない　東雲
青年の希望も育てている産地　アキラ
ドライブで獲れたてを買う道の駅　重人
外観はどうあれだいぶ貯めてはる　三男
米朝の汗を知ってる絽のきもの　志華子
試食させ産地自慢の国訛り　遠野

むらくも川柳会　毛利　幸報

夕涼み散歩ながらに土手を行く　彰
草むしり身体へとへと気は晴れる　定子
盆掃除水くみへとへと玉の汗　仲子
初秋の風にひぐらし声張り上げる　明朗
朝夕に鳴くひぐらしに過去偲ぶ　幸
台風前何故かピンクの雲が浮く　秀子
雲海の上に聳える山見てる　信夫
孫の背を見上げて祖母の笑い顔　恵美子
やれ暑い秋は何時来るかしら　ます美
また来たか酒好き友が今日は　幸夫
八十路坂思い出語る同窓会　寿
もしもしと孫との会話する日課　昭子
道案内すべて機械がしてくれる　まさ子
しあわせは家族みんなの笑顔から　美喜子
取敢えずこたつの上に置くかばん　八重子

柳界展望

■7月7日の第11回NHK川柳大会受賞作品
〈石川県知事賞〉
やんわりと笑顔自説は譲らない　増田　紗弓
■第57回尼崎文芸祭川柳部門第二席に池内かおりさん（香川県）が入賞
肩に手を置かれて負けたなと思う
〈佳作〉武本碧・川上大輪・川島諷云児・吉田あずき・中井アキ・高田美代子・青枝鉄治・岸本宏章
■第3回文学ルート川柳に城多喜さん（出雲市）が奨励賞を獲得
「渚」（今治市募集）
渚にはお伽ばなしが流れ着く
■第3回四万十川柳全国大会で、出口セツ子さん（箕面市）が大会賞を獲得
九条も四万十川も守り抜く
■第33回奈良新聞川柳大会は、8月25日奈良県文化会館で288名の参加により開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。
遡るあの日の海の青さまで　池　森子
お茶だけに誘われ涼しい過去にする　宮西　弥生
■川柳塔みちのくでは、平成十四年度みちのく大賞を次のとおり決定
ほっとする柩の底の肌ざわり　一戸　ツネ
準優秀作三席　西谷　大吾
▼御芳志御礼▲
■木村貴代子さん（神戸市）から、夫君木村智氏の供養として金一封拝受。
▼表　彰▲
★社団法人全日本川柳協会は、常任幹事以上の役員を10年間以上勤めた者28名を表彰、功労賞を授与した。川柳塔社関係は次の4名。
橋高薫風・小林由多香・野村太茂津・田中正坊
■大会連続10回参加表彰は大橋政良氏（同人・砂川市）
▼出　版▲
■田中正坊氏（参与・豊中市）は、『あかつき―赤旗川柳百人一句集』を編集・発行し、作者と希望者に配布した（A6判・60頁）。
■小寺花峯百句集『ひたすら酒に』川柳塔みちのく句集第18集・A5判38頁
▼人事往来▲
■天笑主幹は第56回青森県川柳大会の特別選者として8月24日～26日青森行。
■板尾岳人理事長は9月1日第54回西日本川柳大会の選者として岡山県弓削町行。
■桜井千秀さん（理事）は九月から、毎日新聞和歌山柳壇選者を務める。

新同人紹介

星野（ほしの）　きらり
―天笑・春推薦

山本（やまもと）　宏至（ひろし）
―天笑・春推薦

■『知的に楽しむ川柳』（復本一郎著・日東書院）で、黒川紫香相談役が90歳半ばの超ベテラン作家として紹介された。
▼訂正とお詫び▲
9月号＝P106上段7行目、木隅→木**偶**　P119上段23行目、戦い→**いくさ**
▽常任理事会△
■9月4日＝出席17名　①13年度会計報告　②まつり各部署の係の確認　③六賞内定報告　④各地川柳会実態調査報告　⑤新任役員検討　⑥特別常任理事会の件　⑦合祀祭について　⑧国文祭参加依頼　⑨11月～3月本社句会の時間　⑩その他
▽特別常任理事会△
■9月30日（月）13時からアウィーナ大阪206号室。参与以上はご出席下さい。議題＝①平成13年度同人総会について　②第8回川柳塔まつりの件　③川柳塔合祀祭　④その他
次回常任理事会＝10月21日

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	19日(土) 吟行 心・踊る・スランプ・自由吟	お問合せ先 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会梨花	19日(土)午後1時から 魔・調べる・一本・おぼろ 雑詠	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4—268—205 宮木方 坂田和歌子
堺川柳会	**第29回堺まつり紙上川柳大会** 10月20日締切	**(10月号 P.48掲載)** **投句先** 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3 河内天笑
岸和田川柳会	20日(日)正午から **第52回市民川柳大会**	**10月号 P.112参照** 春木市民センター3F
東大阪市川柳同好会	20日(日)正午から **第30回市民川柳大会**	**10月号 P.112参照** 東大阪市立社会教育センター
川柳ねやがわ	20日(日)正午から 素顔・考える・寄る・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 大胆・憧れ・熟年・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	21日(月)午後1時から ぽかぽか・止まる・隙・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪川柳会	23日(水)午後6時から 知恵・煮・ビッグ・身柄	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブわたの花	25日(金)午前10時から 仏・薬・雲・学・血・無・棚	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
はびきの市民川柳会	27日(日)午後1時から 調子・バイク・こそこそ 「蹴る」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳ふうもん吟社	27日(日)午後1時から 反・真っぴらだ・プロ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2 植田一京
京都塔の会	28日(月)午後1時から 角(つの)・こやし・変化	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	28日(月)午後7時半から 菊・柿・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

10月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 なら	3日(木)午後1時から 回り・テープ・美術	船橋フロムワン（船橋商店街内） 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 郷愁・笛・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
倉吉 川柳会	5日(土)午後1時から ミミズ・しなやか・閉じる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津支部	7日(月)午後1時半から 駅・午後・反省	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 密談・回転・臭い	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後1時半から 褒める・笑い・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊹番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47 田辺鹿太
川柳塔 打吹	12日(土)午後1時から ズカズカ・加減・円	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 随筆・料理・棘	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22 三島淞丘
川柳塔 みちのく	12日(土)午後4時から 理屈・妬む・足音	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川柳会	13日(日)午後1時から メルヘン・実る・ためらい 妥協	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 十・感激・カメレオン たこ焼き	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 疑い・くずれる・飴・自由吟	**西宮市民会館** 5階（10月のみ） 西宮市役所南側・阪神西宮北出口東へ3分 〒662-0841 西宮市両度町2—19—515 山本義子
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から 食欲・まだまだ・灰・旅支度 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8 川島諷云児
富柳会	19日(土)午後12時半から **富田林市民川柳大会**	**10月号 P.112参照** 富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m）

編集後記

☆平成十四年度六賞受賞者の皆さん、おめでとうございます。〝川柳塔まつり〟のメーンイベントである表彰式でお会い出来るのを、楽しみにしています。

☆偶然にもこの3年、10名の受賞者のうち男性3名対女性7名という比率になっている。女性軍の活躍振りは頼もしくうれしいが、男性軍のより一層の奮起を期待したい。

☆とうとう携帯を持った。近くの商店街で買物をしていたら雨が降り出したので、迎えを頼むため公衆電話を捜した。最近まであちこちにあったはずなのに無い。携帯普及のせいらしい。仕方なくビショ濡れになって帰り、頭にきたのが直接のきっかけである。

☆フツーのおばさんの私はご多分に洩れずIT-オンチ。使いこなせずリタイアするのではないかと心配していたが、以来20日通話はもちろんメールもこなしている。

☆それというのも「お助けマン」、つまり中一の孫のお陰である。彼が留守の時トラブルが生じたら、帰るまでそのままじっと待っている。「本を見たら書いてあるのに」とあきれられているのだが、A5判576頁のマニュアル本を手に取るさえ、蕁麻疹が出そう。解らなくてとても日本語で書いてあると思えないもの。

☆持ってみた感想だが、やはり便利。メールに関しては電話でも手紙でもない、全く新しいジャンルだと思う。目下せっせと利用しているので、リタイアの心配は消えたが、今度は通話料の心配をしている。（ふ）

とこひと

川は流れて

阿萬　萬的

「三尺流れれば水清し」とか、もめごとが起っても「水に流す」という言葉があるのも、実は川には自然浄化作用というものがあるからなのです。

自然浄化作用とは、河川にはいり込んだ有機物を、バクテリアや底や岸についている細菌や、単細胞生物などが食糧にしたり炭酸ガスや水に分解してしまうことである。

ところで不思議にも思えることに、我が国の河川の自然浄化作用の能力は二、三日で汚れを十分の一にするのだが、アメリカなどの大きな河川では、五～十日もかかると言われています。

日本が山紫水明の地と言うのも、こんなところに原因があるのかも知れない。

川は流れる流れてきれい詩を作る

萬　的（〝科学のたわごと〟から）

○〝人生はある意味で習慣がすべてである。一つの習慣を破ることが、新しい習慣をつくる〟と以前何かで読んだことがある。

私はこの頃よい習慣は続かず、怠ける習慣ばかりで勿体なくも余命表を塗り潰しているような気がする。

例えば以前は、毎日少しずつでも、時間を割いて作句を習慣づけていたのだが、いつのまにか、締切日、句会前日に慌てて作句という始末である。

今夏の異常な暑さが続いて以来、一日五千歩の散歩もやめてしまい、なるべく外へ出ない習慣となってしまった。

○「眠らない」「眠る」「眠れば」私のラ行五段活用は、「眠りたい」「眠れない」と続く。もともと寝つきが悪いのだが、ベッドに入ると、雑念、悩み、一日の悔い等が頭の中をかけ巡り、入眠を妨げる。本を閉じた途端に眠気はふっ飛んでしまうという厄介な病いを持つ。朝夕のウォーキングや運動で、体温を上げると、熱放散に勢いがついて快眠につながり、寝つきもよくなると、新聞健康欄には書いてある。

いろいろと試し、模索しながら、よい習慣をつけようと、ただ今努力中。（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（12月号）　地名　　姓・雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

きりとりせん

作品募集

12月号発表（10月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選
水煙抄（8句）　奥田みつ子選
愛染帖（3句）　波多野五楽庵選
茴香の花（3句）　政岡日枝子選
「駅」　中田あい子選
課題吟（3句）
「午後」　薗田獏沓選
「反省」　垰寛子選
初歩教室「ほどほど」（3句）吐田公一担当

1月号
課題吟「拝む」「白」「運」
初歩教室「初」

平成14年度 大阪文化祭

第54回　川柳大会

とき　11月16日（土）
ところ　大阪市立北区民センター
（地下鉄「扇町」駅、またはJR環状線「天満」駅から5分）
宿題（各題2句・13時締切・出席者に限る）
「ことば」　河内天笑選
「時事雑詠」　前田咲二選
「大阪」　竹森雀舎選
「隣」　中井大八選
「乱れる」　辻葉選
「風」　吉田右門選
席題　当日2題発表します
会費　1000円（作品集後日郵送）
賞　各題秀句に各主催者名「川柳賞」
主催　大阪府・大阪府教育委員会
大阪市・大阪市教育委員会

本社11月句会　2日(土)午後1時から

兼題　「ジンクス」「字」「占める」「自信」「つくる」

夜市川柳募集

第5回「澄む」　小林すみえ選
ハガキに3句　10月末締切
投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花欄・一路集（課題吟）および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料84円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇二年（平成十四年）十月一日発行
編集兼発行人　河内權治
印刷所　美研アート
〒545-0005
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六三六―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成十四年十一月一日発行（毎月一日発行）

『全日本柳人写真名鑑』発刊について

日川協では全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を社団法人設立以来、5年ごとに発刊、好評を博してきました。前回から5年目にあたり、さらに体裁・内容を一段と充実した平成15年版を刊行したいと存じます。皆様方には一人残らず、この名鑑に名を連ねられますよう、お勧めいたします。

資格　参加者は柳人であればどなたでも結構です。

内容　各人ごとに、①氏名（雅号）②生年月日③職業④所属柳社⑤住所⑥電話・FAX⑦メールアドレス⑧顔写真⑨自薦作品三句（所定用紙があります）を掲載

体裁　A5版・本文アート紙約500頁・美装本

刊行　平成15年3月予定（参加者に1冊送付）

参加費　4000円

締切　平成14年11月15日（金）

申込先　〒530-0041
大阪市北区天神橋2丁目北1—11—702

社団法人　全日本川柳協会
TEL（06）6352—2210
FAX（06）6352—2433

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL（06）6372-1178

雑誌　05703—10